

茨城県稲敷郡美浦村

野 中 遺 跡

—第2次発掘調査報告書—



2000

美浦村教育委員会

美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書 8

茨城県稲敷郡美浦村 野中遺跡 第2次発掘調査報告書 正誤表

箇 所	誤	正												
例言 19行	黒澤晴彦	黒澤春彦												
例言 19行	高橋嘉郎	高橋嘉朗												
例言 20行	平田満夫	平田満男												
8頁 第5図 スケール	50m .	30m .												
15頁 左段 5行	東西1.5cm	東西1.5m												
17頁 左段 7行	Lを卷いた	L(細)を卷いた												
26頁 写真19 右上下	9	7												
38頁 18~22行及表1	コナラ属コナラ亞属	コナラ属コナラ亞属												
44頁 左段 31行	北西—南東方向2.85m	北西—南東方向3m												
44頁 左段 31~32行	北東—南西方向3m	北東—南西方向2.85m												
53頁 左段 15行	遺構外に	調査区外に												
64頁 右段 13行	池平遺跡SI-12, 22	池平遺跡SI-12, 16, 22												
73頁 弥生土器縄文原体 集計表	()は同一個1点	()は同一個体を1点												
79頁 遺構別土師器・ 須恵器出土点数	<table border="1"> <tr> <td>5件</td> <td>6件</td> </tr> <tr> <td>16 (16)</td> <td>356 (188)</td> </tr> <tr> <td>6 (2)</td> <td></td> </tr> </table>	5件	6件	16 (16)	356 (188)	6 (2)		<table border="1"> <tr> <td>5件</td> <td>6件</td> </tr> <tr> <td>16 (16)</td> <td>356 (188)</td> </tr> <tr> <td>6 (2)</td> <td></td> </tr> </table>	5件	6件	16 (16)	356 (188)	6 (2)	
5件	6件													
16 (16)	356 (188)													
6 (2)														
5件	6件													
16 (16)	356 (188)													
6 (2)														

茨城県稲敷郡美浦村

野中遺跡

—第2次発掘調査報告書—

2000

美浦村教育委員会



第7号住居址からは土製支脚3点がが址を囲んで出土した（帶状に見えるのは住居構築前の風倒木痕）



第6号住居址から出土した変形土器（右から17,18,19）

序

美浦村には、国史跡陸平貝塚や木原城址をはじめ、数多くの貴重な遺跡が存在します。このことは、当地が太古から人々の豊かな暮らしを育んできたこと、また、地域の人々が先人の文化を大切に守ってきた歴史があることを示しています。このような先人の想いが詰まった遺産を知り、それを守り、さらに活用することによって未来に継承していくことが、悠久の歴史の中で現在の私たちがなすべき役割であると思っております。

発掘調査はそのような過去の文化を知るにはまたとない機会であり、この度の野中遺跡の調査も大きな成果をあげることができました。野中遺跡がある村役場周辺地域では、以前、庚申古墳が発掘調査され、金環やガラス小玉などで飾られた古代の人骨が発見されています。今回の調査では多数の住居の跡がみつかり、その古代人たちの生活を知る上で重要な資料が得られました。特に、炉を取り囲むように3つ並んで出土した土製の“五徳”は、古代人たちの日々の暮らしぶりを彷彿とさせるものといえます。本書が刊行されたことにより、その成果がさらに広く活用され、新たな美浦村の文化を創造する財産になることを願う次第です。

最後になりましたが、埋蔵文化財の重要性を理解され調査に多大なご協力を賜った株式会社スーパーカドヤと有限会社ヨシミネをはじめ、関係者の皆様方と調査に参加された方々のご支援・ご尽力に対し、心より厚く御礼を申し上げます。

平成12年3月

美浦村教育委員会
教育長 塚本 和夫

例　　言

1. 本書は、茨城県稻敷郡美浦村請領字野中 1552-1 外地内に所在する野中遺跡にかかる、株式会社スーパー カドヤ店舗開設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の主体者は美浦村教育委員会で、調査組織は以下の通りである。
教育長　塙本和夫
生涯学習課長　諸岡正明（平成11年3月退任）、村崎友春（平成11年4月就任）
生涯学習課文化財係長　増尾尚子（平成11年3月退任）、岡田守（平成11年4月就任）
生涯学習課文化財係学芸員　中村哲也（調査担当者）、川村勝、馬場信子
3. 調査参加者は以下の通りである。
現地調査　中島重一、椎塚隆二、殿岡達夫、小泉正治、市川一男、海道民子、松葉英治
整理作業　波多野洋子、海道民子、小口伸子
4. 本書作成にあたって、石材については茨城県自然博物館の遠藤好・小池涉両氏に同定をお願いし、出土炭化材の樹種同定については株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。
5. 本書の編集・執筆は、株式会社パリノ・サーヴェイの分析報告を除いて、中村が行った。
6. 調査に関わる図面・写真・遺物等の資料は、美浦村教育委員会が一括して保管している。
7. 発掘調査から本書の刊行に至るまでの下記の諸氏・諸機関にご指導、ご協力を賜った。記して感謝する次第である。（敬称略、五十音順）
阿部有花、阿部芳郎、飯塚廣、石川功、石川日出志、石橋充、海老澤稔、小口英一郎、樋村宣行、木村正、木村愛子、黒澤晴彦、黒澤浩、湖口淳一、小玉秀成、塙谷修、白石真理、鈴木正博、岡口満、高橋嘉郎、千葉隆司、鶴見貞雄、比気君男、平田満夫、深谷昇、増尾恭子、宮本礼子、村田六郎太、茂木文緒
茨城県教育庁文化課、茨城県南教育事務所、陸平調査会、株式会社スーパー カドヤ、三友測量株式会社、明治大学考古学博物館、有限会社ヨシミネ

凡　　例

本書における図中・表中の表記は、特に指しの無い限り下記の事項を示す。

1. 遺構断面図で地山を示す斜線の無いものは、断ち割り調査による観察を行ったものである。
2. 遺構実測図の中で、粗い網点は焼け込み焼土の、長い破線は床面硬化部の、短い破線は貼床の振り方及び推定復元線を、一点破線は搅乱の範囲を示す。また、Pはピットの略である。
3. 土器実測面で、表面の網点は赤色塗彩が施された部位を、断面の網点は須恵器であることを示す。
4. 土器実測図の縁側に付されている「-」は、弥生土器では繩文施文部の境を示し、土師器の場合、II縁部のものはそれより上位に、脚部のものはそれより下位にヨコナデ整形板が認められることを表す。
5. 遺構の略称として、住居址は「住」、溝状遺物は「溝」、土坑は「土」を用いた。(例：第1号住居址→1住)
6. 卷末の観察表に示した土製品・石器・滑石製造物の「長さ(高さ)」、「幅」は、図示した正面図の位置で、展開の基準線に平行し、しかも遺物の輪郭に外接する長方形の辺長にあたる距離を計測したものである。土鍬や剥片等観察表の註で指示したもの以外は、距離が長い方を「長さ」、短い方を「幅」として計測していく。但し、未図化の碎片については最も距離が長くなる方向を「長さ」、それに直行する方向の最大値を「幅」とした。一方「厚さ」は「長さ(高さ)」・「幅」の計測面に対し垂直する方向の計測値である。
7. 本書掲載の実測図の縮尺は、住居址平面図 1/60、上坑平面図 1/30、断面図 1/60 又は 1/30、土器復元実測図 1/4、土器拓影図・土器破片図 1/3、土製支脚 1/4、他の土製品 1/2、鉄器 1/2、石核・剥片・滑石製造物 2/3、他の石器・石製品 1/3 である。

目 次

口絵

序

例言・凡例

目次

I 遺跡の立地と歴史的環境	1
野中遺跡の位置と地形／野中遺跡の歴史的環境	
II 調査の経過と概要	3
調査に至る経緯／調査の方法／調査の経過／調査成果の概要	
III 検出された遺構と遺物	
1. 縄文時代の遺物	7
縄文時代の概要／出土した縄文土器	
2. 弥生時代の遺構と遺物	7
弥生時代の遺構と遺物の概要／第1号住居址／第5号住居址／第3号土坑 ／攪乱内土器集中地點／後世遺構内及び遺構外出土の弥生土器	
3. 古墳時代以降の遺構と遺物	22
古墳時代以降の遺構と遺物の概要／第2号住居址／第3号住居址／第4号住居址 ／第6号住居址／第7号住居址／第1号溝状遺構／第2、4号溝状遺構 ／第3号溝状遺構／第1号土坑／第2号土坑／③ビット群 ／第1号住居址出土の古墳時代遺物／遺構外出土の古墳時代以降及び時期不明遺物	
IV まとめと若干の考察	
1. 観察所見に基づく遺構・遺物の基礎的検討	58
第3号土坑に関わる現象・行為の復元／高杯形土器の住居址間接合について ／土築の岸滅について／土製支脚について／玉隨及びベグマタイト製造物について ／滑石製造物について	
2. 古墳時代変形土器の型式学的検討	64
引用・参考文献	68
付表	69
報告書抄録	82

I 遺跡の立地と歴史的環境

野中遺跡の位置と地形

野中遺跡は茨城県南部の霞ヶ浦南岸、稲敷郡美浦村のほぼ中央に位置する。美浦村の地勢は北と東が霞ヶ浦に向し、湖岸を中心に広がる沖積平野と樹枝状の谷（谷津）が発達した標高20～30mの稲敷台地からなる。村の東部には余郷入と呼ばれる干拓地が存在するが、戦前までは東から西へ向かって細長く入り込んだ霞ヶ浦の入り江であった。その余郷入を谷口部に、更に西へ続く谷津が約4kmにわたって村を東西に横断しており、野中遺跡は谷津の中流から北側に枝分かれした小さな支谷に面した、標高24～28mの台地上平坦部に立地している。（第1図）

遺跡の地形を細かくみると、遺跡が展開する台地平坦部の東側は南東から入り込んだ支谷の谷頭に面し、北、西、南側は西から回り込んだ支谷が更に枝分かれした3つの谷津によって区切られている。遺跡の広がりが予想される台地平坦部は東西・南北とも300m程の規模で、周囲の谷津との最大比高差は約13mである。（第2図）

野中遺跡の歴史的環境

余郷入から続く谷津の両岸から、霞ヶ浦湖岸の沖積地に面した台地にかけての地域には、数多くの遺跡が存在し、村内でも遺跡の密集地帯になっている（第1図）。縄文時代については、余郷入から続く主谷两岸に前期の興津貝塚〔西村1981〕、前・中期の虚空蔵貝塚〔大川他1977〕、早・中期の大谷貝塚、中・後期の半木貝塚といった縄文時代の早期～後期にわたる貝塚を有する遺跡が散在する。

野中遺跡の主体となる弥生時代以降については、主谷の谷奥部に弥生時代中期末葉の住居址が検出された當陸笠山遺跡〔大竹他1986〕が位置し、上流部には平安時代の集落址である摩迦陀遺跡が存在する。一方、野中遺跡と同様に、主谷から派生した支谷に面した集落遺跡としては、主谷北側に古墳時代中～後期の原遺跡等があり、

主谷南側には古墳時代中期の興津白井遺跡や、平安時代の原畠遺跡、稚荷山遺跡〔奥富他1996〕が点在する。また、水系は異なるが、野中遺跡に接した東側の台地上には、弥生時代後期、古墳時代中～後期の集落址である八ヶ山遺跡、古墳時代中期の住居址が検出された請領妙山遺跡などが存在する。

台地上の遺跡ばかりではなく、野中遺跡とはやや離れるが、霞ヶ浦に面した砂丘上の微高地には、古墳時代及び平安時代の住居址が検出された岸内遺跡が立地する。また、古墳については、霞ヶ浦を望む台地上に築造された100mを越える中期の前方後円墳である愛宕山古墳を主墳とする木原白旗古墳群や、岸内遺跡と同じ微高地につくられた中期の大型円墳群を主体とする大塚古墳群など多くの古墳群が存在する。野中遺跡自体は八枚原古墳群に属しており、遺跡から南東の舌状台地上にかけて小円墳が散在している。その内の庚申古墳は野中遺跡とは小さな谷頭を挟んで南側に隣接する後期古墳で、箱形石棺から人骨、金環、青銅環、ガラス小玉が検出されている〔大竹他1989〕。

なお、弥生時代・古墳時代における霞ヶ浦の水域環境については、自然科学分析によるデータの蓄積は充分ではない。ただ『常陸國風土記』の浮島の塩焼等の記述をも参考にするならば、まだ海水域であったと推測される。

これら霞ヶ浦と谷津という生産基盤になり得る自然環境をひかえて密集する古代の遺跡群は、相互に関連を持ちながら各時代・各時期ごとに形成されたものと考えられるが、特に野中遺跡における古墳時代集落址は、その規模からいって中核的な性格を有していたものと思われる。



第1図 野中遺跡周辺遺跡分布図

1. 野中遺跡 2. 興津貝塚 3. 虚空藏貝塚 4. 大谷貝塚 5. 平木貝塚 6. 常陸笠山遺跡 7. 神田遺跡 8. 八ヶ山遺跡
 9. 木原城址 10. 下り内遺跡 11. 御茶園遺跡 12. 原遺跡 13. 茂呂天神遺跡 14. 諸領妙山遺跡 15. 摩迦陀遺跡
 16. 興津白井遺跡 17. 高野台遺跡 18. 原畠遺跡 19. 稲荷山遺跡 20. 岸内遺跡 21. 大谷谷津台遺跡 22. 庚申古墳
 23. 八枚原1号墳 24. 愛宕山古墳 25. 木原白旗2号墳 26. 同居塚古墳 27. 大塚弁天塚古墳

II 調査の経過と概要

調査に至る経緯

第1次調査

野中遺跡は平成4年に、民家の開発行為に伴い発見された遺跡で、遺跡の北西部約10,000m²については、記録保存のための発掘調査が、平成5年10月～平成6年3月の期間、美浦村教育委員会によって実施されている。

この第1次調査では、弥生時代後期の住居址5軒、古墳時代～後期の住居址19軒、掘立柱建物址9軒、円墳1基、時期不明の溝状遺構3条、土坑6基が検出されている。遺物としては、縄文時代の前期浮島式及び中期加曾利E式土器、石鏡、弥生時代後期の土器、台石、石英碎片、古墳時代の土師器及び須恵器、磨石、砥石、紡錘車、球状土鍤、鉄器、ガラス小玉、ミニチュア土器、双孔円錐、刺形模造品・白玉・勾玉・管玉を含む滑石製遺物が出土している。

なお、第1次調査については現在整理中であり、上記した内容は現地調査時の所見を基にしたものである。

第2次調査に至る経緯

平成9年6月3日、株式会社スーパーカドヤより美浦村大字請領1552-1外地内における開発行為（店舗）に伴う埋蔵文化財の所在の有無及び取扱について、美浦村教育委員会に照会があった。照会地は野中遺跡第1次調査区の隣接地にあたり、埋蔵文化財が所在する可能性がきわめて高かったため、6月10日にテストピットによる試掘確認調査を実施した。結果、11ヶ所設定したテストピットのうち、4ヶ所から遺構や遺物が検出され、野中遺跡が照会地まで広がっていることが確認された。

6月12日付で、村教育委員会は埋蔵文化財が有る旨を文書で回答し、以後、県文化課をはじめとする関係機関に連絡を取るとともに、開発企業側と保存のための協議に入った。

開発に伴う許認可に見通しの着いた段階で、開発企業から文化庁長官に、文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく土木工事に伴う発掘の届出が行われた。そ

して平成10年3月18日に、土地の開発主体である有限会社ヨシミネと店舗を開設する株式会社スーパーカドヤ、それに村教育委員会の三者によって、「美浦村請領字野中地区埋蔵文化財に関する協定書」が締結され、村教育委員会による記録保存のための第2次調査が実施される運びとなった。

調査の方法

調査区の設定（第2、3図）

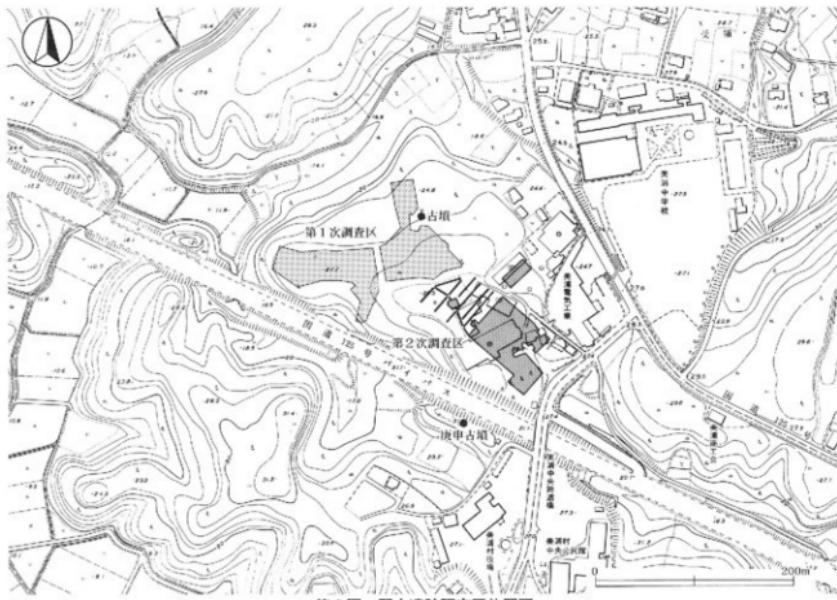
調査区の設定にあたっては、店舗等建物建設部分については全面発掘を行い、駐車場部分については地下の遺構に影響の無いように工事を実施することで現状保存する方法を探った。但し、全面調査区でも利用する立木や作業道路として必要な部分については未調査区として残し、駐車場部分の雨水排水管理設部についてはトレント調査を行っている。

全面発掘区は主要店舗部の①、②区とした調査区と付帯的施設を建設する③区に分かれる。②区は調査開始時点で廃屋が残っていたため、調査の進行上区分けた調査区である。また、現地調査を一旦終了した後、多少の設計変更が行われたため、トレントの増設による立会調査を追加調査として行った。

トレント調査区は対象地の北西部、第1調査区と隣接する位置にあたり、最終的に幅90cmのトレントが計13本設定された。全面調査区の①、②区は面積約3,600m²で、トレント調査区の南東側に位置し、③区は面積約370m²で、トレント調査区の北東側に位置する。調査区総面積は約4,000m²である。

発掘の方法

耕作土、客土、擾乱土からなる表土層は、重機（バックホーとキャリアダンプ）を使って除去した。各遺構は基本的にまずサブトレントによって覆土や割り方の状況を捉え、土層観察用の畦等を残しながら、分層された土層ごとに発掘を進める方法を探り、掘り方だけではなく



第2図 野中遺跡調査区位置図

く、覆土中の人為痕跡の検出に努めた。遺物については層位ごと、便宜的に遺構内を区画した平面区ごとの取り上げを基本としたが、造営・廃棄がされたことが明確なものについては出土位置と高さ、それに出土状態等を記録している。なお、平面実測は平板測量で行い、実測時の縮尺は住居址・土坑1/20、溝状遺構1/20～1/50、ピット群1/40、断面1/20である。

調査の経過

現地調査

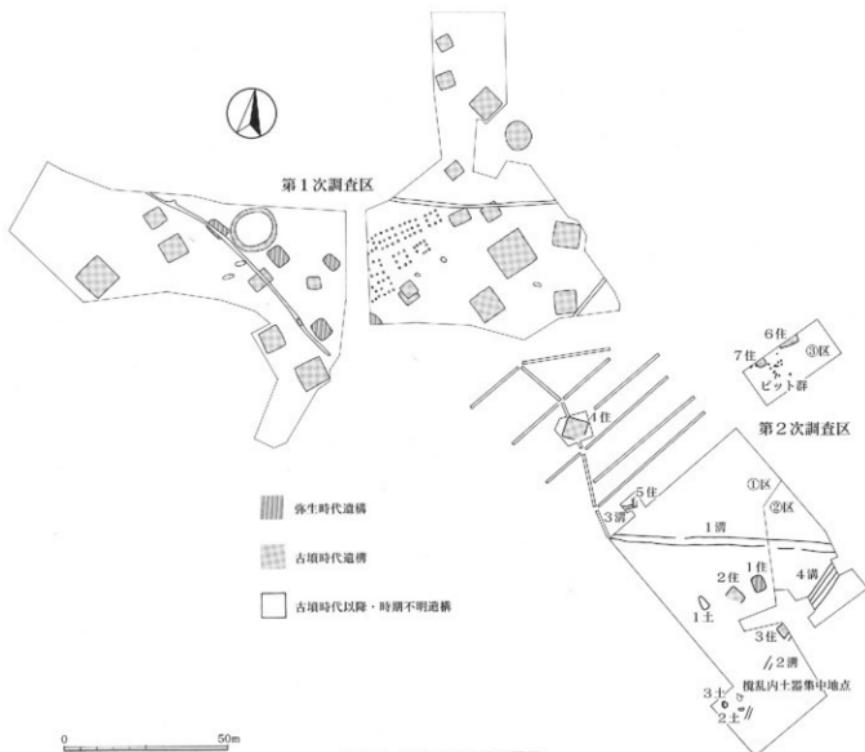
第2次調査の現地発掘調査は平成10年4月3日から同年6月8日まで約2ヶ月間にわたって実施された。調査地の草刈りと基準杭の設定は、事前に開発企業によつて行われている。以下、調査日誌抄を掲載する。

平成10年

- ・4月2日(木) 晴れ 現地にプレハブ、トイレ等搬入。
- ・4月3日(金) 晴れ 表土剥ぎ開始。文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づき「埋蔵文化財発掘調査の報告」送付。
- ・4月8日(水) 晴り 発掘器材搬入。
- ・4月10日(金) 晴れ 本日より作業員に入る。遺構確認開始(①区)。
- ・4月16日(木) 晴り ドレンチ部表土剥ぎ開始(①区表土剥ぎ終了)。遺構確認終了(①区)。



写真1 表土剥ぎ作業風景



第3図 野中遺跡遺構配置図

1溝調査開始。

- ・4月17日(金) 曇り後雨 トレンチ部表土剥ぎ終了。
仮設水道工事。
- ・4月22日(水) 晴れ 1土調査開始。
- ・4月23日(木) 晴れ 1住、2住調査開始。調査区内に測量杭設定。
- ・4月27日(月) 曇り後雨 調査区内(②区)の家屋解体(～28日)。
- ・5月6日(水) 晴れ時々曇り 3住、2溝調査開始。
- ・5月7日(木) 晴れ 2、3土調査開始。
- ・5月14日(木) 曙り後晴れ 4住調査開始。
- ・5月15日(金) 晴れ 重機による表土剥ぎ開始(②、③区)。

・5月19日(火) 雨のち晴れ 表土剥ぎ終了。

- ・5月22日(金) 晴れ 5住、3溝調査開始。中央公民館郷土史講座生見学。



写真2 ①区遺構確認作業風景

- ・5月25日(月) 曇り 遺構確認(③区)。
 - ・5月27日(水) 晴れ 遺構確認(②区)。
 - ・6月2日(火) 曇り 4溝調査。
 - ・6月4日(木) 曇り後晴れ 6住、7住調査開始。
 - ・6月8日(月) 晴れ ③区ピット群調査。本日で現地発掘調査終了。器材撤収。
 - ・6月12日(金)「発掘終了届」送付。
 - ・6月24日(水) 現地調査終了立会。
 - ・7月14日(火) 晴れ 遺構埋め戻し(～15日)。
- 平成11年
- ・1月16日(土) トレンチ増設による立会追加調査。

整理作業

整理作業は平成11年10月25日から開始した。同日から同年12月16日までは、臨時作業員を雇用し、遺物のクリーニング、注記、分類、接合、拓本取り作業を実施した。12月からは遺物の実測作業、写真撮影、及び報告書作成に向けてのトレース作業、原稿執筆を併行して開始し、平成12年2月まで継続した。

調査成果の概要

基本土層

表土層（Ⅰ層）は耕作土、客土、擾乱土からなり、客土、擾乱土が主体であった①、②区では35～60cm、耕作土が主体であった③区では20～35cm程の厚さを測る。調査区の大部分では、表土層直下が地山のローム層（Ⅲ層）になっていたが、①区の北部から②区の北西部にかけては、表土層とローム層の間に褐色土層（Ⅱ層）が最も厚い所で15cm程存在していた。このⅡ層とした褐色土層は、やや赤味がかった褐色土を主体に暗褐色土とローム粒子が混じるもので、第1調査区で広範囲に認められた褐色土層に対応する上層と思われる。

Ⅱ層が存在した部分から検出された第1分溝状遺構は、Ⅱ層上面（＝表土層下面）から掘り込みが認められたが、後述する他の遺構は、Ⅱ層が存在しない所から検出され、ローム層上面（＝表土層下面）が確認面であった。調査区内のローム層上面はほぼ平坦で、若干北東側に向かって傾斜していた。南西側にあたる①区西端では標高28.25m、北東側にあたる③区では標高27.6m前後

を測る。また、①区最南東側の北東角は谷頭部にあたり、ローム層上面の標高が27mと急に低くなっていた。

検出された遺構と遺物（第3図）

今回調査を実施した第2次調査区から検出された遺構は、弥生時代の住居址2軒（第1、5号）と土坑1基（第3号）、古墳時代の住居址5軒（第2、3、4、6、7号）と溝状遺構1条（第3号）、古墳時代以降の溝状遺構3条（第1、2、4号）と土坑1基（第2号）、時期不明の土坑1基（第1号）とピット群（③区）で、配置は第3図のとおりである。第1調査区と比べると遺構の密度が粗で、遺跡の周縁部にあたるものと思われる。

但し、調査区内には地山ローム層まで及ぶ擾乱が多数認められ、失われた遺構もあったものと考えられる。特に、瓦店が以前存在した①、②区とトレンチ調査部では瓦片等を廃棄した坑が多くみられ、中でも第4号住居址の北西側と北東側のトレンチ群、及び①区の第1号土坑の南西側は、ほとんど全域が擾乱に覆われていた。

遺物については、遺構内を中心に、縄文土器片10点、弥生土器片638点、土師器片2,834点、須恵器片16点、土錘11点、土器片利用研磨具1点、土製支脚3点、土製筋輪車1点、不明土製品1点、鐵鎌1点、刀子1点、敲石3点、砾石2点、板状石製品7点、玉隨製の石核1点、同剥片8点、同碎片4点、ベグマタイト製の石核？1点、同剥片2点、同碎片13点、チャート製の剥片1点、同碎片3点、安山岩製の剥片1点、双孔円盤3点を含む滑石製造物29点が出土している。

III 検出された遺構と遺物

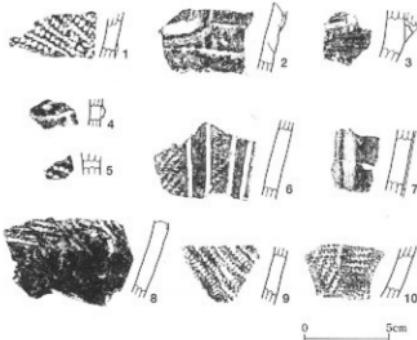
1. 繩文時代の遺物

繩文時代の概要

繩文時代については、明確な遺構は検出されておらず、第4図に示した計10点の繩文土器片が、遺構外や後世の遺構内を中心に出土したのみである。但し、第4図3の繩文土器片は、他に全く遺物が検出されなかった第1号土坑から出土しており、第1号土坑が繩文時代まで遡りうる可能性はある。しかし、時期が限定できないため第1号土坑については時期不明の遺構として扱い、後節III-3で記述する。また、形態的に繩文時代に該当する可能性がある石器についても、遺構内出土のものはその遺構の所で扱い、遺構外出土のものは時期不明の遺物としてIII-3で後述する。

出土した繩文土器（第4図）

1は胎土に纖維を含む土器片で、単節RLの縄文が施されている。2、3は隆帯がみられる破片で、2の外面には輪積み痕が残され、3の下方には単節LRと思われる縄文が認められる。4、5は連続する刺突文が施されたもので、4の刺突列は隆帯に沿って施されている。6は複節RLRの縄文を縱方向に帯状に施文した後、縦位の沈線で区切り、沈線間の無文部を磨いている。7には縦位の微隆帯を境に単節LRを施文した縄文部と無文部



第4図 野中遺跡第2次調査出土縄文土器

がみられる。8～10は縄文のみが施された破片で、縄文原体は8が無節L、9が単節RL、10が複節RLRである。

出土位置は1、2、5、6が①区遺構外、8が第3号住居址、10が第4号住居址、4、9が第1号溝状遺構、7が第2号溝状遺構、3が第1号土坑である。なお、1は前期前半、2～7は中期に相当する土器と思われる。

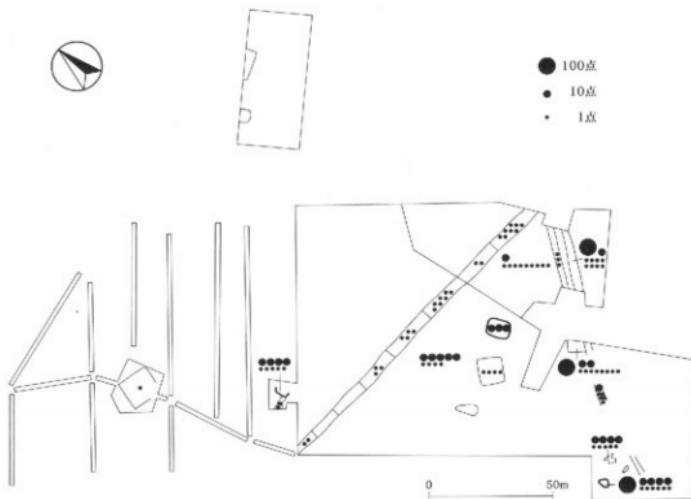
2. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構と遺物の概要

弥生時代の遺構としては、第1号、第5号の2軒の堅穴住居址と第3号土坑が該当する。遺物は土器が主体で、その他上記の遺構内から、土製鍛錬車、敲石、ベガマタイクト製の石核?、不明土製品が出土している。

弥生土器

出土状況 弥生土器は計638点検出されている。出土状況をみてみると（第5図）、当該期の遺構内から多く出土している他、①、②区東部からの出土が多い。特に、古墳時代以降の遺構である第3号住居址と第2号溝状遺構IV区からまとまった出土が認められ、その付近に弥生



第5図 野中遺跡第2次調査区弥生土器出土状況図

時代の遺構や活動地点が存在していた可能性も考えられる。また、①区南部の第3号土坑に隣接する攪乱内からは同一個体の破片群を主体に土器片が集中して検出されしており、「攪乱内土器集中地点」と呼称する。

器形と文様 出土した土器には、広口の壺形土器や甕形土器、それに鉢もしくは高杯形土器などが認められる。文様については、頸部文様に多条撚描文が多く認められ、格子目文など範式工具で描かれた文様もみられる。

縄文原体 施文されている縄文の原体は、付表に示したように異なる原体の組み合わせも含めて19種認められた。1段の縄を4本使った縄文原体が多いが、分類にあたっては、規則的に1条ごとに深浅が出ているものを附加条1種附加2条、そうでないものを直前段4条とした。さらに1段4本の原体には、3段の直前段反撚も存在するが、撚り戻しが強いもので、附加条や直前段4条としたもののうち、施文単位が捉えられない小片については、3段の直前段反撚が含まれている可能性がある。

また、今回「撚糸文」とした軸に条を巻き締めた原体を回転押圧したものも多く認められる（註）。いずれも

軸の原体が不明であるが、1段の条が回転押圧されているもののうち、便宜的に条の太さが幅1mm以下のものを本稿では（細）として区分した。節の幅からみて、（細）でない撚糸文としたものの中には、軸縄が押圧されなかった附加条縄文が含まれている可能性が高い。また、撚糸文（細）としたものは圧痕が深く、節が細長いものが多い傾向がある。

胎土 肉眼観察によって胎土は大きく2種類に分けられる。ひとつは径1mm以下の細かい白色及び透明の砂粒が含まれているもので、もう一つは径1~2mmの粗い白色及び透明の砂粒が目立つ一群である。両者には灰色の砂粒が含まれる場合があり、後者には雲母粒子が混ざったものも存在する。割合としてはおおよそ前者が2に対し後者が1である。

なお、図示した弥生土器の選択にあたっては、口縁部破片、底部破片、縄文以外の文様を有する破片は、第3号土坑出土の箇掲文の小片2点と、平行沈線？が施された小片1点、それに後世の第3号住居址出土の木葉痕が

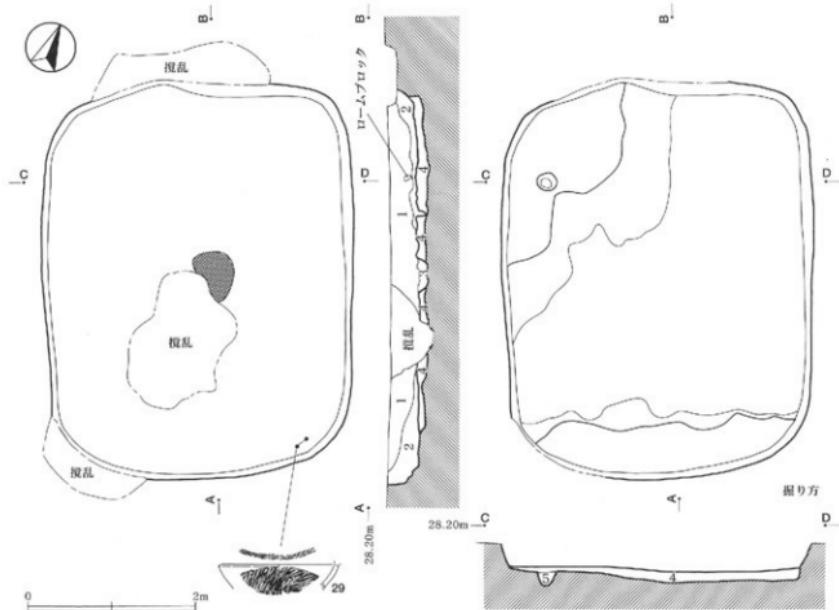
みられる底部小片1点を除いて、全て掲載した。一方、縄文のみが施された土器破片は、原体の種類ごとに選別して掲載し、遺構ごとの原体別出土数は付表に示してある。また、第1、5号住居址については全点掲載した。縄文原体の量的傾向や図示した遺物個々の属性については、巻末の付表を参照されたい。

(注) この原体としては単縦糸条体第1期や附加条縄文が想定されるが、軸が不明で明瞭な区別ができないため、縄糸条とした。なお、純文原体の観察は山内清男氏の文献〔山内1979〕に掲めたが、純文原体の表記は省略化した(例R: $\frac{L}{L} \rightarrow R.L.$)。

第1号住居址

位置 ①区中央の東寄りに位置する。擾乱によって南北両壁の上側一部と中央南側の床の一部が損なわれている。

規模と形態 平面形は長軸4.9m、短軸3.8mの隅丸長方形で、壁の高さは南側で37cmを測る。床面のほとんどは貼床によって構成されており、中央には長径62cmの炉址が存在する。地山ローム層を掘り込んだ貼床の掘り方は、北西部隅と南壁側を高く残した形態で、深いと



第1号住居址土層説明

- 1層：黒褐色土層 結まり有り。粘性無し。黒褐色土を主体に褐色土が若干混じる。ローム・焼土・炭化物粒子を含む。
- 2層：褐色土層 結まり・粘性や有り。褐色土を主体にロームが混じる。焼土・炭化物粒子を含む。
- 3層：褐色土層 結まり・粘性や有り。褐色土と黒褐色土が混じる。ハードロームブロック（最大径20mm）、ローム粒子を含み、焼土粒子もやや目立つ。2層土より黒味強い。
- 4層：暗褐色土層 結まり・粘性や有り。ロームと褐色土が斑状（径10～50mm）に混じる。ハードロームブロック（最大径10～150mm）が多量に混ざり、中央付近では黒褐色土も斑状（径10～20mm）に混じる。焼土・炭化物粒子は含まない。粘土土。
- 5層：褐色土層 結まり・粘性や有り。暗褐色土とロームが斑状（径10～20mm）に混じる。ローム粒子を含み、焼土・炭化物粒子を若干含む。貼床下 ピット覆土。

第6図 第1号住居址実測図



写真3 第1号住居址全景



写真4 第1号住居址掘り方



写真5 第1号住居址出土土器 29



写真6 第1号住居址貼床断面

ころでは床面から10cm程掘り下げられている。南壁側の高く掘り残された部分はそのまま床面として利用されているが、その他の部分にはロームと褐色土が斑状に混じったものにハードロームブロックを含んだ土（4層）が充填され、床面を形成している。また、炉址の部分には貼床が存せず、焼土粒子が目立つ褐色土（3層）が堆積した皿状の窪みになっており、その窪みの周りには貼床上面が焼け込んだ焼土が部分的に認められる。柱穴等の床面上に付随するピットは検出されなかつたが、北西隅の貼床下からは径23cm、深さ19cmのピットが検出されている。

覆土と遺物の出土状態 床面上の壁際には2層とした褐色土層が認められ、その2層と床面中央部を覆って、1層とした黒褐色土層が堆積する。

南東隅の2層に覆われた床面直上から29の弥生土器が2点に分かれて出土した他、28点の弥生土器片が覆土中や貼床土、それに擾乱内から散漫な分布状態で出土している。一方、1層中や擾乱内からは土師器54点が出土している。

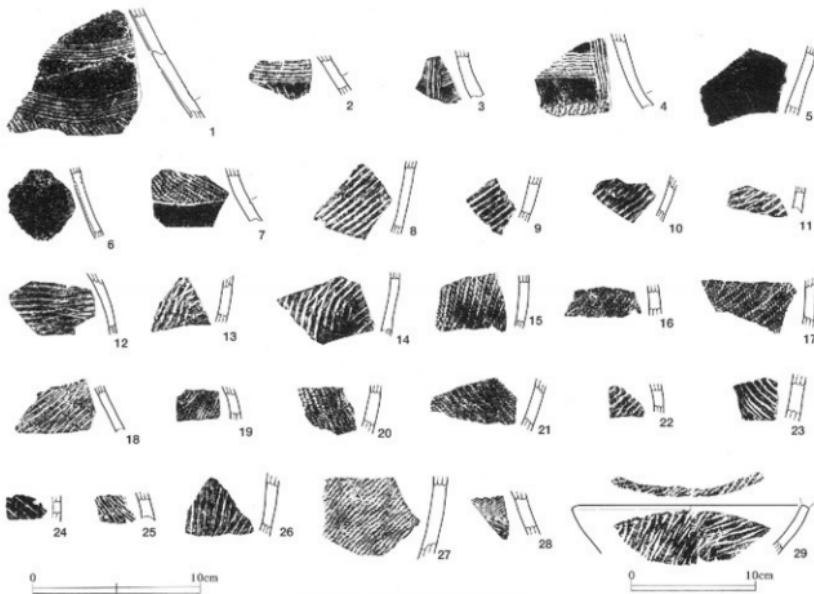
遺構の時期については、土師器が2層や床面上からは

出土しなかつたこと、平面形が弥生時代に多くみられる形態のものであることから弥生時代と捉える。

出土遺物（第7図） 出土した遺物は上記した弥生土器と土師器、それに滑石製造物1点であるが、ここでは弥生土器についてのみ記載し、土師器と滑石製造物についてはIII-3で触れる。また、1は本住居址と15m以上離れた第2号溝状遺構IV区から出土した破片であるが、本住居址出土の2と同一個体と捉えられるためここで一緒に報告する。

1～5は頭部に4本歯以上の櫛齒状工具によって描かれた櫛描文が施された顎部付近の破片で、1、2は横位の、3、4は縦位と横位を組み合わせた、5は山形もしくは菱形のモチーフを描いている。また、1の頸部にはR?の撚糸を巻いた撚糸文がみられる。6は範状工具による単沈線で格子目文が描かれた土器で、下部の無文部には赤色塗彩が部分的に残る。7は単節L R?が施された縞文帯と無文帯を範状工具による単沈線で区切っている。

8～29は縞文のみが施されたもので、原体は8～17が附加条1種附加2条L R + 2 R、18が直前段反撚L



第7図 第1号住居址出土遺物

L R、19が直前段4条LR?、20~23が撚糸文R、24~26が撚糸文R(細)、27が単節RL、28が単節RLと附加条1種附加2条RL+2Rを組み合わせたものである。8~14は同一個体の破片と思われ、17には繩文施文前につけられた刷毛目整形痕が、18の外側の一部には赤色塗彩が認められる。

29は鉢もしくは高杯形土器の杯部と思われ、外面と口唇部には直前段反摺L LRの繩文が施されている。復元口径は19cm。

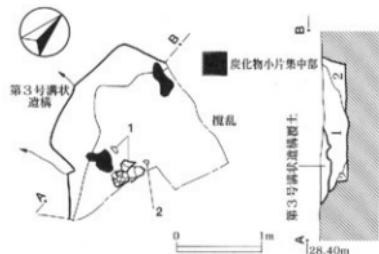
第5号住居址

位置 ①区の北西端に位置する。住居址の大部分は擾乱されており、西隅が僅かに残っていたに過ぎない。また、覆土の上部は古墳時代の第3号溝状遺構によって一部埋されている。

規模と形態 残存していた隅は丸みを帯び、隅丸の平面形をしていたと思われる。壁の高さは28cm。床面は

地山ローム層であり、残存部全面が硬化している。ピット、炉址等は検出されていない。

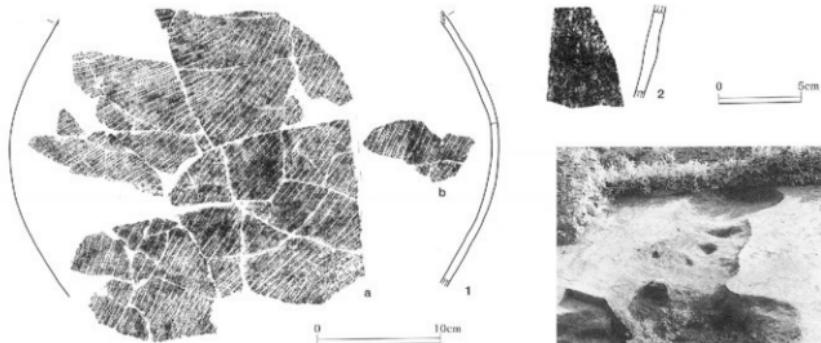
覆土と遺物の出土状態 覆土は莖際床面上に堆積する



第5号住居址上層説明

1層：黒褐色土層 緩まり・粘性やや有り。黒褐色土を主体に暗褐色土が混じる。ロームブロック(径10~30mm)を若干含み、ローム・炭化物粒子を含む。
2層：褐色土層 緩まり・粘性やや有り。褐色土を主体にハードロームブロック(最大径20mm)、ローム・炭化物粒子を含む。

第8図 第5号住居址実測図



第9図 第5号住居址出土遺物

2層とした褐色土層と、2層と中央寄りの床面を覆う1層とした黒褐色土層からなる。壁際の2層上面には、最大長50mmの炭化物小片が集中した箇所が2ヶ所認められる。

床面直上からは1は弥生土器がつぶれた状態で出土し、2の土器もその側の床面直上の出土である。その他16点の土師器小片が覆土中から出土している。大型破片である1の出土状況から、弥生時代の遺構と捉える。

出土遺物（第9図） 1は壺形土器の胴部破片で、附加条1種附加2条L R + 2 Rの縄文が施されている。また僅かに残る頸部は無文帯になっており、縄文施文部との境には、範状工具による単沈線が引かれている。復元胴部最大径は40cm。2は無文の土器で、外面は粗い撫でによって整形されている。表面の粘土が撫でによってかなり延ばされており、粘土に粘性がある内に整形されたものと思われる。

第3号土坑

位置 ①区の南端に位置する。立木のため表土層を残してあった個所から検出されたもので、その下に焼土を含む覆土の一部が残されていた。北、南側は擾乱のため、西側は表土剥ぎ時の掘り過ぎにより、遺構の範囲を明確に捉えられていない。



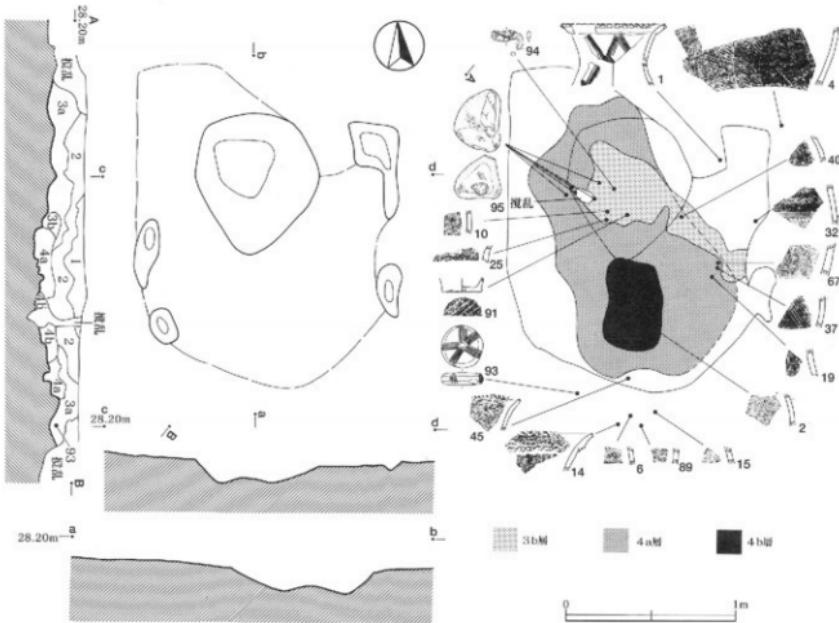
写真7 第5号住居址全景



写真8 第5号住居址土器1・2出土状況（上は3溝）



写真9 第5号住居址出土土器1



第3号住居址土層説明

- 1層：黒褐色土層 繊まり・粘性やや無し。黒褐色土を主体に暗褐色土が混じる。ローム・焼土・炭化物粒子を含む。
- 2層：暗褐色土層 繊まり・粘性やや無し。暗褐色土と褐色土が混じる。
- 3 a層：褐色土層 繊まり有り、粘性やや有り。褐色土 1件。
- 3 b層：赤褐色土層 繊まり有り、粘性やや有り。3 a層土に多量の焼土粒子が混じる。
- 4 a層：暗褐色土層 繊まり・粘性やや無し。暗褐色土に炭化物粒子を多く、焼土粒子をやや多く含む。ローム粒子も含む。
- 4 b層：黒褐色土層 繊まり・粘性やや無し。4 a層土に炭化物起源と思われる黒褐色土が混じる。

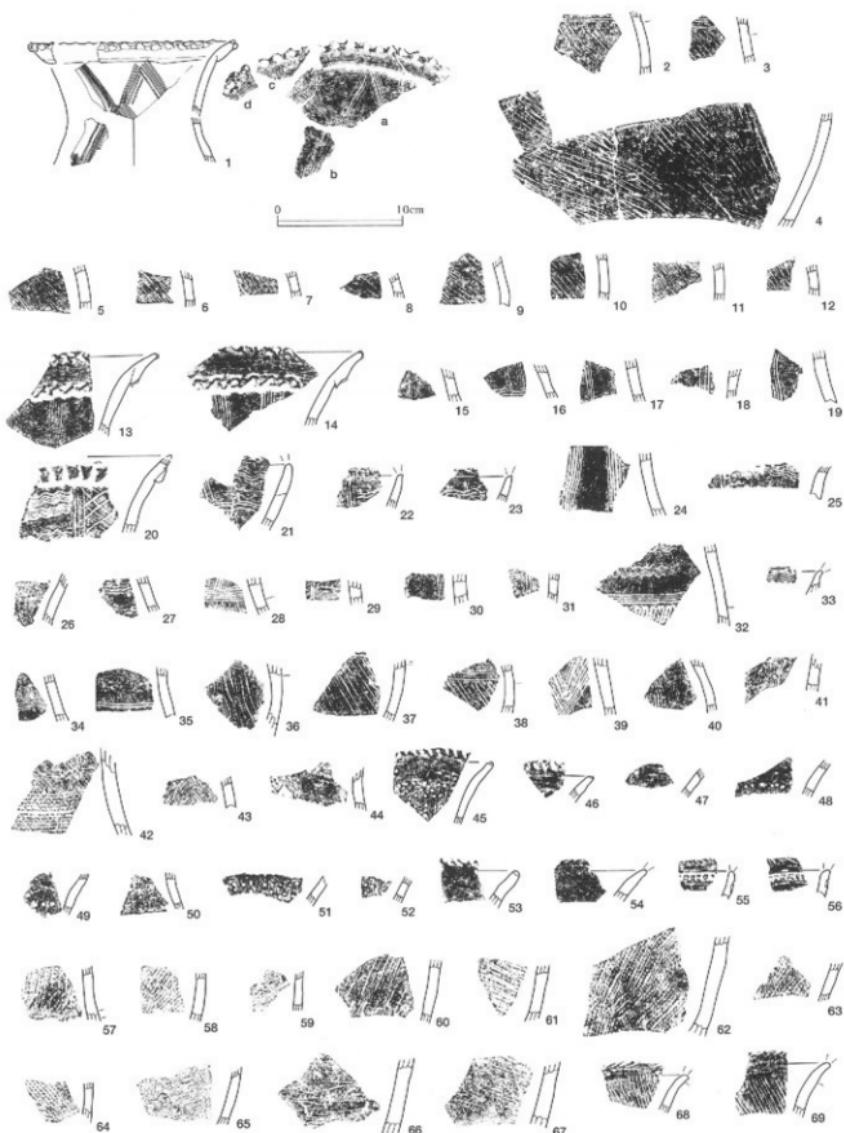
第10図 第3号土坑実測図



写真10 第3号土坑全景



写真11 第3号土坑遺物出土状態



第11図 第3号土坑出土遺物

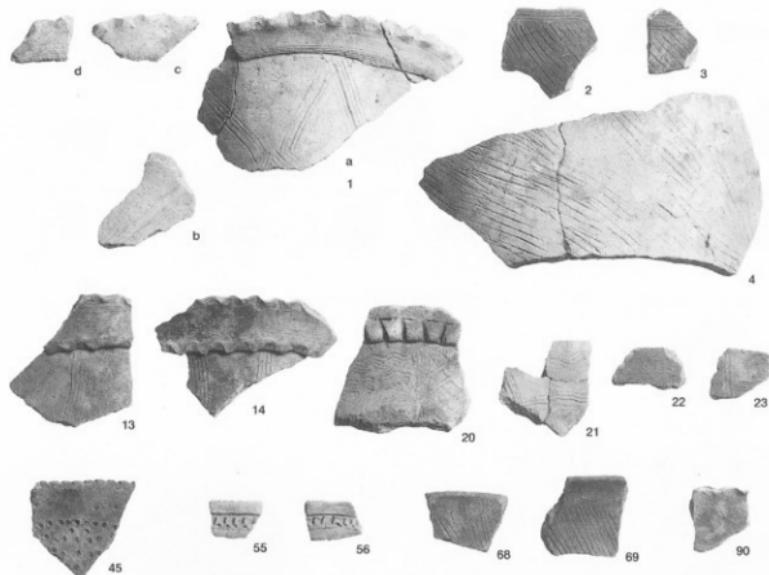


写真12 第3号土坑出土遺物

規模と形態 最終的には、長径86cm、深さ20cmの不整円形の皿状の掘り込みの周間に、地山であるローム層移層が被熱のためかボロボロに劣化した面（ボロボロのブロックは硬化していた）が検出されている。確認できた劣化部は南北2m、東西1.5cmの範囲に広がっており、東西両端には劣化部を区切る形で、深さ5~14cmの浅い溝状のビットが2ヶ所づつ計4ヶ所存在する。覆土の限界が確認できた東側では、劣化部が切れるあたりから徐々に地山が上がっていく、それに伴い覆土が薄くなつて途切れていった。なお、皿状の掘り込み内もボロボロに劣化していた。

覆土と遺物の出土状態 皿状の掘り込み内から周囲の劣化部直上には、4a層とした炭化物粒子を多く含む暗褐色土層が堆積しており、皿状の掘り込みの南側の4a層中には黒味の強い炭化物起源と思われる4b層がブロック状に存在する。4層が存在しない部分の遺構縁辺の

劣化部上には3a層とした褐色土層が堆積し、一部4層を覆っている。また、皿状の掘り込みを中心とした範囲の3a層中には、3b層とした多量の焼土粒子を含む赤褐色土がブロック状にみられる。更に3、4層を覆って暗褐色土層の2層と黒褐色土層の1層が円レンズ状に堆積する。劣化部におけるこれら覆土の厚さは20cm程度である。

底面直上から覆土、さらに覆土上の表土層にかけて計146点の弥生土器片が出土している。土器片はいずれも細片で、同一個体の破片でも出土した位置や層位にばらつきがある。図示した各土器の出土位置については、第10回の遺物分布図と付表の観察表を参照されたい。土器以外では、93の上製紡錘車が遺構南端の3a層中から、94の土製品と95の敲石が皿状の掘り込み内の4a層上面から出土している。なお、95の敲石は8片に破碎しており、そのうちの2片は4a層中の出土である。

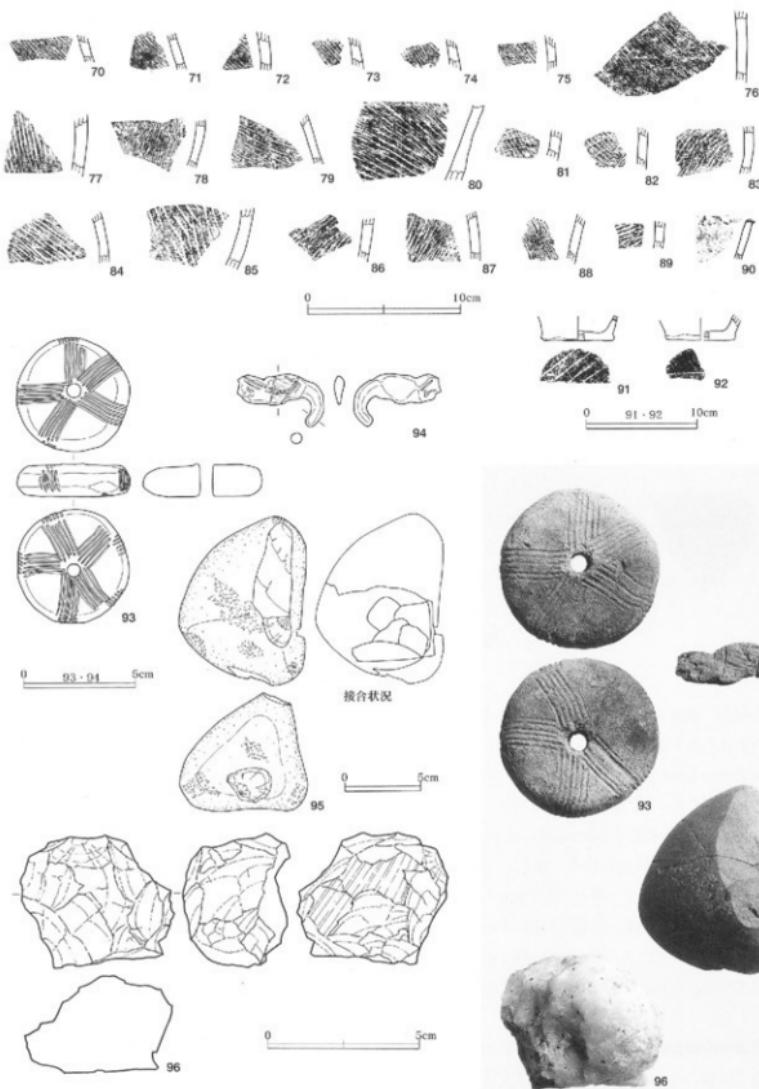


写真13 第3号土坑出土遺物

第12図 第3号土坑出土遺物

出土遺物（第11、12図） 1～92は弥生土器である。1は頸部以上が復元できた広口の壺形土器で、頸部には5本歯の櫛齒状工具による櫛描文によって菱形のモチーフが描かれている。口縁は複合口縁で、ヨコナデ整形後、口唇部が外外面から交互に押捺されている。復元口径は16.6cm。

2～12は同一個体の胴部破片群であり、Lを卷いた撫糸文が施されている。また、2の破片には胴部と頸部を区画する平行沈線文が半截竹管状工具によって引かれている。

13～41は3本歯以上の櫛齒状工具による櫛描文が施されたものである。13～19は頸部に櫛描文が縱位に施されたもので、16には頸部下端を区画する横位の櫛描文もみられる。13～15と16、17はそれぞれ同一個体で、前者のI縁部はヨコナデ整形の後、II唇部に交互押捺が、複合口縁下端に押捺が施されている。20～28は縦位の櫛描文を起点に横位の波状櫛描文が施されたもので、24、25は2列の縦位櫛描文の間が無文部になっている。20は複合II縁の下部を籠状工具による単沈線によって横位に区切り、その下の複合II縁下端部に縦位の刻みを入れている。また、頸部の櫛描文によって縦位に区画された部分には、籠状工具による格子目文がみられる。28の胴部にはR（細）を卷いた撫糸文が施され、同一個体である22、23それに21のII唇部には縄文が施されている。29～31は縦位の櫛描文を起点に横位の直線的な櫛描文が施されたもので、29、30は同一個体。32～34は横位に波状の櫛描文が施されたもの。32には頸部下端を区画する櫛描文と胴部に施された直前段4条LRの縄文がみられ、33のII唇部には縄文が施されている。35～38は頸部下端を区画する櫛描文がみられるもので、35の区画上位は無文で、煤が付着している。また、36～38の胴部にはR（細）を卷いた撫糸文が施されている。39は山形もしくは菱形の、40、41は曲線的なモチーフを櫛描文によって表出したものである。

42～44は籠状工具による単沈線によって文様が描かれたもので、42は横位の櫛描文の上に格子目文が、同一個体の43、44は矢羽状の文様が描かれている。45～52は同一個体と思われる口縁部破片である。口唇部には刻みが施され、II唇直下は幅1cm程の無文帯になっている。無文帯の下には径2mmの竹管状工具を使った

円形刺突文が数多く施文されている。53、54は無文の口縁部破片で、53のII唇部には刻みが、54のII唇部には縄文が施されている。55、56は同一個体で、II縁部に籠状工具によって2本の平行する沈線が引かれ、その間に刻み列が充填されたものである。また、II唇部には縄文が施文されている。

57～60は附加条1種附加2条LR+2Rの縄文が施文された肩部破片。61の縄文は附加条と思われ、附加縄Rが2本密接して現れている。62～65は直前段4条LRの縄文が施された胴部破片。66～82はR（細）を巻いた撫糸文が施されたもので、79には撫糸文施文前の刷毛目整形痕がみられる。66、67は同一個体で、他の撫糸文に比べて条の間隔が不規則である。また、68～73も同一個体の破片であり、68、69のII縁部にはヨコナデ整形痕がみられ、口唇部に縄文が施されている。83～86はRを巻いた撫糸文が、87、88はL（細）を巻いた撫糸文が、89は0段多条と思われるLを巻いた撫糸文が施された胴部破片。90は壺形土器の無文のII縁部破片で、口唇部上面には押捺が施され、外外面は撫によって整形されている。また、胎土はとても微粒の白色粒子を含むもので、他の個体と趣を異にする。91、92は底部破片で、両者とも底面に木葉痕が残る。底径は91が6.5cm、92が6.2cm（復元）。

93は完形の土製紡錘車で、表裏側面に孔部を中心として放射状に描かれた、6本歯の櫛齒状工具による櫛描文がみられる。また、表裏両開口部に若干の摩減が認められる。94は土製品で鉢状に曲がっている棒状部と指頭押捺で扁平にされた部分からなる。扁平部の片面には織維の圧痕もしくは擦痕がみられる。

95は三角錐状の砂岩製自然礫を使用した敲石で、三角錐の底面にあたる部分と稜や角にあたる部分に複数の敲打痕が残る。8片に破碎された状態で出土したものであり、いずれの破片も被熱による赤化が認められる。被熱度合いの差か礫表面の赤化具合は破片によって異なるが、破損面についてはいずれも礫表面近くが赤化しているのみで、中央部の赤化はほとんど認められない。

96はベグマタイトの節理が発達した石英質部を使用した塊状の形態をした石器である。表面は多くの剥離面と節理面で構成され、周縁方向からの剥離が多いという他、目立った規則性は認められない。石核か。

擾乱内土器集中地点



擾乱内土器集中地点



第3号土坑

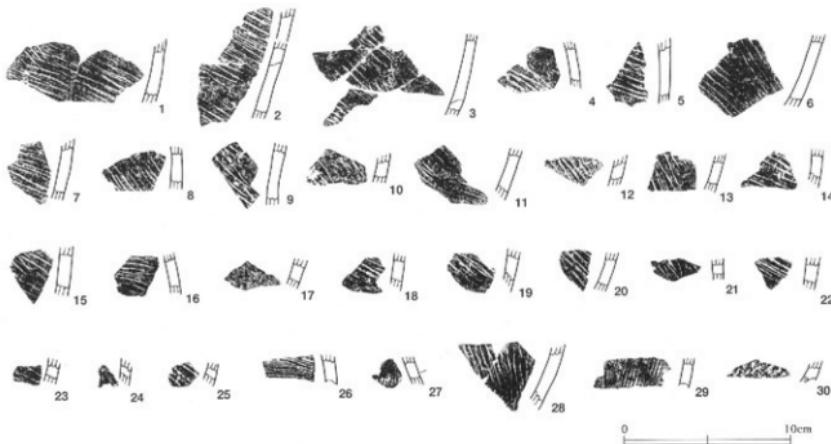
0 2m

第13図 摻乱内土器集中地点実測図

位置と遺物の出土状態 ①区の第3号土坑の北東約6mの所に位置する擾乱内的一部分（径50cm程の範囲）から、同一個体の破片34点を含む計45点の弥生土器片がかたまって検出された。擾乱内ではあるが、土器が包含されていたブロック状の土が均質であったこと、また、同一個体の破片が多く含まれていることから、これらの土器片を、原位置は動かされているものの遺棄・廃棄された時点でのまとまりを部分的に示している一群として扱う。

出土遺物 (第14図) 1～25は同一個体で、L(細)を巻いた撚糸文が施された胴部破片である。26は多条の柳描文が横位に施されたもの。28はR(細)を巻い

た撚糸文が、29は単節R Lの繩文が施文された肩部破片。27と30には縄文が施されているが原体は不明。27の縄文上位は無文になっている。



第14図 摻乱内土器集中地点出土遺物



写真14 摻乱内土器集中地点出土土器

後世遺構内及び遺構外出土の弥生土器

ここでは古墳時代以降の遺構内から検出された弥生土器、及び遺構外から出土した弥生土器を記載する。該当する土器片は計372点である。(第15、16図)

1は縦頭の壺形土器の肩部にあたる破片と思われ、幅3mmの太めの単沈線に挟まれた部分に、単節L Rの縄文が施されている。2、3は半截竹管状工具による平行沈線文によって、頸部下端が区画されているもので、3の胴部にはR(細)を巻いた撚糸文が施されている。

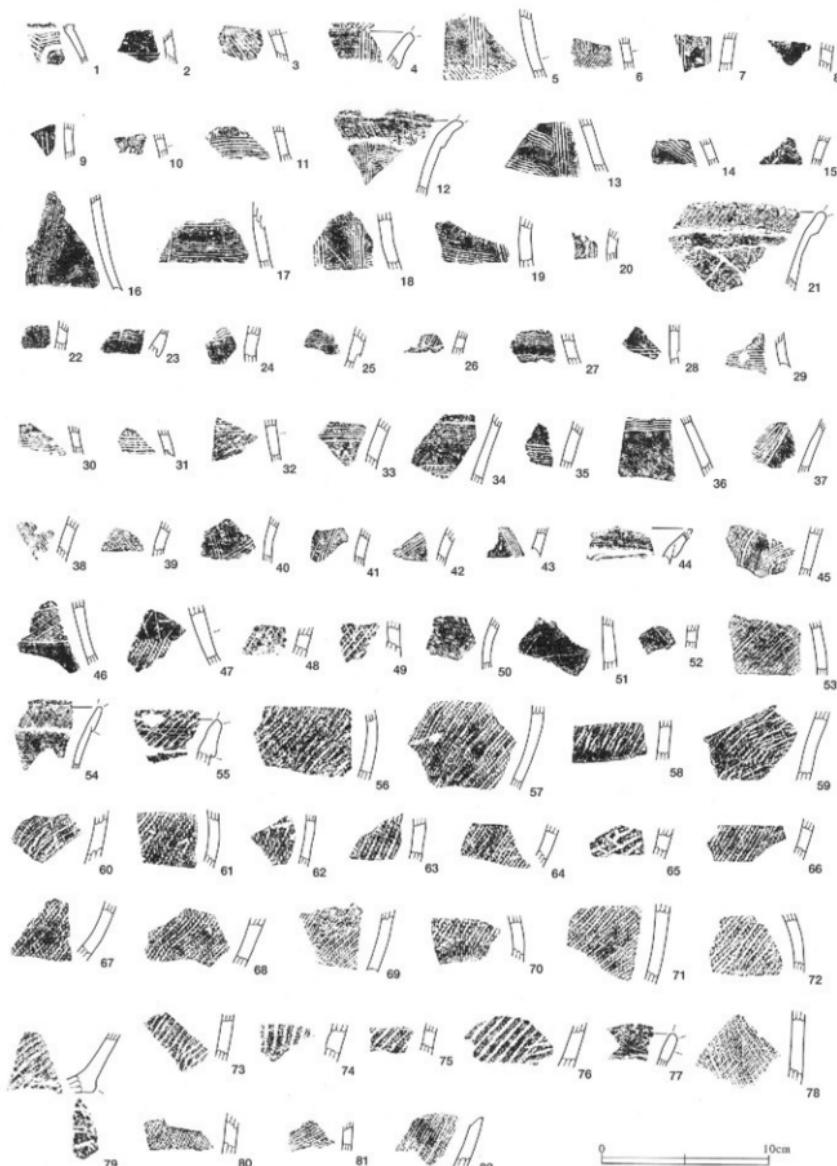
4～45は3本歯以上の櫛齒状工具によって描かれた櫛描文が施されたII縁部から頸部にかけての破片である。4～11は縦位に櫛描文が施されたもので、11には櫛描文による横位の区画文も合わさっている。4は複合口縁部の破片で、櫛描文施文前にヨコナデ整形がなされ、II唇部には縄文が施されている。5、6、10の胴部には縄文がみられる。5は附加条1種附加2条L R + 2 R、6は単節L Rであろうか。12～15は縦位の櫛描文を起点に波状の櫛描文を横位に配したもの。12は複合口縁とII唇部にR(細)を巻いた撚糸文が施されている。13、14は同一個体で、波状の櫛描文がやや斜めに配されている。16～20は縦位の櫛描文を起点に直線的な櫛描文を横位に配したもの。18は2列の縦位櫛描文の間が無文部になっており、16では同様な部分に半截竹管状工具を使った平行沈線によって山形のモチーフが描かれている。21～27は横位の波状櫛描文が施されたもので、26には刷毛目整形窓もみられる。また、21の複合口縁と口唇部には附加条1種附加2条L R + 2 Rの縄文が施文されている。28～36は直線的な櫛描文が横位に施されたもの。32の櫛描文は胴部との区画文になっており、胴部には直前段反撚L Rの縄文が施文されている。33、34は同一個体。37～44は櫛描文で山形もしくは菱形のモチーフを描いたもので、44は無文の複合口縁を持つ。45は櫛描文で曲線的なモチーフが描かれている。

46～49は竈状工具による単沈線で格子目文が描かれたもので、46は格子目文の上下を単沈線で区画している。47の胴部に施文された縄文は附加条1種附加2条L R + 2 R。50～52も竈状工具による単沈線でモチーフを描いていたもので、50では横位の単沈線文で区画

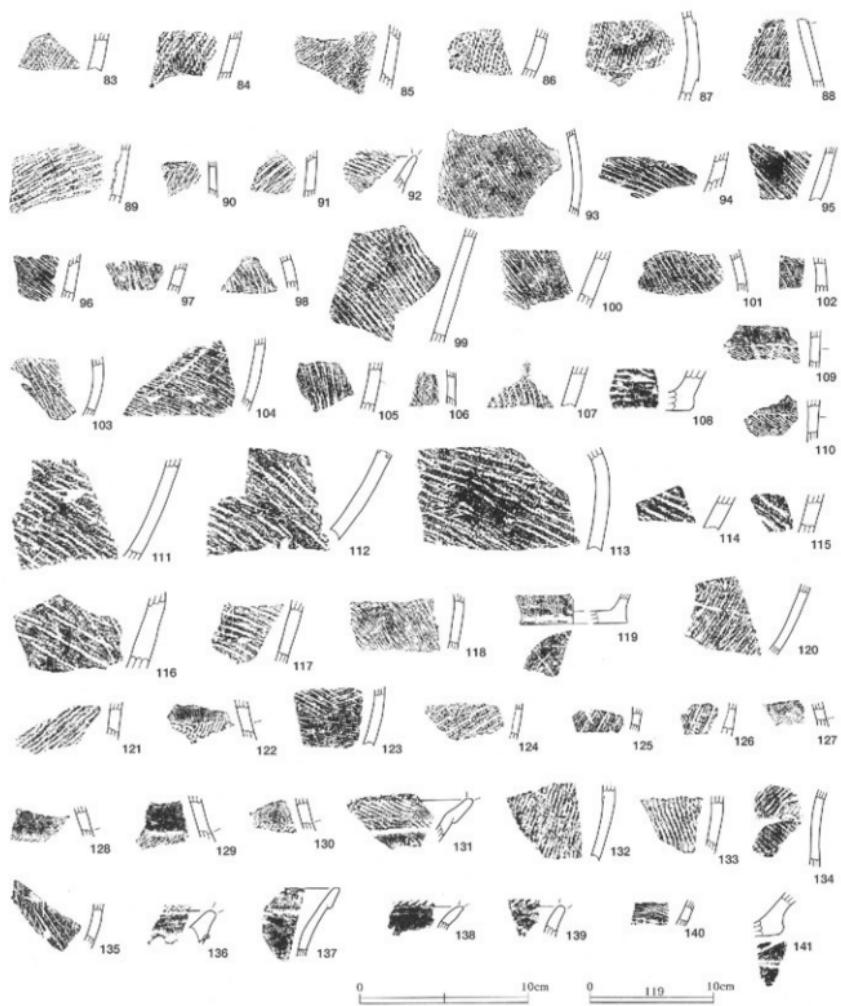
された中に横向きの矢羽状のモチーフが描かれている。53は横位の波状櫛描文を施文した後に、刷毛目整形を施したものである。

54～79は附加条1種附加2条L R + 2 Rの縄文が施されたもので、54、55、77がII縁部、79が底部、他が胴部破片である。61、62は同一個体。54、55は複合口縁と口唇部に縄文が施文されており、複合口縁の下位は無文である。77のII唇部にも縄文施文。また、78では縄文が交差する形で重複している。80～87は直前段4条L Rの縄文が施文された胴部破片。88～91は直前段反撚L R Lの縄文が施文されたもので、90には赤色塗彩が一部に残っている。92～107はR(細)を巻いた撚糸文で、106、107は交差する形で撚糸文が重複している。101には赤色塗彩が一部に残る。108はRを巻いた撚糸文が施文された底部破片。109、110は同一個体で、頸部無文部の下位に撚りの細かい直前段反撚R R Lの縄文が施文されたもの。111～115は同一個体の胴部破片で、撚りの太い縄文が施されている。原体は直前段反撚R R Lか。116、117はLを巻いた、118、119はL(細)を巻いた撚糸文が施文されたもので、119は底部、他は胴部破片である。119の復元直径は10.0cm。120、121は附加条1種附加2条L R + 2 Lが施文されたもの。122は頸部無文部の下位に縄文が施されたもので、原体は無節Lか。123は附加条1種附加2条L R + 2 RとR(細)を巻いた撚糸文が施文された胴部破片。124～126に施文されている縄文は直前段4条L Rと思われ、隣接する2条が深く押圧されている。127～130は頸部無文部の下位に単節L Rの縄文が施文されているもので、127～129は同一個体。131～133は単節R Lの縄文が施文されたもので、133は0段多条と思われる。131は複合口縁と口唇部に縄文が施文されており、複合口縁より下位は無文部になっている。134は結束第1種L R・R L、135はrを巻いた撚糸文が施文されたもの。

136～139はII縁部破片で、136、137は複合口縁である。136、138、139のII唇部には縄文が施文され、136の複合口縁下端には上下から交互抑捺が施されている。それ以外に文様の施文無し。140は条痕がみられる破片であるが、刷毛目整形か。141は底部破片で、底部に太い沈線がみられる。



第15図 後世遺構及び遺構外出土弥生土器



第16図 後世遺構及び遺構外出土弥生土器

3. 古墳時代以降の遺構と遺物

古墳時代以降の遺構と遺物の概要

古墳時代の遺構としては、第2号、第3号、第4号、第6号、第7号の5軒の堅穴住居址と、第3号溝状遺構が該当する。また、第1号、第2号、第4号溝状遺構と第2号土坑は、遺構の重複関係や出土遺物等から古墳時代もしくはそれ以後の時代が想定される。第1号土坑、それに③区のピット群は時期不明の遺構であるが、本節で一緒に報告する。

遺物は、遺構内を中心に検出された土器器が主体であり、須恵器も若干出土している。他には鉄鏃、刀子、土鍬、敲石、砥石、板状石製品、石核、剥片、碎片、双孔円盤を含む滑石製造物が出土している。なお、石核、剥片、碎片については、弥生時代以前の可能性も考えられる遺物であるが、そのほとんどが古墳時代以降の遺構内から出土しているため、本節で扱う。

土師器・須恵器

土師器片は計2,834点、須恵器片は計16点検出された。但し、土師器には時期不明の蒸焼き無文の土器片を含む。土師器の主体は、住居址から出土した古墳時代中期から後期に該当するものである。

これら古墳時代土師器の胎土は、肉眼観察によって径1mm以下の細かい白色及び透明の砂粒が含まれているものと、白色砂粒と径1~2mmの粗い透明砂粒が目立つものに大きく分けられ、両者には灰色砂粒と雲母粒子が含まれる場合がある。雲母粒子については、前者に含まれる場合はごく微量であるが、後者でみられる雲母粒子は粗く、含有量が多い。後者の全体に対する割合は5%未満で、圧倒的に前者が多い。なお、第4号住居址出土の27は細かい雲母粒子が目立つもので、上記2者は趣が異なる。また、これら古墳時代土師器と併出した須恵器も透明砂粒がみられなく、質を異にする。

滑石製造物

双孔円盤3点を含む滑石製造物が計29点検出された。

石材は雲母片岩質から蛇紋岩質まで細かくみると数種認められるが、今回は滑石製模造品の製作に関する石材といふことで、一括して滑石と呼ぶ。滑石製造品に残された加工痕としては、剥離、折り取り、削り、刃あたり痕（以下「刃痕」）、研磨、穿孔が認められる。このうち削りと刃痕は金属製工具によって残されたものと思われる。また、木製品としたものは、加工形状から製品の種類が特定されるものである。

以下、遺構ごとに遺構自体の内容や出土遺物を報告していくが、遺構別・器種別の土器出土点数や遺物個々の属性については巻末の付表を、土壇の細かい説明や堆積状況、それに遺物個々の出土位置については各遺構の実測図を参照されたい。

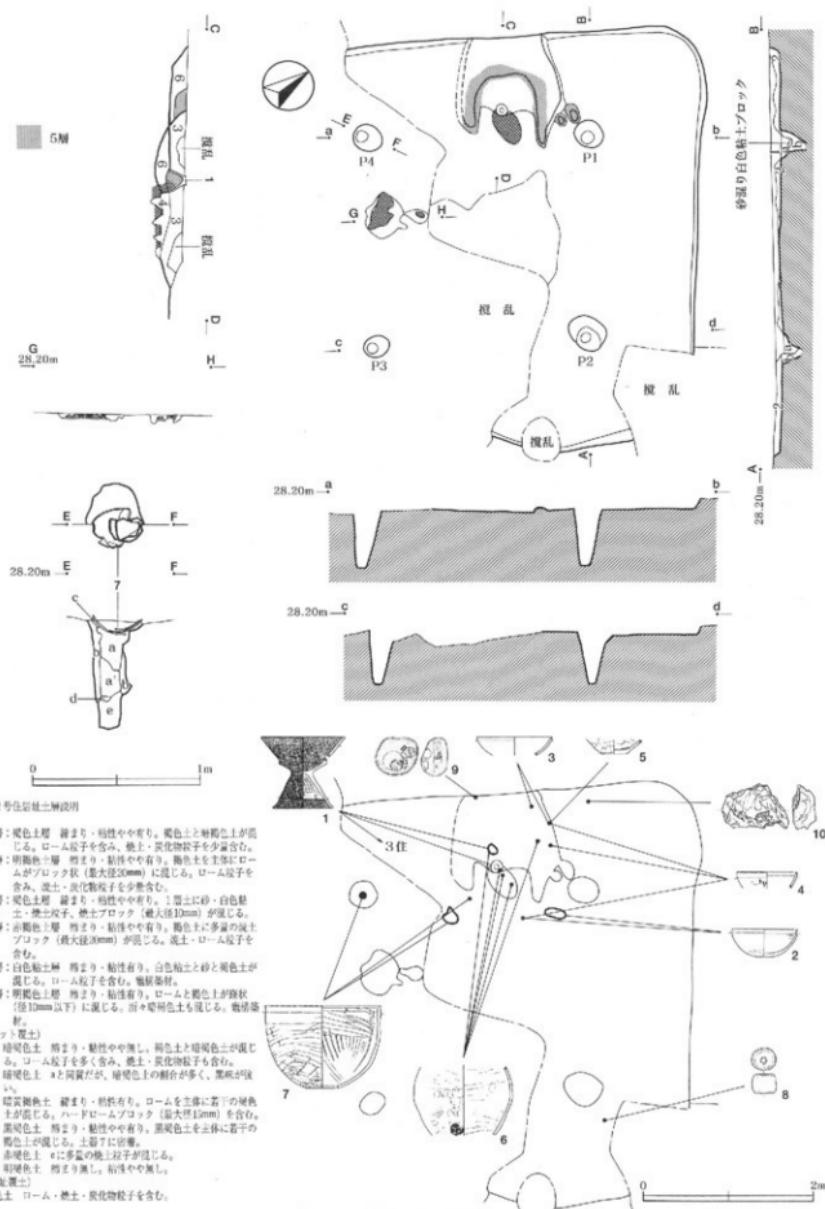
第2号住居址

位置 ①区のはば中央に位置する。南側約1/3と東側溝が擾乱によって失われている。

規模と形態 平面形は残存部と主柱穴の配置からみて隅丸正方形をしていたものと思われる。残存していた北西~南東方向の壁間が5.2m、壁の高さが北西側で11cmを測る。床面は地山ローム層からなっており、中央部に硬化部が認められる。

北西壁に竈がつくられているが、構築材の主体は6層としたロームと褐色土が斑状に混じた明褐色上で、燃焼部に面した土と奥壁だけに5層とした白色粘土がU字形に貼られていた。焚き口部における両袖間の間隔は74cmである。燃焼部底面の焚き口寄りには、地山ローム層が長径44cmの範囲にわたって赤化し、ボロボロに劣化した火床面が存在する。

一方、擾乱によって床面が残っていなかった住居址南東部には、長径約65cmに及ぶ焼土が存在する。断ち割りによる断面観察の結果、約6cmの振幅で細かく凸凹になった地山ローム層上面に被熱による赤化が認められた。この部分の火われた床面は約1cm程であり、もと



第17図 第2号住居計測図



写真15 第2号住居址全景



写真16 第2号住居址竈



写真17 P4土器7出土状況



写真18 竈土層断面

の床面が被熱したものと考えられる。本住居址では、住居廃絶後の燃焼の痕跡が認められないため、炉址と捉えておく。

検出されたビットはP1～P4とした4ヶ所である。これらは方形に配置されていることから主柱穴と捉えられる。P1、2はともに床面からの深さ70cmを測り、擾乱下から検出されたP3、4は地山ローム層上面からの深さがそれぞれ68cm、66cmである。なお、ビット底面の標高値は4ヶ所ともほぼ同じである。

覆土と遺物の出土状態 床面上の隙間に2層とした明褐色土層が堆積し、住居址中央部の床面上と2層上を1層とした褐色土層が覆う。

窯内では燒土粒子を多量に含む4層とした赤褐色土層が火床面上にみとめられ、その上位には1層土に白色粘土粒子と砂粒を含む3層とした褐色土層が堆積する。火床面端にあたる燃焼部中央には1の高杯形土器の脚部が、支脚として正位の状態で残されていた。この支脚は竈構築材6層の上に、脚内部に5層と同質の白色粘土を充填し固定されていたが、火床面側の脚内部の白色粘土と脚下の6層は被熱のため赤化していた。一方、炉址の

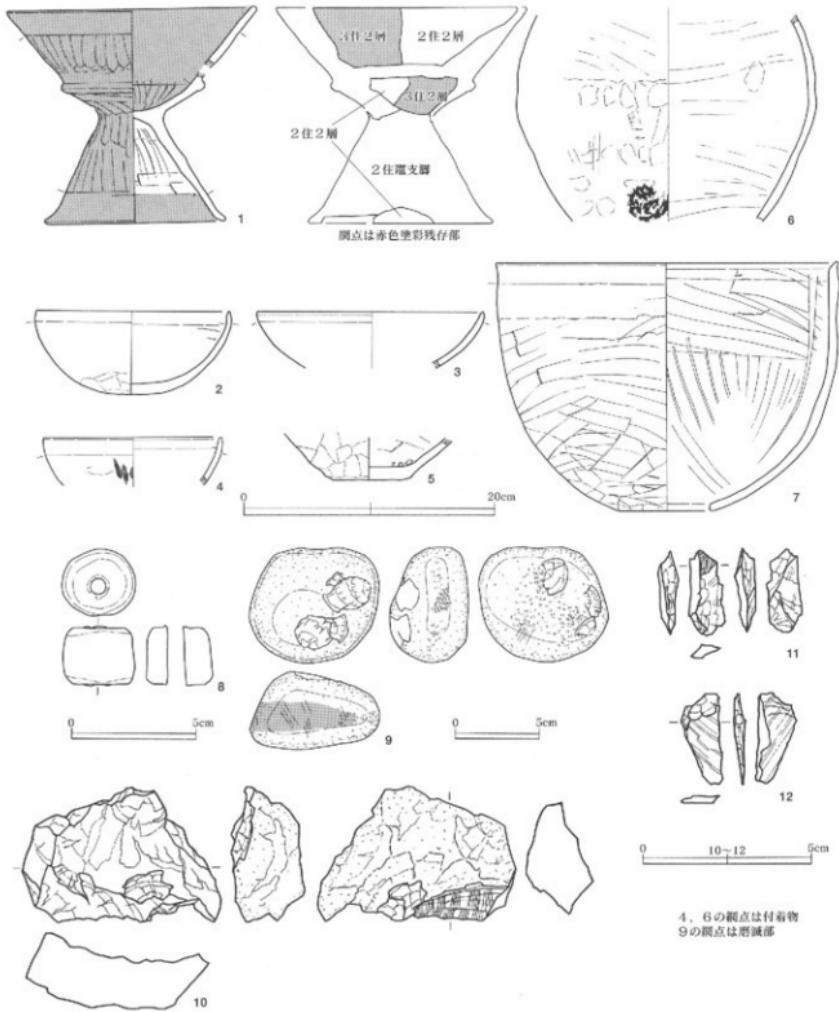
凹凸の凹部には、ローム・焼土・炭化物粒子を含む褐色土が認められた。

P4の開口部からは、7の壺形土器の大型破片がビットの口を塞ぐ形で内面を上に重った状態で検出された。重ねられた一番下の破片の外側にはcとした黒褐色土が薄く密着していた。P4の覆土では、褐色土とハードロームブロックを含むロームからなるbとした土が壁際に観察され、柱を支えた充填土と考えられる。

遺物の出土位置については上記1、7の他、6の土師器が竈内、3～5の土師器と9の戴石が竈直上、2の土師器が竈前の床面直上及び2層、10の滑石製遺物が竈北東側の2層中から検出されており、竈周辺に遺物が集中していた（土師器については主な破片の出土位置）。また、8の土鍤はP2東側の床面直上からの出土である。

出土遺物（第18図） 本住居址から検出された遺物は、土師器片167点、弥生土器片4点、土鍤1点、戴石1点、滑石製遺物3点である。

1～7は土師器。1は高杯形土器で、杯下部に鉢状の降帯が巡り、脚部は柱状部を持たない円錐形の形態をし



第18図 第2号住居址出土遺物

ている。部分的に残る痕跡から脚部内面上部を除いて赤色塗彩が施されていたと思われる。この高杯形土器は、脚部から杯下部にかけては支脚に使用されていた脚部の大型破片1点と窓周辺の2層から出土した2点、それに

第3号住居址の2層から出土した1点が、杯部口縁については窓周辺の2層から出土した1点と第3号住居址の2層出土の1点の破片が接合したものである。第3号住居址から出土した2点は赤色塗彩が良く残っているのに



写真 19 第 2 号住居址出土遺物

対し、第 2 号住居址から出土した 4 点は部分的にその痕跡が認められるに過ぎない。特に支脚に使用されていた脚部破片は、被熱のため表面がかなり荒れている。

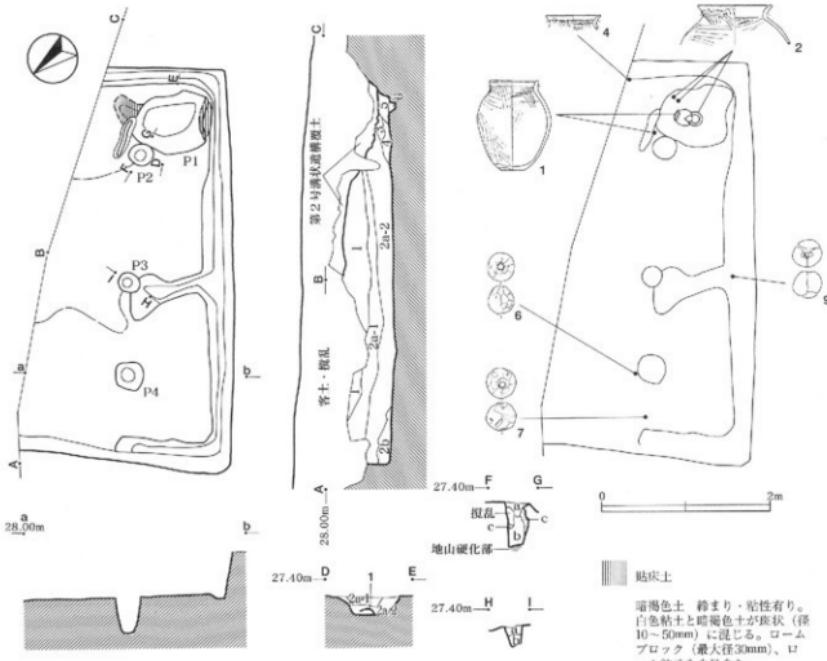
2 ~ 4 は杯形土器で、4 の外面の一部には煤が付着している。7 は甑形土器。素口縁で底孔は底部が抜けた形の单孔である。5 は底部、6 は甕形土器の胴部の破片で、6 の外面の一部には煤の付着が認められる。

8 は円柱状をした管状土器。9 は砂岩の円錐を使用した敲石で、平坦な一面と二側面に敲打痕が、他の二側面に磨滅部がみられる。10 ~ 12 は滑石製遺物である。10 は片面に自然面を多く残し、反対面は複数の剥離面から構成される石核状の大型品である。自然面側の一部には階段状の削り面が存在し、段部には刃痕が残る。11, 12 は薄手の剥片を素材とし、11 は二側縁が、12 は一側縁が折れ面である。11 の一部には削りが認められる。

第 3 号住居址

位置 ①区の第 2 号住居址の南東約 20 m の所に位置する。北東側約 1/2 が調査区外にかかっていて、その部分は未調査である。南東端には第 2 号溝状遺構が、本住居址の壁と覆土の上部を壊す形で重複している。また、第 2 号溝状遺構との重複部分には、両遺構の覆土まで掘り込まれた擾乱が存在した。

規模と形態 南東 - 北西方向の壁間が 4.8 m の方形の平面形をしており、壁の高さは 46 cm を測る。ビットは 4 ヶ所検出されたが、南西隅に存在する P 1 は貯蔵穴状のもので、長径 90 cm、短径 80 cm、深さ 47 cm の梢円形を呈する。P 2 と P 4 は床面からの深さがそれぞれ 46 cm、45 cm の主柱穴と思われるビットで、P 3 はその間に存在する深さ 25 cm の小ビットである。なお、p 2 の底面の地山ローム層は、硬化し白っぽく変色していた。壁に沿って深さ 5 cm 以内の浅い周溝が巡るが、北西壁の途中で途切れている。また、南西壁中央部の周溝からは、住居址中央に向かって周溝と同様の浅い床溝が延びておらず、P 3 に接続している。床面は地山ローム層からなり、P 1 から床溝の間が硬化している。P 1 の北東壁と南西壁の上部からその周辺の床面にかけては、深さ 15 ~ 20 cm 程地山ローム層を掘り込んだ上に、白色粘土と暗褐色土が斑状に混じった土を充填した貼り床になっ



第19図 第3号住居址実測図

第3号住居址土層説明

1層：黒褐色土層 繊まり・粘性やや有り。黒褐色土を主体に暗褐色土が混じる。ローム粒子を含み、焼土・炭化物粒子も少量含む。

2a-1層：暗褐色土層 繊まり・粘性やや有り。褐色土と暗褐色土が混じる。ローム粒子を含み、ハードロームブロック（最大径15mm）、焼土・炭化物粒子を少額含む。

2a-2層：明褐色土層 繊まり・粘性やや有り。褐色土とロームを主体に若干暗褐色土が混じる。ハードロームブロック（最大径30mm）、ローム粒子を多く含み、焼土・炭化物粒子も含む。

2b層：暗褐色土層 繊まり・粘性やや有り。2a-2層に黒褐色土が混じったもの。

3層：明褐色土層 繊まり・粘性有り。褐色土に褐色土・砂粒を多く含む。

4層：暗褐色土層 繊まり・粘性有り。暗褐色土を主体に褐色土、ロームが混じる。ローム・焼土・炭化物粒子をやや多く含む、砂粒も少額含む。

5層：褐色土層 繊まり・粘性有り。3層上に暗褐色土が混じる。

6層：暗褐色土層 繊まり・粘性やや無し。ロームブロック（最大径20mm）と褐色土が混じる。

(ビット覆土) a: 明褐色土 2a-2層と同質 (P2には砂・白色粘土粒子が混じる)。

b: 明褐色土 繊まり・粘性やや無し。ロームと褐色土が斑状 (径10~20mm) に混じる。ローム・焼土・炭化物粒子を少額含む。

c: 褐色褐色土 繊まり・粘性やや無し。ロームを主体に若干の褐色土が混じる。

(鉄軸材)

褐色土 繊まり・粘性有り。褐色土・暗褐色土・白色粘土が斑状 (径10mm) に混じる。ロームブロック・焼土・炭化物粒子を僅かに含む。

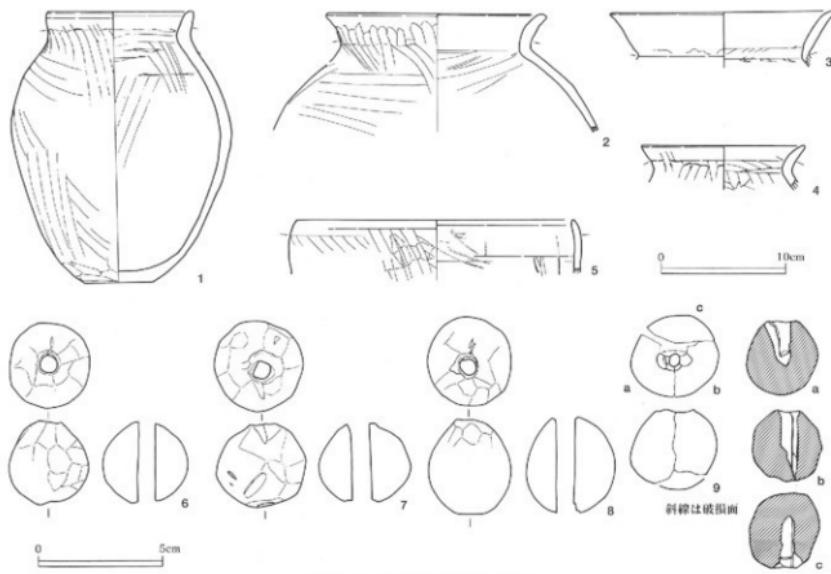


写真20 第3号住居址全景



写真21

P1土器出土状況



第20図 第3号住居址出土遺物

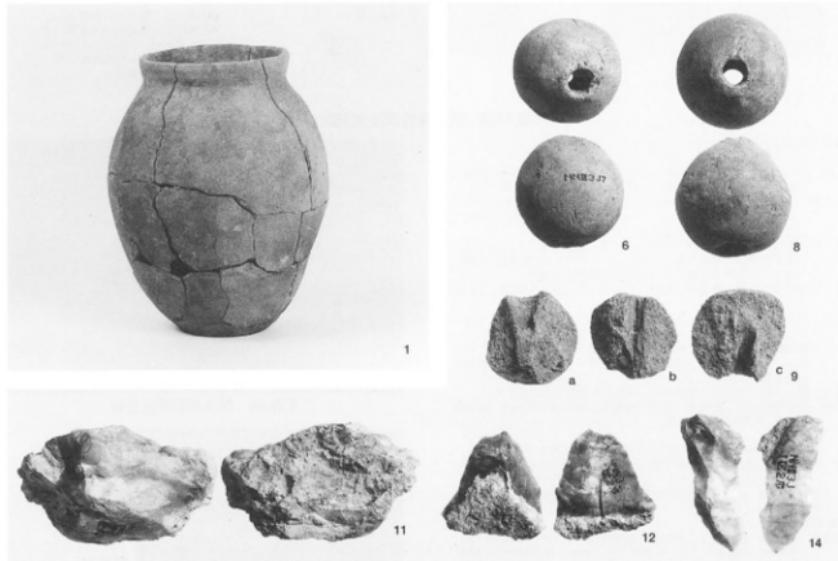
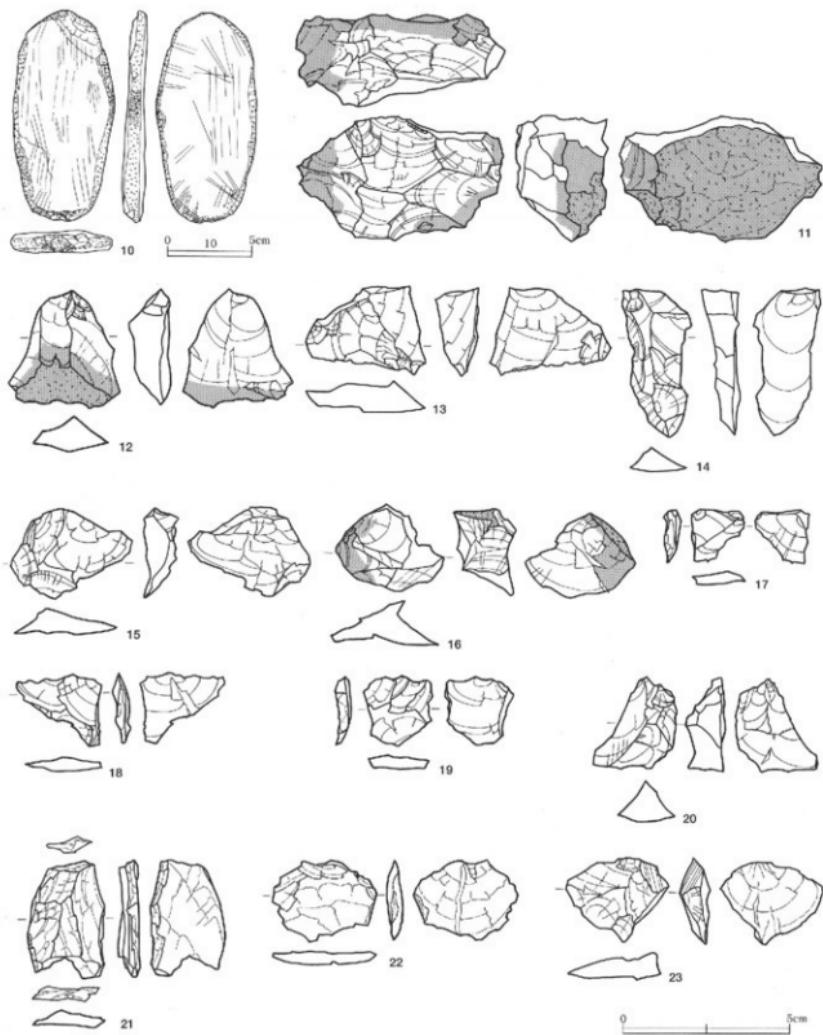


写真22 第3号住居址出土遺物



網点は石灰質部分

第21図 第3号住居址出土遺物

ており、北東側の貼り床上には、褐色土と暗褐色土と白色粘土を斑に混じえた竈の袖が部分的に残っていた。

覆土と遺物の出土状態 覆土は床面全体を覆う褐色系の2層と、その上位の黒褐色土層の1層に大きく分けられる。2層は混じる土の違いや量によって更に、床面上壁際に堆積する暗褐色の2b層、中央部床面上と2b層を覆う明褐色土の2a-2層、その上位の暗褐色土の2a-1層に分層できた。残存していた竈袖北東側、竈内と思われる部分には、A-B-C土層断面図に示したように、3~5層とした、白色粘土粒子や砂粒、焼土・炭化物粒子を含んだ土層が堆積していた。P1には2a-1層、2a-2層が床面から連続して落ち込んでおり、P2、P3の上部にも2a-2層と同質なaとした覆土が認められた。一方、周溝や床溝内の覆土は、床面上覆土とは異なるロームブロックと褐色土が混じった暗黄褐色土であった。

P1の底面直上からは1、2の土師器がひびは入りながらも原形を保った状態で検出されている。また、1には床面直上出土の、2には2層出土の小破片が接合している。竈内と思われる箇所の壁際、周溝覆土の6層直上からは4の土師器が出土している。

玉隨製の石器については、11の石核が攪乱内から、剥片は2層及び攪乱内から、碎片は1、2層から検出された。また、ベガマタイト製の剥片・碎片も1、2層及び攪乱内からの出土である。両石材の石器とともに散漫な分布状態で検出されている。

出土遺物 本住居址からは、土師器片162点、弥生土器片128点、球状土錐4点、玉隨製の石核1点、剥片8点、碎片4点、ベガマタイト製の剥片2点、碎片13点、チャート製の剥片1点、碎片2点、滑石製遺物1点が検出されている。

1~5は土師器で、1~4が壺形土器、5は大型の楕形土器であろうか。6~9は球状土錐であり、7の外面には棒状物質の圧痕がみられる。また、9は焼成不良で脆く、取り上げ時に3つに分割破損してしまったものであるが、その破損面の観察により、穿孔もしくは穿孔後の調整のために施されたと思われる、断面が丸い棒状工具による割突痕が3単位確認できた。3つの内の1つは孔の途中で止まっている。

10は頁岩製の楕円形の扁平錐を素材にした敲石で、全側面に敲打痕がみられ、表裏面は磨滅し、擦痕も確認

できる。長軸方向の端部には細かい剥離痕が観察されるが、刃部として作出されたものか、使川時の敲打によって生じたものかは判然としない。この剥離部と長軸と平行する一側面の中央部は特に敲打痕が密にみられる。

11~19は同一母岩と思われる玉隨製の石器である。この石材は玉隨のまわりに石灰質物質が付着しているもので、図中網点が掛かっている部分が乳白色をした石灰質部であり、半透明の白・灰・深緑・赤茶色が混在した玉隨部との境界は剖と明瞭に区別できる。

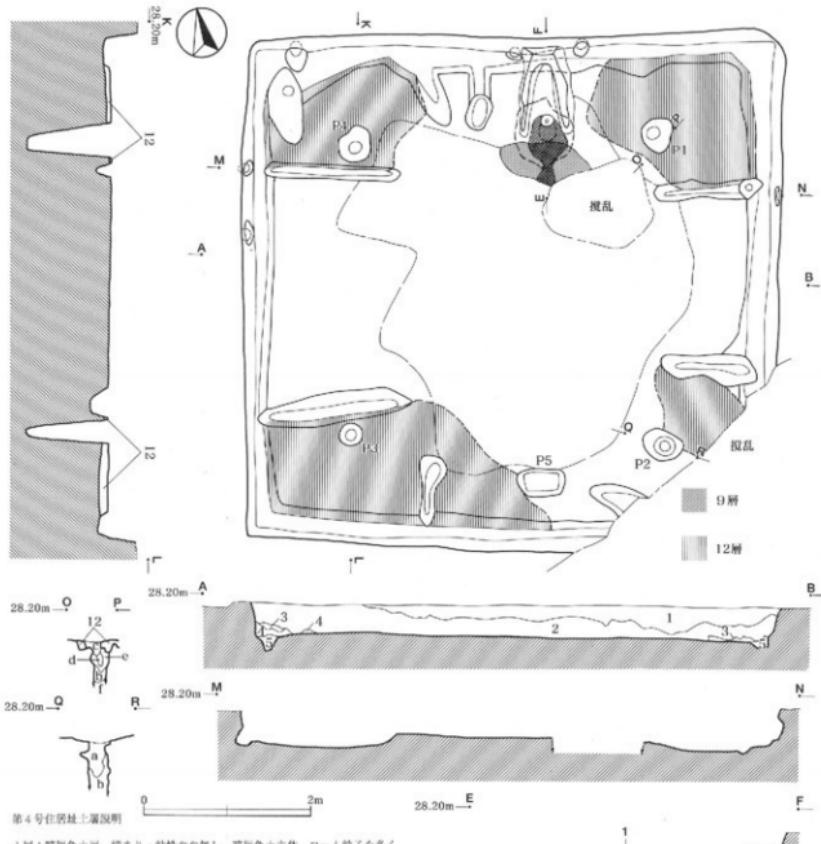
11は石核で、裏面に石灰質部の自然面を残し、複数の剥離面からなる打面が設けられている。剥離は打面方向からだけではなく、周縁の各方向から行われており、亀甲状を呈する。12~15は主要剥離面がほぼ残っている剥片で、12、14が縱長、13、15が横長のものである。12には自然面を残す石灰質部がみられる。16~19は折れ面を有する剥片で、17、18は一側縁が、19は向側縁が折れ面になっている。これらの剥片の背面は、石核の剥離作業面と同様、剥離の方向が異なる複数の剥離面から構成されている。同化はしなかったが、この他同一母岩の碎片4点が出土している。

20は赤色をしたチャート製の剥片であり、他に灰色のチャート製碎片が2点出土している。22、23はベガマタイトの石英質部製の横長剥片で、一側縁が折れ面になっている。この他13点の同石材の碎片が出土している。これらは節理面や折れ面を主体に構成された小片で、主要剥離面がほとんど残っていないか、把握できないものである。21は滑石製遺物で板状の剥片を素材としたもので、周縁は複数の折れ面で構成されている。

第4号住居址

位置 レンチ調査区のほぼ中央に位置する。当初トレンチによって一部が確認されたもので、遺構の範囲だけトレンチを拡張して調査にあたった。遺構確認面において、他のトレンチと同様多数の攪乱が認められたが、幸いにもその多くは住居址覆土の下部までは及んでいなかった。床面まで達していた攪乱は、南東隅を境としていた大規模な攪乱と、竈手前の床面を掘り抜いていた長径1.3mの攪乱の2ヶ所である。

規模と形態 南北辺6.3m、東西辺6.5mの方形の平面



第4号住居址上層説明

- 1層：暗褐色土層 締まり・粘性や無し。褐色土主体。ローム粒子を多く含み、焼土・炭化物粒子も含む。
- 2層：褐色土層 納まり・粘性や有り。褐色土を主体に暗褐色土が混じる。ロームブロック（径10mm）を少數含み、ローム・焼土・炭化物粒子を含む。埴瓦底では砂・白色粘土粒子を含む。
- 3層：赤褐色土層 締まり・粘性や無し。褐色土と暗褐色土と焼土が混じる。赤土粒子を含む。
- 4層：暗褐色土層 締まり・粘性や有り。暗褐色土を主体にロームが混じる。炭化物粒子をやや多く含み、部分的に灰化物・黒鉛鉱土が集中。
- 5層：褐色黃褐色土層 締まりやや厚り・粘性有り。コートと褐色土が互層状（厚10~20mm）に混じる。ハードロームブロック（径20mm）、ローム粒子を少數含む。泥炭・灰塵混土。
- 6層：褐色褐色土層 締まり・粘性有り。褐色土と白色粘土が混じ（厚10~20mm）に混じる。ローム粒子を含み、焼土・炭化物粒子も少數含む。地天井付。
- 7層：褐色褐色土層 締まり・粘性やや有り。褐色土を主体に褐色土が混じる。ローム粒子を多く含み、焼土・炭化物粒子を少數含む。
- 8層：暗褐色土層 3層と同質だが、ローム粒子が少なく暗褐色。
- 9層：褐色褐色土層 締まり・粘性無し。均質な暗褐色土にローム粒子を多く含む。洗土・炭化物粒子を少數含む。
- 10層：褐色土層 締まり・粘性や無し。褐色土に多量のロームブロック（最大径15mm）と焼土粒子が混じる。炭化物粒子も含む。
- 11層：褐色土層 締まり・粘性や無し。褐色土に多量のロームブロック（最大径15mm）とローム粒子が混じる。焼土・炭化物粒子も含む。
- 12層：暗褐色土層 締まり・粘性有り。褐色土にハードロームブロック（最大径50mm）、ローム粒子を多量に混じる。泥炭土。

第22図 第4号住居址実測図



写真23 第4号住居址全景



写真24 灶周辺

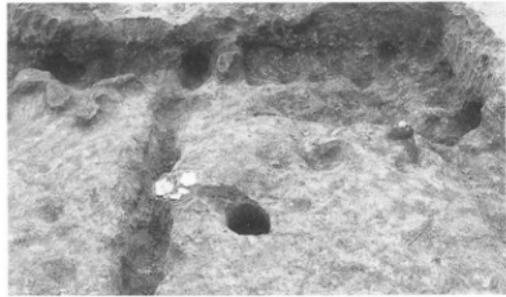


写真25 床溝と壁ピット（北西部）



写真26 北西隅3、4層

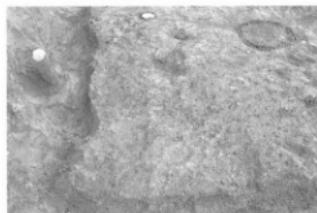


写真27 北東隅貼床焼け込み

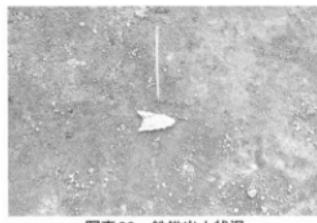


写真28 鉄鎌出土状況



写真29 滑石製造物(56)・刀子出土状況



写真30 炭化材A・B検出状況



写真31 炭化材C検出状況



写真32 炭化材D検出状況

形で、壁の高さは40cmを測る。床面は地山ローム層と、12層とした褐色土にハードロームブロックが多量に混じった暗黄褐色土の貼床部からなる。住居址の四隅に存在する貼床の掘り方は、中央側から隅に向かって緩やかに傾斜する形態で、壁付近では床面から約10cmの深さになる。床面隙間に深さ約10cmの周溝が全周巡っており、その周溝から延びる深さ10~20cmの床溝が7ヶ所存在する。床溝は東側、西側に2ヶ所づつ、北側に2ヶ所、南側に1ヶ所設けられており、東西両側のものはちょうど貼床部を区切る形になっている。また、これら周溝・床溝の覆土は、貼床土を切る形で堆積しており、周溝・床溝の掘り方と貼床の掘り方は段差無く連続する。

床面上で検出されたピットは計5ヶ所で、そのうちの貼床部に設けられたP 1~4は主柱穴と捉えられる。床面からの深さはP 1が100cm、P 2が104cm、P 3が99cm、P 4が122cm。P 5としたピットは南壁際の中央部に位置する長径60cm、深さ19cmの皿状のものである。また、壁を穿ったピットが、東壁に1ヶ所、西壁2ヶ所、北壁に3ヶ所検出された。いずれもほぼ直立する壁面から下方斜めに掘り込まれており、東西両壁北寄りのものは床溝の延長上に、北壁の2ヶ所は、同壁やや東寄りに設けられた竈の両側に位置する。

竈の残存していた袖は、白色粘土と褐色土が斑状に混じった土で築かれており、壁から袖先端部までは1.1mを測る。また、壁際では周溝の覆土上に袖が築かれている。一方、燃焼部の下には南北方向86cm、東西方向72cm、深さ10cmの皿状の掘り方が存在する。その掘り方内にはロームブロックと焼土・炭化物粒子を含んだ10・11層が堆積し、火床面や袖先端部はその上面に設けられている。なお、掘り方の底面は赤化は認められないものの、被熱のためかボロボロに劣化しており、古い火床面であった可能性がある。その場合、竈は作り替えられることになる。火床面は掘り方内の10層上面とさらに南側の地山ローム層が、長さ88cmにわたって焼け込んだものである。

覆土と遺物の出土状態 床面上と隙間に2層とした褐色土層が覆い、その上位には1層とした黒褐色土層が堆積する。東西壁際の2層下床面上には、3層とした焼土層と4層とした炭化物粒子を含んだ暗褐色土層が存在

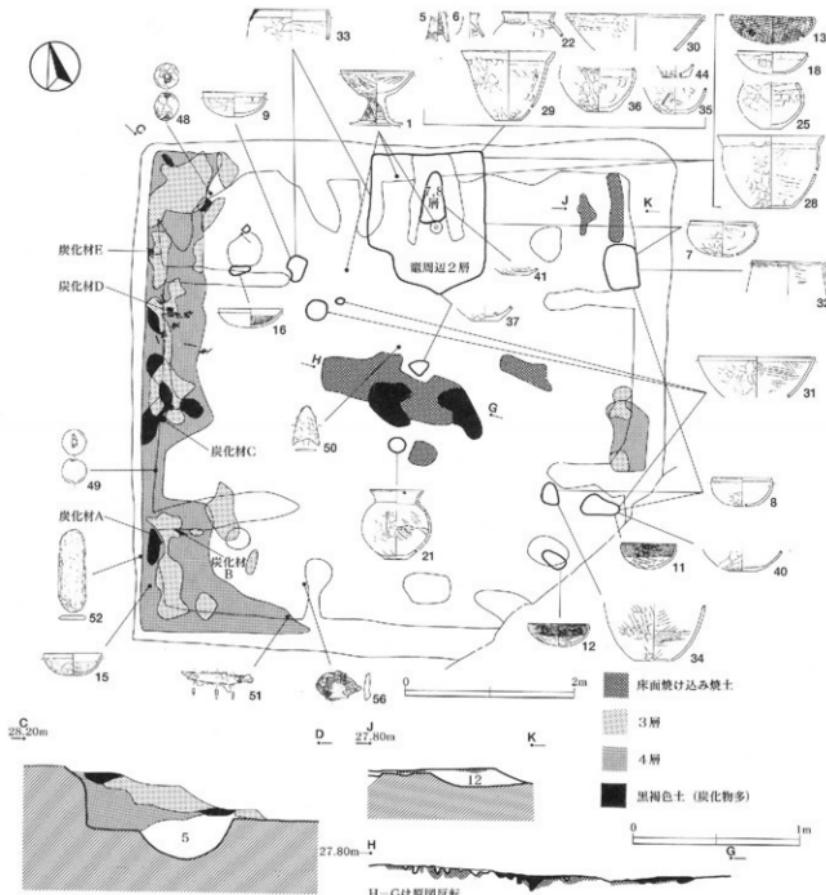
し、両層中には炭化材や炭化物粒子を多く含む黒褐色土がブロック状に存在する。また、3層と4層が重なるところでは、4層が下位になっている。一方、床面が焼け込んでいる箇所が、中央部に3ヶ所、北東隅に2ヶ所認められる。中央部の1ヶ所は長さ2.1m、幅75cmにわたって、ローム層の床面が焼け込んだものである。断ち割り断面によって、振幅5~8cmの細かい凹凸にローム層上面が劣化し、その内部が赤化している状況と、内部に炭化物を多く含む黒褐色土が部分的に入り込んでいる状況が観察された。北東隅の2ヶ所は燃焼材の形態を反映したものか、貼床土である12層上面が細長い形に(幅18cm程)赤化している。以上の覆土の状況は住居施設以後に燃焼現象があったことを物語る。

周溝と床溝の覆土は5層としたロームと褐色土が斑状に混じた暗黄褐色土で、3、4層が上に堆積する箇所でも、焼土・炭化物の混入はみられない。主柱穴についてはP 1、2で断ち割り調査を実施したが、P 1では貼床土12層がピット覆土の一部を覆っている状況が確認され、柱を立ててから貼床土が貼られたことが理解される。一方、ピット覆土の最上層であるaやcには焼土粒子が含まれており、柱は抜かれたものと思われる。

竈火床面の煙道部側端には、1の高杯形土器の杯部を逆位に掘えた支脚が残されていた。この支脚は杯部内に袖材と同質の粘質土を充填することによって固定されており、充填された粘質土の火床面側は被熱のため赤化していた。また、焚き1手前の火床面直上には9層とした均質な黒褐色土層が薄く堆積していた。竈内の燃焼部から沿道部にかけては7、8層とした暗褐色土層が堆積し、その上位には崩落した天材と思われる6層とした褐色土と白色粘土が斑状に混じった上層がのっていた。竈は2層に覆われていたが、竈周辺の2層中には竈構築材が供給源と思われる白色粘土粒子や砂粒が含まれており、この竈周辺2層と竈内の7、8層中から多くの土器器片が集中して検出されている。

出土遺物(第24~26図) 土器器片1,408点、須恵器片3点、弥生土器片1点、球状土錘2点、鐵錐1点、刀子1点、板状石製品片7点、滑石製造物13点が検出された。

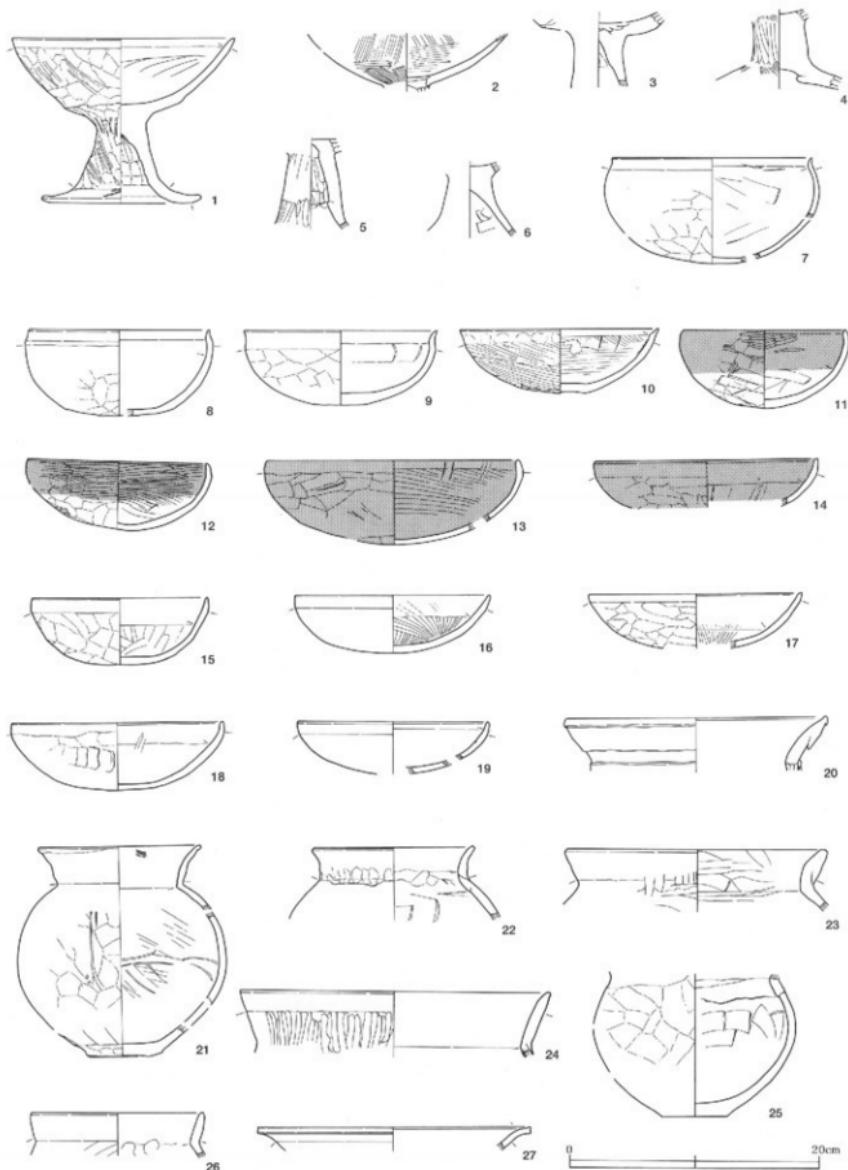
1~44は土器である。1~6は高杯形土器で、1は竈の支脚に転用されていた杯部と、竈内7層、竈周辺



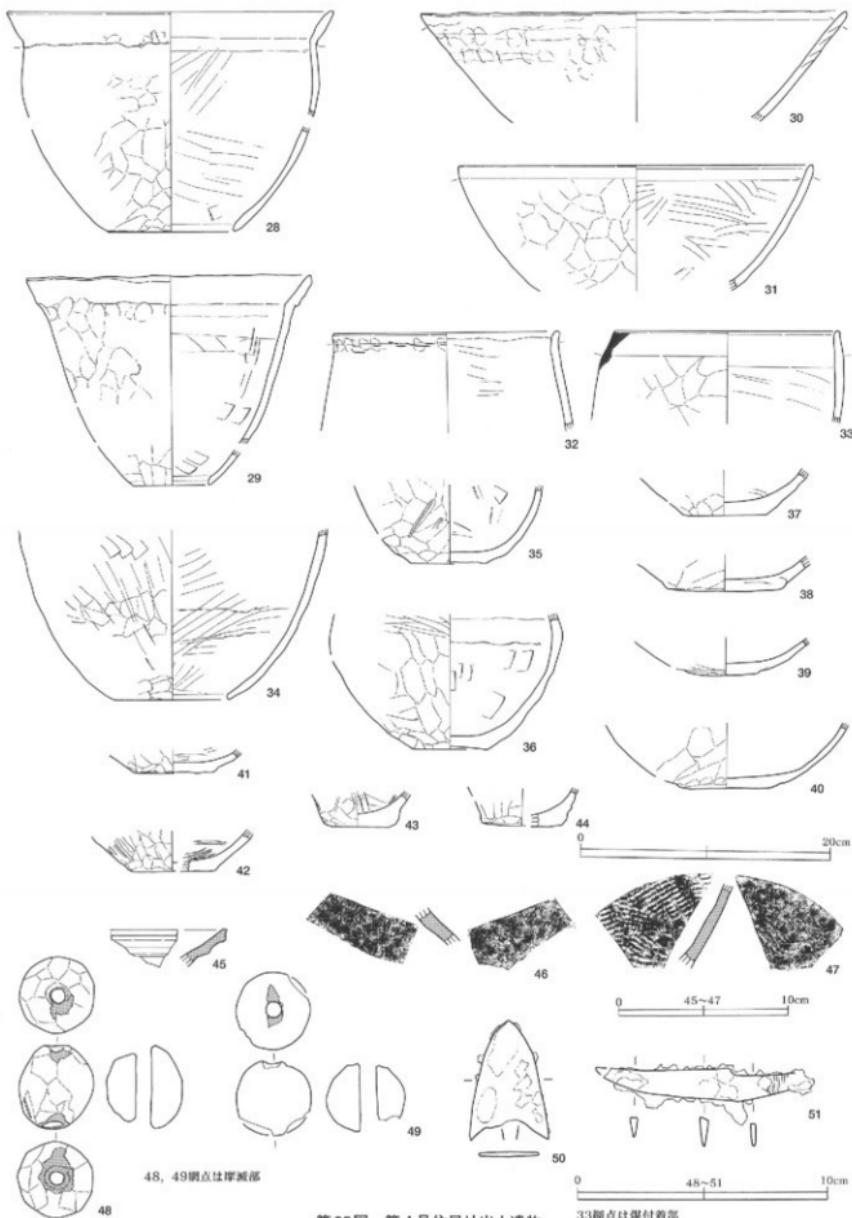
第23図 第4号住居址遺物出土状況図

2層及び床面上から出土した脚部が接合し、杯部の内面は被熱による剥落が顕著である。7、8は椀形土器、9～19は杯形土器で、7～10は口唇部内面に稜を持つ。11～14の外面上には赤色塗彩が施されている。20は複合口縁の壺形土器。21～27は壺形土器。27の口縁部破片はヨコナデによって、口唇部外面が面取り状に、内面が若干つまみ上げ状に整形されている。この27は表面

は橙褐色に焼成されているが内部は白っぽく、また胎土に細かい雲母粒子が目立つ点で、他の個体とは趣を異にする。須恵器の製作技法を一部模倣した土器であろうか。28、29、34は瓶形土器で、孔はいずれも底が抜けた形の単孔である。29の同一個体と認定した破片の中には、第5号住居址覆土から出土した底部破片1点が含まれる。30～33は瓶形土器と考えられる土器で、30は輪積

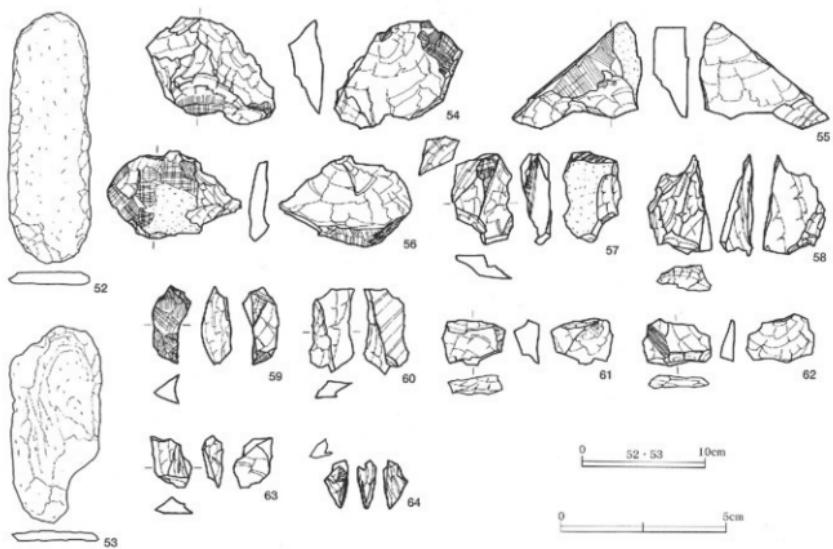


第24図 第4号住居址出土遺物



第25図 第4号住居址出土遺物

33標点は環付着部



第26図 第4号住居址出土遺物

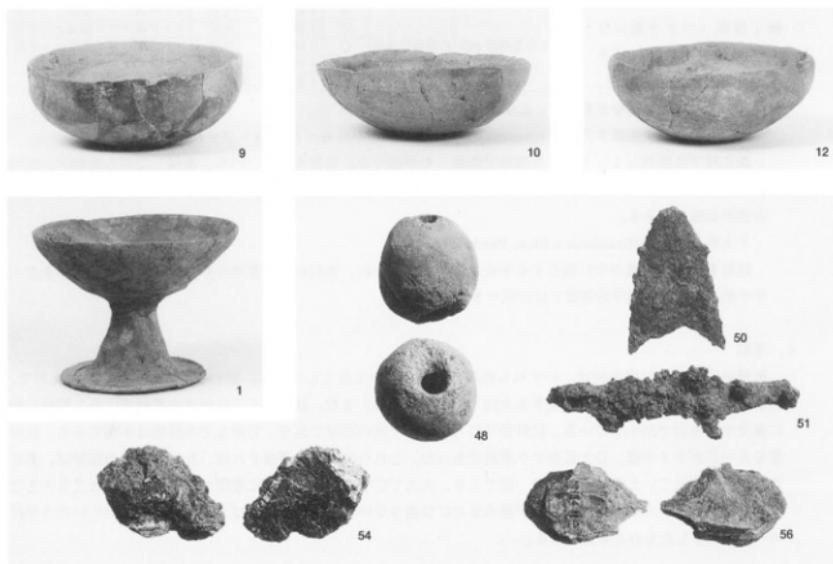


写真33 第4号住居址出土遺物

野中遺跡第2次調査第4号住居址から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

野中遺跡第2次調査で検出された第4号住居址は、出土遺物などから古墳時代後期の住居跡と考えられている。壁際床面上に堆積していた4層は、ロームを逐層に含む土層で、部分的に炭化物や炭化物起の黒褐色土が集中して見られ、その上位には焼土を多く含む3層が堆積している。これらの所見から、第4号住居址は、いわゆる施火住居跡であり、炭化物のうち炭化材は、住居構築材などの一部が炭化・残存したものと考えられている。

本報告では、住居構築材に由来すると考えられる炭化材について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、第4号住居址から出土した炭化材5点（資料番号A～E）である。このうち、2点（試料番号D・E）はカヤ状の炭化物である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2. 方法

木口（横断面）・板目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は落葉広葉樹1種類（コナラ属コラナリ属クヌギ節）とイネ科タケア科に同定された。

表1 樹種同定結果

山土遺構	時代時期	試料名	出土層位	形状	樹種
第4号住居址(4J)	古墳時代後期	A	4層上面	丸状	コナラ属コラナリ属クヌギ節
		B	4層上面	丸状	コナラ属コラナリ属クヌギ節
		C	4層中面	板状	コナラ属コラナリ属クヌギ節
		D	4層中～上面	カヤ状	イネ科タケア科
		E	4層中～上面	カヤ状	イネ科タケア科

各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コラナリ属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

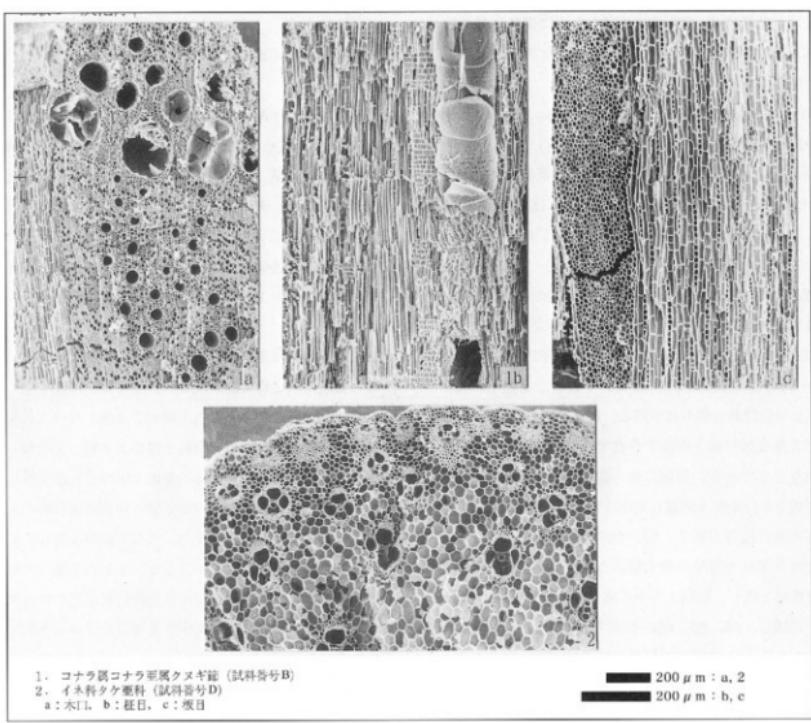
環孔材で孔隙部は1～3列、孔隙外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交差状に配列する。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

・イネ科タケア科 (*Gramineae* subfam. *Bambusoideae*)

維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱が認められ、放射組織は認められない。タケア科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

4. 考察

樹種同定を行った炭化材は、いずれも住居西側の壁際から出土している。試料番号AとBは、共に丸材で、Aが壁とほぼ平行、Bが壁と直交する方向で出土している。また、試料番号Cは板状の部材で、Bと同様に壁に直交する方向で出土している。試料番号DとEはカヤ状の部材であり、方向などの詳細は不明である。試料番号A～Cがクヌギ節、DとEがタケア科であった。これらの結果を考慮すれば、丸材と板状の部材は、共に窓際で利用されていた垂木や板状の一部であり、火災で住居が崩壊した際に窓際から住居内に倒れたものと考えられる。一方、カヤ材はタケア科が垂木などには適さないことを考慮すれば、屋根などを葺いていたカヤ材の一部が残存したものと考えられる。



図版1 炭化材

関東地方では、これまでにも多くの遺跡で住居構築材について樹種同定が行なわれている(高橋・植木, 1994)。それらの結果を見ると、古墳時代ではクヌギ節・コナラ節が圧倒的に多く利用されており、今回の結果とも一致する。この結果から、第4号住居址では、火災とその後の埋積過程で消した部材を含めて、クヌギ節を中心とする種類構成であったと推定される。

住居構築材に確認された種類は、その遺跡周辺で行われた古植生の調査結果とも一致することが多く、基本的には遺跡周辺で入手可能な種類を利用していたと考えられている(高橋・植木, 1994)。このことから、本遺跡周辺には落葉広葉樹のクヌギ節が分布していた可能性が高い。

また、茨城県や千葉県では、古墳時代住居構築材として沿海地でアカガシ亞属などの常緑広葉樹が多く、内陸で落葉広葉樹が多く利用される傾向がある(高橋・植木, 1994)。これは、沿海地と内陸部で植生が異なっていったことを示す可能性がある。今後さらに多くの資料を蓄積し、詳細を明らかにした。

引用文献

高橋 敦・植木真吾(1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p.5-18, パリノ・サーヴェイ株式会社

み痕を残す程いくつりである。33の口縁部外面の一部には煤が付着する。35～42は蓋もしくは壺形土器の胴下部及び底部破片と思われる。43、44はミニチュア土器の底部であろうか。

45～47は須恵器変形土器の破片である。48、49は球状土錐でいずれも開孔部が摩滅している。特に、48は両開孔部とも同一方向に偏って著しく摩滅している。50は短茎長三角形縁に分類される鉄錐（註）。茎部は欠損している。51は鉄製刀子で、柄部に紐状のものを巻いた木質部が残る。

52、53は点紋粘板岩ホルンフェルス製の板状製品で、周縁は剥離または敲打で整形されている。この他に53と同一母岩と思われる板状の破片が5点出土している。54～64は滑石製遺物。54は剥片を素材としたもので、背面には階段状の削り痕が残る。腹面にも打点付近に擦れたような削り痕と刃痕が存在する。55も厚手の剥片を素材としており、背面に削り面がみられる。56は削りが施された素材を剥離した洞片であり、剥片末端にはもとの素材縁辺が残る。57、58は洞片を素材とし、周囲は折り取りや調整剥離で整形されている。57は背面に自然面を残し、腹面上方から施された削り痕と刃痕が段状に残る。59、60、63、64は折り取られた調整洞片と思われる。59は削りが施された素材の縁辺にあたり、63、64には折れ面打点側の稜付近に刃痕が残る。61、62は小型の剥片の末端に折れ面が認められるもので、61の腹面打点付近には擦れたような削り痕が残る。62の背面には階段状になった削り痕と刃痕が存在するが、工具は背面の上方から入っている。

炭化材について 西壁際の4層中～4層上面にかけて炭化材が検出された。いずれも小片であったが、その内遺存状態の良いものを選び、A～Eと名付けて取り上げ樹種同定を行った。A、Bは丸材で、Aは径20mm、Bは径20mm、長さ150mmを計る。Cは板材と思われ、D、Eはカヤ状の炭化材である。分析の結果、A、B、Cはコナラ属コナラ亜属クスギ等、D、Eはイネ科タケ亜科に同定された。詳細については、38頁に掲載したパリノ・サーヴェイ株式会社の報告を参照されたい。

（註）鉄錐の分類名は、霞ヶ浦町郷土資料館の千葉龍司氏に御教示いただいた。

第6号住居址

位置 ③区に位置する。北西側の大部分が調査区外にあたる。

規模と形態 平面は方形をしていると思われ、調査された南東辺は6.3mを測る。壁の高さは70cm。床面は地山ローム層で構成され、壁に沿って深さ10cm未満の周溝が巡る。また、南西部寄りの周溝からは床溝が中央部に延びている。ピットは2ヶ所検出されている。P1は長径104cm、短径67cm、深さ53cmの隅丸長方形の貯蔵穴状のもので、P2は径22cm、深さ28cmの小ピットである。

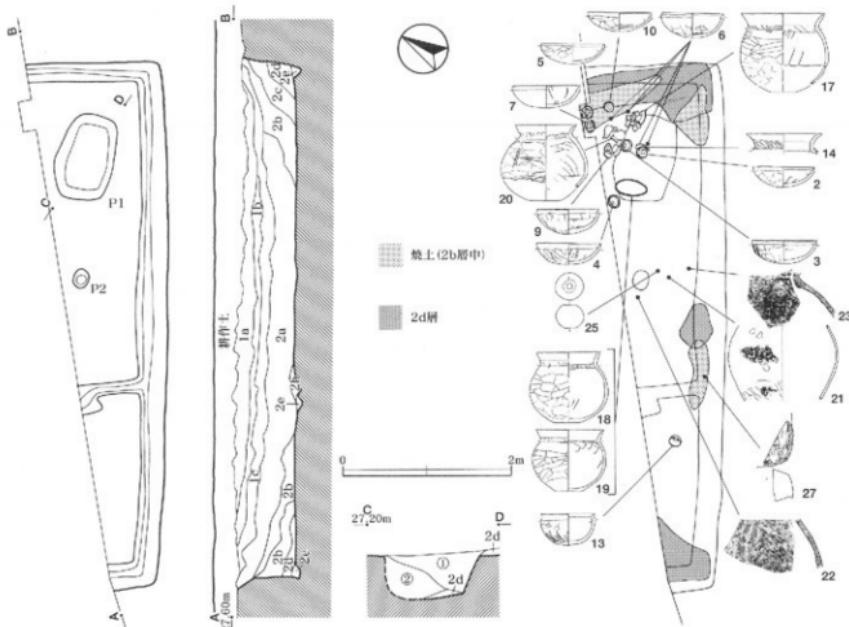
覆土と遺物の出土状態 覆土は大きく黒・暗褐色系の1層と褐色系の2層に分かれる。壁際には、床面上から顆粒に炭化物を多く含む暗褐色土層の2d層、ロームと褐色土が斑状に混じった暗褐色土層の2c層、2c層と同質だがロームの割合が少ない褐色土層の2b層が堆積し、2b層と中央部床面を、2c層と同質の暗褐色土層の2a層が覆っていた。また、その上位の1層は、混じる土質の違いによって1a、1b、1cの3層に分層される。2b層中には炭化物や炭化物起源と思われる黒褐色土、それに焼土粒子が集中する部分がブロック状にみられる。

P1の底面上には2d層が薄く存在し、その上を床面中央方向から流れ込むような形で、ロームを主体にした締まりの無い2e層が堆積し、さらに上位には焼土・炭化物粒子を多く含むロームと褐色土が混じたやはり締まりの無い1層が覆っている。周溝、床溝では、床面上に堆積する覆土とは異なる、2e層とした褐色土にハードロームブロックが混じった明褐色土が覆土となっていた。

P1①層からその北西側床面直上、及び2層にかけて、土師器の完形もしくは完形に近い杯形土器と、壺形土器の大型破片がが集中して検出された。10を除く杯形土器は口縁を上に向けており、つぶれて破碎していたものもあったものの、ほぼ原型を保った状態で出土している。

出土遺物（第28、29図） 土師器片356点、須恵器片6点、球状土錐1点、上器片利用研磨具1点、砥石1点、滑石製遺物6点が検出されている。

1～21は土師器。1～12は杯形土器である。4の内



第27図 第6号住居址実測図

第6号住居址上層説明

1 a層：暗褐色土層 繼まり・粘性やや有り。褐色土（下部に多い）と暗褐色土が混じる。ローム粒子も含む。

1 b層：黒褐色土層 繼まり・粘性有り。黒褐色土と暗褐色土、それに若干の褐色土が混じる。ローム粒子を含む。

1 c層：暗褐色土層 繼まり・粘性やや有り。黒褐色土と暗褐色土と褐色土が混じる。ローム粒子を含む。

2 a層：暗褐色土層 繼まりやや有り・粘性有り。ロームと褐色土が斑状（径5~50mm）に混じる。ハードロームブロック（径30mm）、斜いローム粒子を含む。

2 b層：褐色土層 繼まりやや有り・粘性有り。ロームと暗褐色土が斑状（径10~30mm）に混じる。ハードロームブロック（最大径20mm）、斜いローム粒子を含む。炭化物・黒褐色土・焼土粒子が集中する個所有り。

2 c層：暗褐色土層 2 a層と同質。

2 d層：褐色土層 繼まり・粘性やや有り。ロームと暗褐色土が混じる。炭化物を多く含み、部分的に黒褐色土がみられる。

2 e層：明褐色土層 繼まり・粘性有り。褐色土にハードロームブロック（最大径30mm）、ローム粒子を多く含む。周溝・床溝底土。（ピット覆土）

①層 明褐色土層 繼まり・粘性無し。ロームと褐色土が混じる。ロームブロック（最大径10mm）、焼土・炭化物粒子を多く含む。2c層の二次堆積か？

②層 暗褐色土層 繼まり・粘性無し。ロームを主体に若干の褐色土が混じる。焼土・炭化物粒子はほとんど含まない。

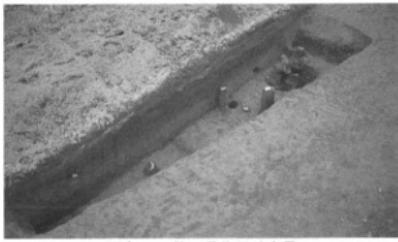
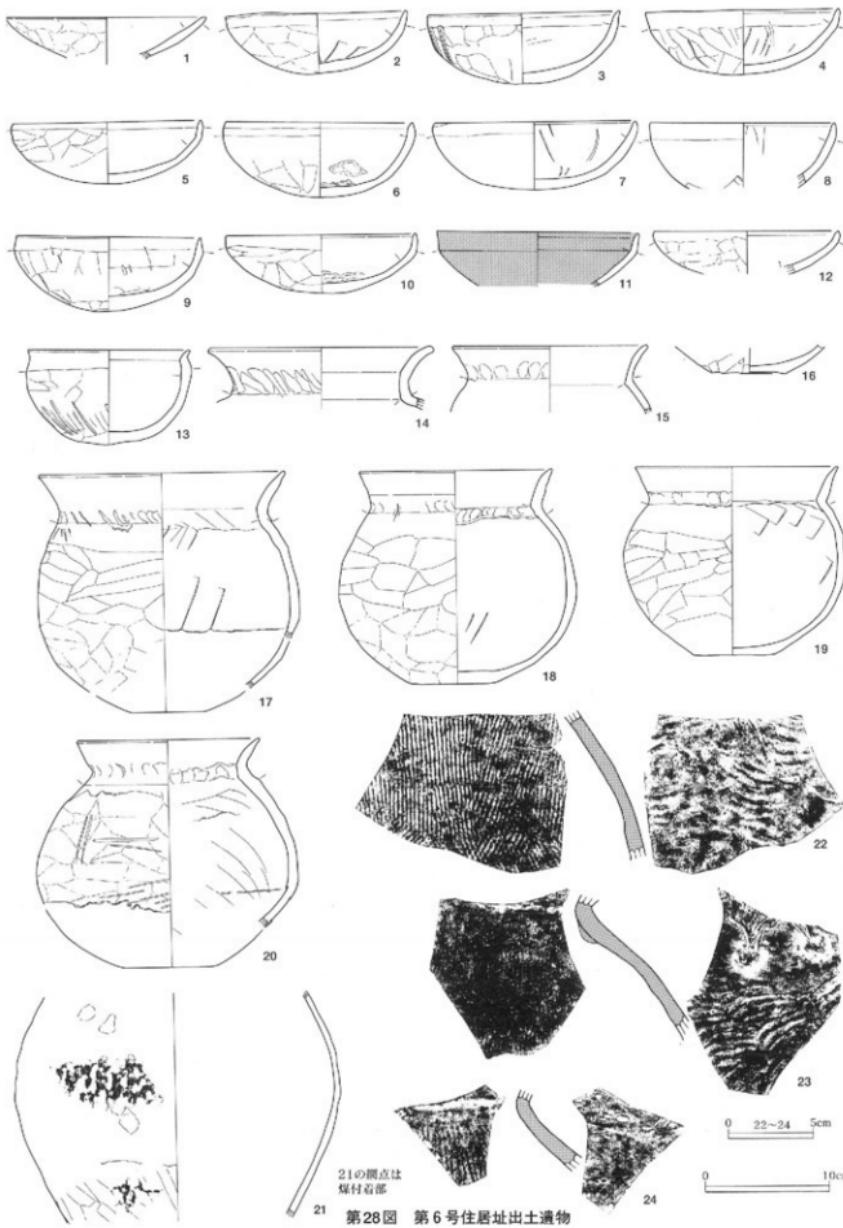


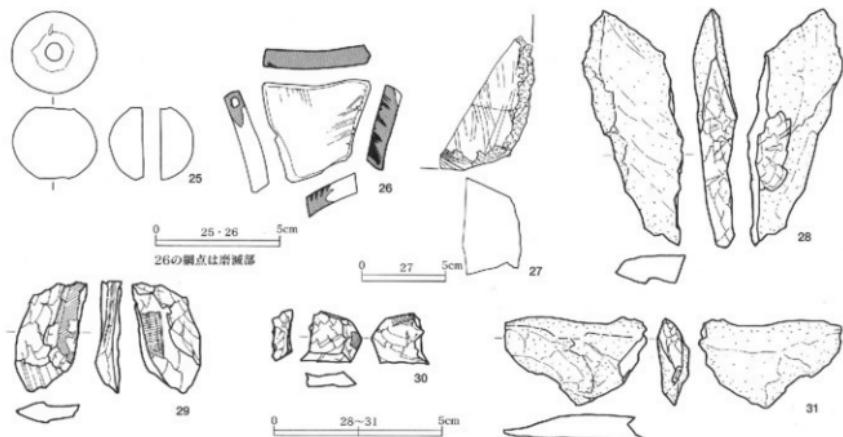
写真34 第6号住居址全景



写真35 第6号住居址P1付近土器出土状況



第28図 第6号住居址出土遺物



第29図 第6号住居址出土遺物



写真36 第6号住居址出土遺物

面には暗文状の磨き整形が部分的にみられる。2の口縁部外面の一部には煤の付着がみられ、11の内外面には赤色塗彩が施されている。4、6、10の内面は被熱により剥落が顕著で、6、10の内面には褐色の付着物がみられる。

14、15、17～20は壺形土器である。14は口唇部付近が強く外反するもの、17～20は口縁が直線的に聞く形態である。17～20は肩部に撫で、胴中部以下に横方向の削り整形が施されている。底部付近や20の胴部には、削りの後撫でが加えられているが、部分的であり、削りの痕跡を良く残す。16は底部破片。21は壺形土器の胴部破片と思われ、胴部最大径付近と胴下部外面の一部に煤の付着が認められる。

25は球状土錐で、開孔部は削りにより面取りがなされている。26は土器片を利用した研磨具である。磨滅部は4面の破損断面にみられ、表面と破損断面の接部には擦痕も観察できる。27は凝灰質砂岩製の砥石欠損品である。礎面は一面で、側面と裏面は剥離面上に戴打が施され整形されている。28～31は滑石製遺物。28、31は自然石が折り取られたもの。29、30は剥片を素材としたもので、一側縁が折れ面になっている。29の両面には、折れ面側から施された削り痕が認められ、削りの末端は段や刃痕で止まっている。30には腹面打点付近に削り痕が残る。この他滑石製の碎片2点が出土している。

第7号住居址

位置 ③区に位置する。北西側約1/4が調査区外に入っている。その部分についてはトレンチによって遺構の範囲確認だけをおこなっている。また、住居址とはほど重なるように風倒木痕が存在する。風倒木痕の方が古く、住居址床面の大部分には貼床が施されていた。

規模と形態 北西—南東方向2.85m、北東—南西方向3mの隅丸方形の平面形をし、壁の高さは30cmである。南東壁際では地山ローム層もしくは風倒木痕上面がそのまま床面となっていたが、他の部分は貼床が施されていた。貼床の掘り方は地山ローム層や風倒木痕上面から約10cm程さらに掘り下げたもので、8層とした褐色土とロームが斑状に混じった土が貼られていた。風倒木痕は貼床が施されていない南東壁際の床面上で、倒木と一緒に

緒に巻き込まれたと考えられる暗褐色土が半円形に巡る帶状に検出されたことによって確認されたものである。当初は住居址に伴う施設と考えていたが、炉址の断ち割り調査や貼床土の掘り下げによって、住居址中央に長径2m以上、短径1.8mの範囲に広がる、住居構築前の風倒木痕であることが判明した。

炉址は床面中央やや南東寄りの所に存在する。炉址の部分には貼床が存在せず、風倒木痕のロームマウンド部上面が長径約40cmにわたって焼け込んでいた。焼け込み面は振幅約6cm程の凹凸状に劣化しており、その凸部が赤化していた。ビットや周溝等他の施設は検出されていない。

覆土と遺物の出土状態 床面上には6層とした暗褐色土層が覆い、中央部ではその上に黒褐色土層の3層と、6層と同質の暗褐色土層である1層が下から順に堆積している。一方、壁際には2、5、7層とした褐色土層や4層とした暗褐色土層がみられ、褐色、暗褐色が互層になるように堆積する。また、炉址とその周辺の床面直上には、9層とした多くのローム粒子や焼土粒子を含む黒褐色土層が、長径80cmの範囲にわたって薄く貼り付くようみられる。南隅の7層中からは炭化材が、炉址北西側の床面直上からは炭化物の集中箇所が検出されている。



写真37 第7号住居址全景

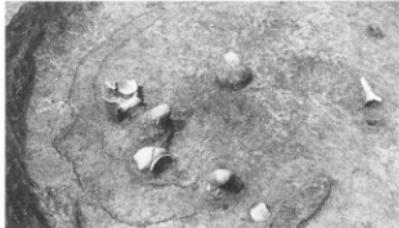
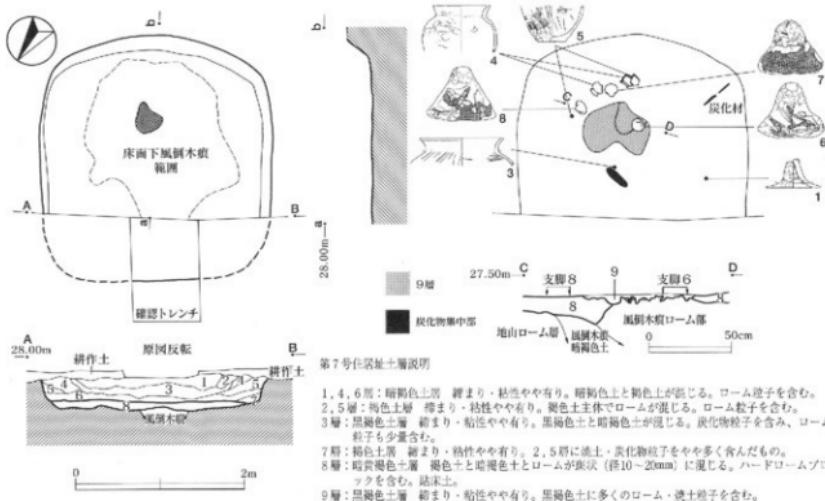


写真38 土製支脚出土状況



第30図 第7号住居址実測図

本住居址では、炉址を取り囲むように6, 7, 8の土製支脚が出土している。6は炉址上にあたる9層上面、7, 8は炉址からやや離れた床面直上から正位の状態で出土している。7の支脚先端は炉址の方を向いていたが、6, 8の先端は外側を向いていた。また、床面直上出土の4の土師器壺は、7の支脚を挟む形で2点の大型破片に分かれて検出された。

出土遺物（第31図） 土師器片73点と土製支脚3点が出土している。1～5は土師器。1は高杯形土器、2が鉢形土器、3, 4が変形土器で、5が底部破片である。3の壺形土器は口唇部付近が強く外反するのに対し、4の変形土器は直線的に開口口縁部を持つ。また、4は被熱による外面の剥落が顕著である。

6～8は土製支脚で、いずれも安定感のある梢円形の下部から徐々に細くなつてき、先端部が前屈する形態である。全体的には焼成は不良、被熱硬化しているのは表面のみで、内部や底面は未焼成な白色粘土である。破損により内部断面が観察できた7では、表面から5mm程が橙褐色または褐色に被熱硬化しており、続く12mm程は被熱によって橙色に変色はしていたが脆弱であった。底部については未焼成なため本体と汚れ土との明確

な区別がつきにくく、クリーニングでは白色粘土以外の土は汚れ土として落としている。また、底面とした白色粘土表面には炭化物粒子の付着がみられた。これらの状況からは、当初支脚は未焼成のままで使用され、使用に伴う炉の熱によって焼成が進んだものと考えられる。被熱硬化した表面には、茎状の植物圧痕が残り、先端部付近には撫で整形の痕跡がみられる。内部には茎状の圧痕は認められなかったが、これは未焼成なため圧痕として残らなかっただけで、胎土に植物質のものを混入していた可能性がある。先端部にすれば認められない。また、径1.5～3cmの孔がそれぞれの個体に1～複数個みられるが、穿孔部位や方向に統一性は認められず、いずれも貫通はしていない。表面が被熱硬化している部位に位置する孔でも、孔内表面には被熱による硬化もしくは橙色化した痕跡は認められず、使用前の制作時に開けられた可能性は低い。なお、図示した7, 8は完形品ではないが、取り上げ時に破損・崩壊させてしまった分があり、検出時点では両者ともにはば完形であった。



6~8の網点は未焼成部もしくは被損部

第31図 第7号住居址出土遺物

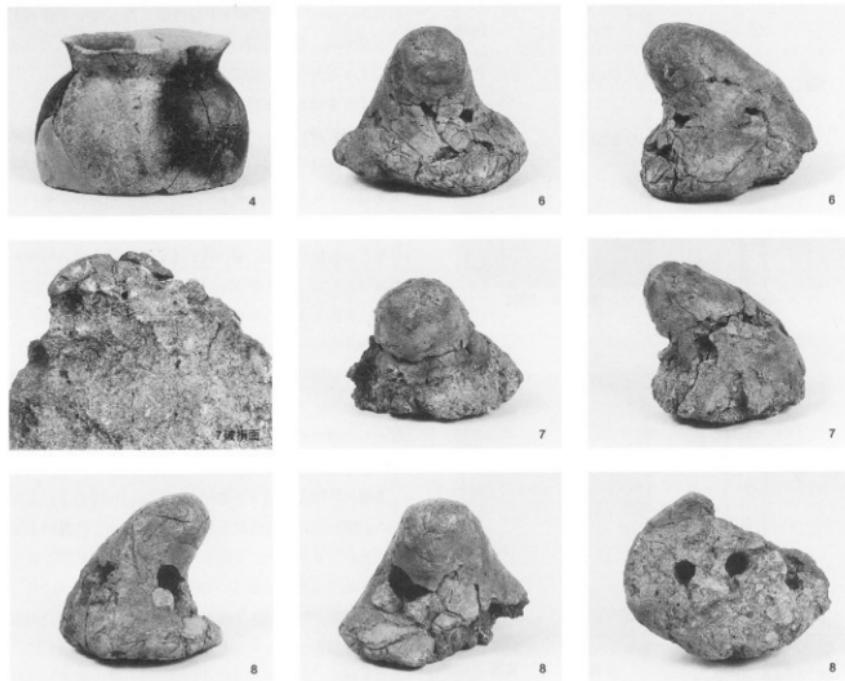


写真39 第7号住居址出土遺物

第1号溝状造構

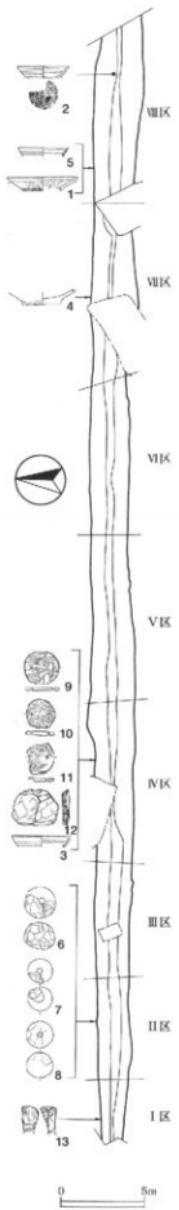
位置 ①区と②区にわたって位置し、①区の南西角から真東に向かって真っ直ぐに延びている。東端では調査区外に延びており、西端でも調査区外に続いている状況が確認されたが、延長線上に位置する隣接したトレンチでは確認されていない。但し、調査区西端では確認面からの深さが浅くなっている、トレンチ部では遺存していない可能性がある。

本溝状造構は第32図に示したように、西から便宜的にI～Ⅴ区の8つの区に分けて調査をおこなったが、記述にあたってもこの区の呼称を用いる。ちなみにⅥ区とⅦ区の境が調査区の①区と②区の境に対応する。

Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ区に底面まで達した擾乱が存在し、Ⅶ区とⅧ区の境界部には、立木保存のための未調査部がある。

規模と形態 地山ローム層を掘り込んだものであるが、Ⅱ層がみられる東端の断面観察では、Ⅱ層上面から掘り込みが認められた。I区西端では幅1.1m、深さ30cm、Ⅲ区では最大幅2.2m、最深54cm、V区では最大幅2.6m、最深56cm、Ⅶ区では最大幅3m、最深85cmと東に向かって幅が大きくなり、確認面からの深さが深くなる。また、確認面の高さは西の方が高いため、底面の標高値ではもっと差が大きく、西端より東端の方が1m程低い。

断面は基本的に平坦な底面から壁面が直線的もしくは外側に反り気味に立ち上がる形態であるが、Ⅱ、Ⅳ、Ⅶ区では底面から壁面への変換点に10cm程の段がみられる。また、両壁面を中心にして計168ヶ所のピットが検出されている。これらのピットの規模は、最大径85cm、最深85cm、最小径13cm、最浅6cm、平均径30.4cm、平



第32図
第1号溝状遺構全体図



写真40 VII区



写真41 V・VI区



写真42 III・IV区

均深25.8cmである。ピットは斜面になっている壁面部でも基本的に垂直に掘られており、平面分布としては団塊に1ヶ所と少ない他は各区に分散している。

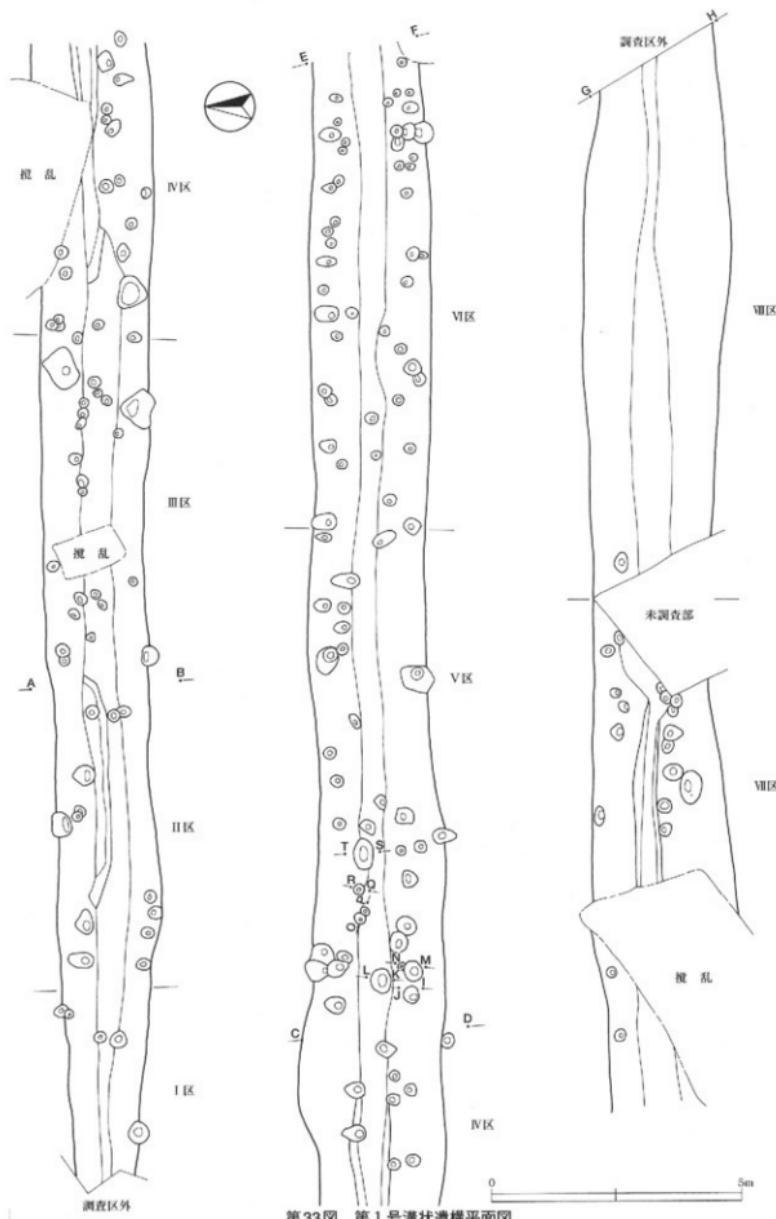
覆土と遺物の出土状態 底面と壁面上には2層とした褐色土層が覆い、その上位に黒・暗褐色系の1層が堆積する。1層はさらに上位から黒褐色土層の1c層、暗褐色土層の1a層、1a層より黒味が強い暗褐色土層の1b層に分層される。1c層はI区では認められず、東端にあたるIV区では1c層の更に上位に、褐色土と暗褐色土が斑状に混じった暗褐色土層が部分的に認められる。また、IV区とV区の境界部では、壁面上部の2層上的一部が硬化していた。

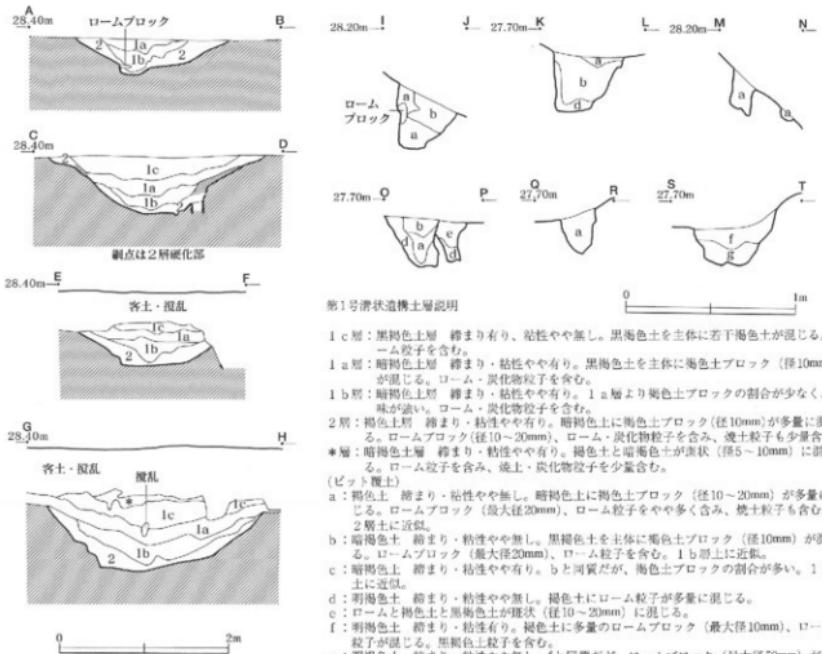
ピットについてはV区に存在する8ヶ所を断ち割り調査した結果、2層土に近似するaや1b層土に近似するbとした覆土が多く認められ、重複している例では覆土に切り合い関係が確認された。

遺構の時期を推定する遺物としては、IV区の1、2層から古墳時代に特有な滑石製双孔円盤3点と円盤の未製品1点が、II区の1、2層から古墳時代住居址出土のものと類似する球状土錘3点が検出されている。しかし、滑石製造物と同じIV区2層からは、3の平安時代に相当する輪廻成形による土師器杯形土器の破片も出土していることから、本遺構の時期を平安時代以降と推定しておく。なお、輪廻成形の杯形土器は他にも、団塊の1a層上面から2の土師器大型破片が、同区1層から5の須恵器片が出土している。

出土遺物 (第35図) 土師器片352点、須恵器片5点、弥生土器片26点、球状土錘3点、砥石1点、滑石製造物4点が検出されている。

1~4は土師器で、2、3が輪廻成形の杯形土器、1が高杯形土器、4が底部破片である。5は輪廻成形の須恵器杯形土器。6~8は球状土錘で、欠損品である7の孔部には、棒状工具で刺突したと思われる階段状の痕跡が観察され、同破損面には長径7mm、幅3.5mmの種子圧痕状の窪みが認められる。9~11は滑石製の双孔円盤で、11は欠損品。いずれも表裏側面が研磨されている。12も滑石製遺物で形状から円盤の未製品と考えられる。板状の剥片を素材にし、周縁を剥離や折り取りによって調整している。側縁の一折れ面には削り痕が観察される。13は凝灰質砂岩製の穿孔が施された砥石欠損





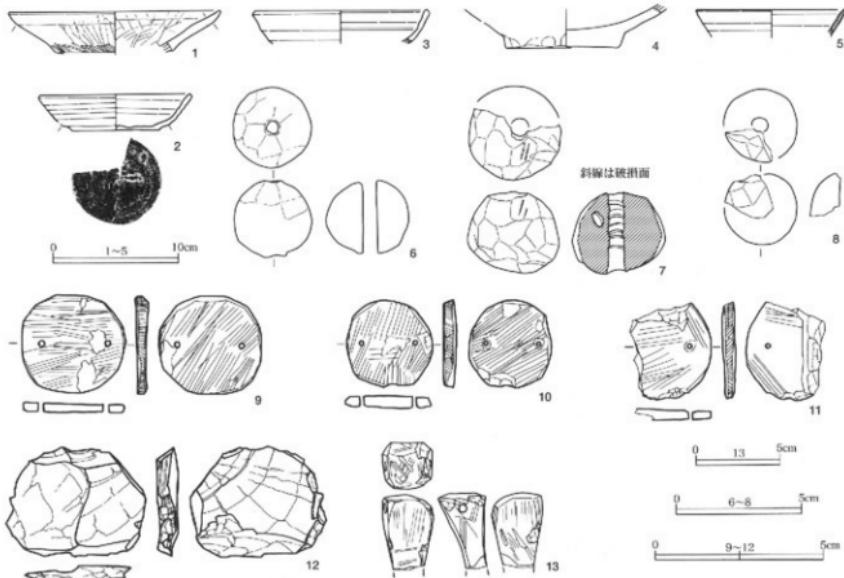
第34図 第1号溝状遺構断面図



品で、破損面以外全面が底面となっている。被熱による赤化が認められる。



品で、破損面以外全面が底面となっている。被熱による赤化が認められる。



第35図 第1号満状遺構出土遺物

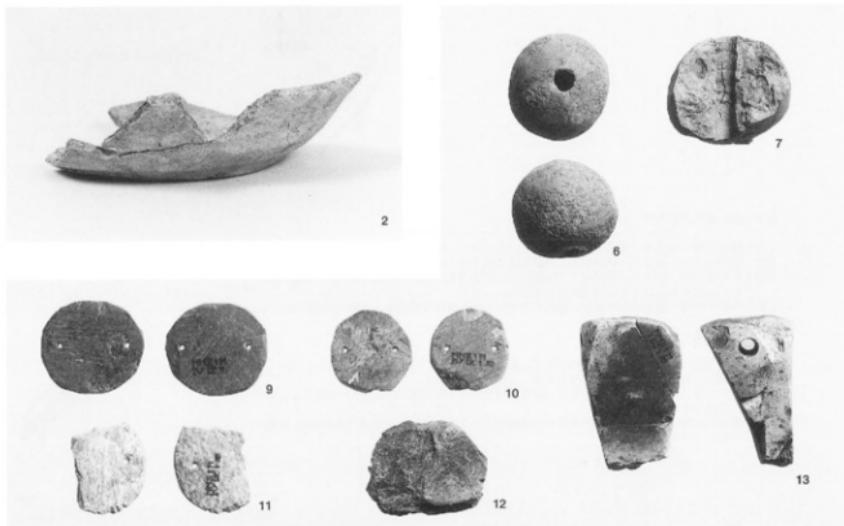
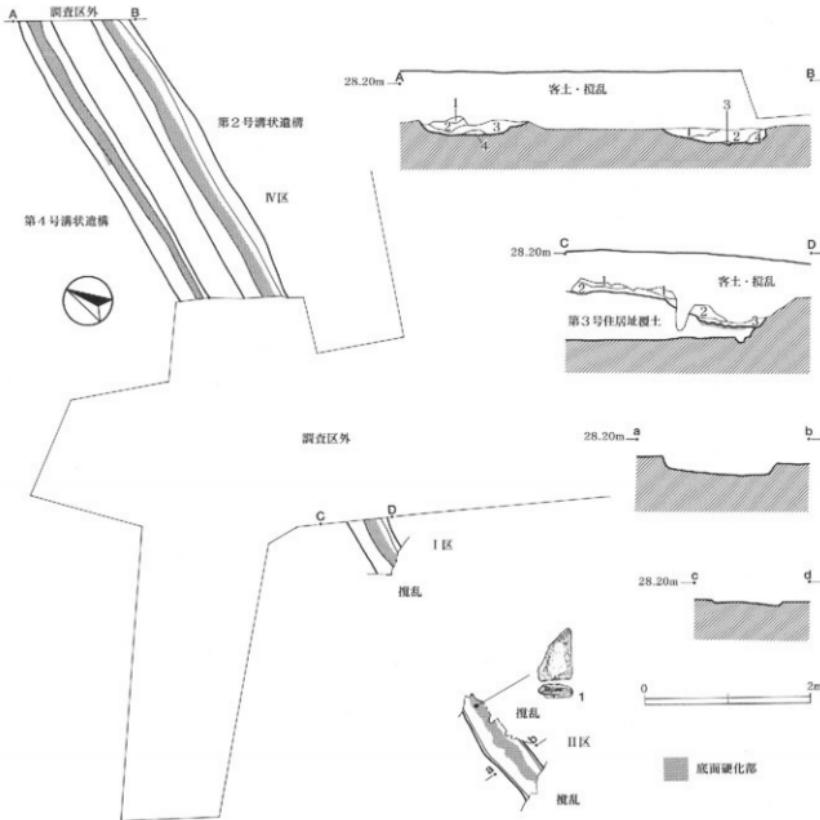


写真45 第1号満状遺構出土遺物



第36図 第2・4号溝状造構実測図

第2，4号溝状遺構

位置 第2号溝状遺構は①区南東部から②区南東部にかけて検出され、第4号溝状遺構は第2号溝状遺構の西隣に位置する。両者はほぼ平行してつくられており、関連性が考えられるため一緒に報告する。

第2号溝状遺構はおおよそ南北方向に延びており、途中①、②区を分ける調査区外部分と、①区内の2ヶ所の大規模な擾乱によって、調査部分は4つに分割される。①区側は北から南へ順にI、II、III区、②区側はIV区と便宜的に呼称して調査をおこなったが、ここでもその呼称のもと記述を進める。I区は第3号住居址の南東部と重複しており、同住居址の壁と覆土の上部を壊していた。I、IV区は北-35度-東方向に延びているが、II区で若干東寄りに曲がり、II、III区では北-20度-東の方向になる。②区北端は遺構外に延びており、南端のIII区では、壁の立ち上がりが途中でなくなる。

一方、第4号溝状遺構は②区だけで確認され、北側はやはり調査区外に延びる。

規模と形態 第2号溝状遺構は、IV区で幅1.5~1.9m、深さ20~25cm、I区で幅1.4m、深さ35cm、II区で幅1.4m、深さ15cm、III区で幅95cm、深さ4cmの規模を持つ。検出面はI区が一番低いため、底面の標高値で比べるとI区、IV区、II区、III区の順に高くなっている。I区とIII区の底面の標高差は約70cm程になる。一方、第4号溝状遺構は幅1.1~1.8m、深さ10~18cmの規模を持ち、北端より南端の底面の方が10cm程高い。

両遺構とも地山ローム層を掘り込んだもので、断面は底面が平坦で広い皿状の形態をしていた。底面中央部には幅30~70cmの硬化部が両遺構の全域で認められる。



写真46 第2号溝状遺構IV区・第4号溝状遺構 (右)



第37図 第2号溝状遺構出土遺物

硬化部が認められることから、両遺構とも道の痕跡と思われる。ちなみに第2号溝状遺構IV区の硬化部中心線と、第4号溝状遺構の硬化部中心線との距離は2.5~2.8mであり、底面は第4号溝状遺構の方が10cm程高い。

覆土と遺物の出土状態 両遺構の覆土については、図示したような土層が観察されたが、第2号溝状遺構I区の断面観察では上位の1、2層が掘り込み外にも連続している状況が確認されている。出土した遺物のほとんどが土器の小片で、遺構の時期認定ができる資料はなかつたが、第2号溝状遺構が古墳時代の第3号住居址の覆土を切ってつくられていることから古墳時代以降であることは確実である。

出土遺物 (第37図) 第2号溝状遺構からは、土器片64点、弥生土器片135点、板状石製品1点、チャート製の碎片1点が検出され、第4号溝状遺構では、土器片5点、須恵器片1点、弥生土器片3点、チャート製の碎片1点が出土している。

1は点紋粘板岩ホルンフェルス製の板状石製品で、周縁には敲打による調整が施されている。

第3号溝状遺構

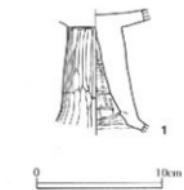
位置 ①区の北西端に位置する。調査区がちょうど北西側に出っ張った所にあたり、おおよそ東西方向に延びる形で、長さ約4.5mにわたって検出された。西端は調査区外に延びており、弥生時代の第5号住居址の覆土上部に掘り込まれた東部では、端が擾乱によって切られている。



第38図 第3号溝状遺構実測図

規模と形態 幅87cm~1.3m、深さ10~20cmの皿状の断面形態をした溝状遺構で、底面から径25cm、深さ26cm（底面から）のビットが1ヶ所検出されている。第5号住居址と重複する部分では、同住居覆土1層が地山になっており、それ以外ではローム層を掘り込んでいた。なお、本溝状遺構から北に約1m離れた所に、径36cm、深さ28cmのビットが検出されたが、本遺構との関係は不明である。

覆土と出土遺物（第39図） 覆土は暗褐色土の単一層であった。遺構内からは土師器片57点、赤陶土器片2点が検出されている。1は土師器高杯形土器の脚柱状部の破片で、覆土中から出土している。



第39図 第3号溝出土遺物

第1号土坑

位置 ①区の中央南西寄りに位置する。

規模と形態 ローム層を地山とする掘り方は、テラス状の掘り込みを挟んで2つの土坑が連結した形態をしており、長軸4.4m、幅2.4mを測る。南東側の掘り込みは深さ80cm、テラス状部の深さは22cm、北西側の掘り込みの深さは53cmであり、両側の掘り込みの底面と壁面にはかなり凹凸がある。北西側の掘り込み内と隣接する遺構外からはそれぞれ2ヶ所のビットが検出されている。P3、P4とした掘り込み内のビットは、底面から

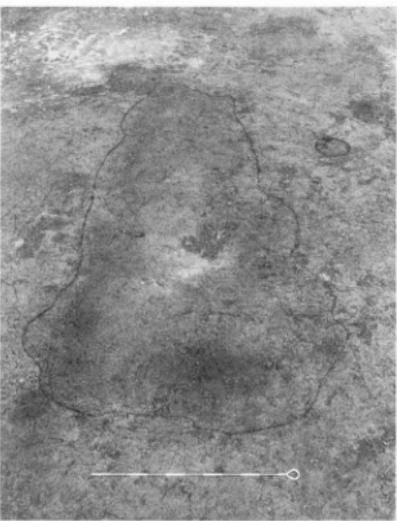
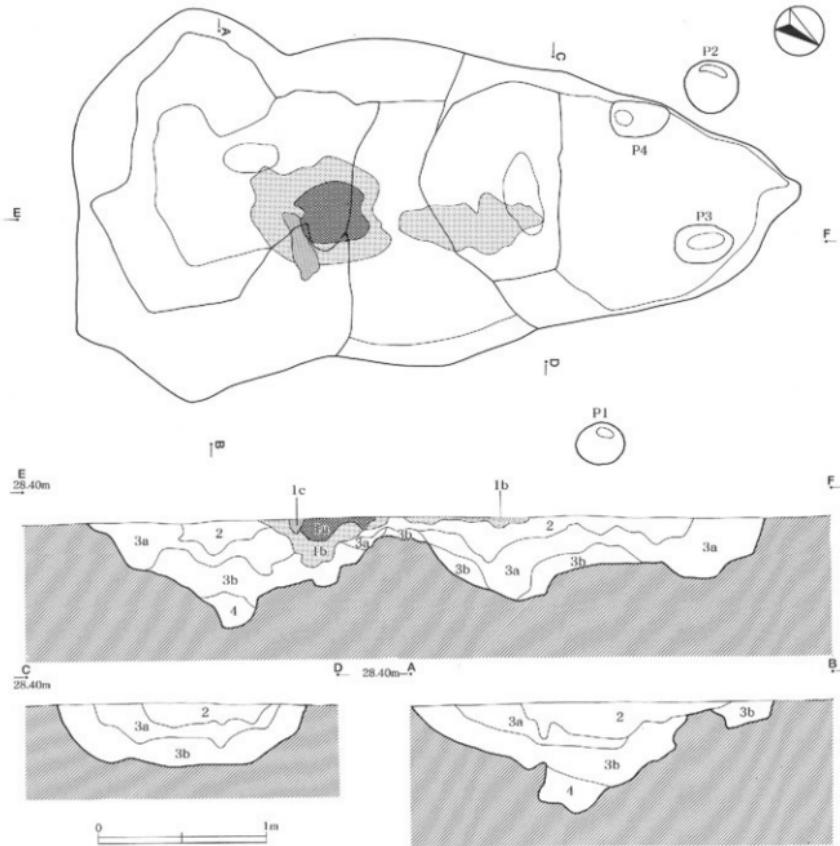


写真47 第1号土坑確認面



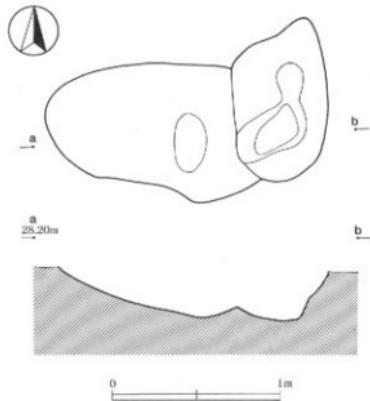
写真48 第1号土坑完掘全景



第1号土坑土層説明

- 1 a層：赤褐色洗土層 粘りやや有り、粘性やや無し。焼土を主体に褐色土が少量混じる。炭化物粒子を少量含む。焼け込み焼土。
 1 b層：暗赤褐色土層 粘まり有り、粘性やや有り。赤味を帯びた褐色土に多量の焼土粒子が混じる。炭化物粒子を少量含む。
 1 c層：暗赤褐色土層 粘まり有り、粘性やや有り。1b層上に白色粒子が混じる。
 2層：褐色土層 粘りやや有り、粘性有り。赤味を帯びた褐色土を主体に暗褐色土が混じる。
 3 a層：暗褐色土層 粘りやや有り、粘性有り。赤味を帯びた褐色土と暗褐色土が混じる。ローム粒子を少量含む。南東壁では暗褐色土の黒味が強く、融合が多い。
 3 b層：明褐色土層 粘りやや有り、粘性有り。ロームと褐色土が混じる。暗褐色土も若干混じる。ローム粒子を含む。
 4層：褐色土層 粘りやや無し、粘性有り。褐色土と暗褐色土が混じる。ロームブロック（最大径30mm）、ローム粒子をやや多く含み、炭化物粒子を少量含む。
- （ピット覆土）
 P 1：明褐色土、粘り、粘性有り。赤味を帯びた褐色土とロームが混じる。ローム粒子を含む。
 P 2：明褐色土、粘りやや有り。明褐色土にローム粒子が多く混じる。

第40図 第1号土坑実測図



第2号土坑上部説明

褐色土層 稲まり・粘性有り。ローム・黒褐色土粒子を含む。
下部にはロームブロック（最大径20mm）がみられる。

第41図 第2号土坑実測図

の深さが10cm以内の浅い皿状のものであり、遺構外のP1, P2はそれぞれ30cmと29cmの深さを測る。

覆土 両掘り込みとテラス状部の底面上には3 b層とした明褐色土層が堆積し、その上位には暗褐色土の3 a層、褐色土層の2層が順にみられる。また、南西側掘り込み3 b層下の最深部には4層とした褐色土層が堆積する。一方、テラス状部にかかった土坑中央部の覆土最上部には、2ヶ所の焼土層が検出されている。南東寄りの長径90cm、厚さ15cmの焼土層は、焼土が主体である1 a層の周囲に2層土に多量の焼土粒子が混じった1 b層がみられるもので、2層を中心とする覆土が焼け込んだものと考えられる。さらにこの焼土層内には、1 b層土に白色粒子が混ざった1 c層とした焼土がブロック状に存在する。白色粒子が何かは不明である。北西側の焼土層は1 b層に対応するもので、長径90cm、厚さ約6cmを測る。

遺物としては、縄文土器の小片1点が3 a層から出土しているのみである（第4図3）。この土器片だけでは遺構の時期を縄文時代以降としか想定できない。時期・性格とも不明としておく。



写真49 第2号土坑全景

第2号土坑

位置 ①区の南端、第3号土坑の東方約3m、第2号溝状遺構Ⅲ区の西方約1mの所に位置する。

規模と形態 ローム層を地山にする二つの椭円形の掘り込みが連なった形態である。西側の掘り込みは東西1.1m、南北85cm、深さ32cm、東側の掘り込みは南北1m、東西56cm、深さ32cmを測り、二つ合わせた東西長は1.7mになる。断面は両掘り込みとも底面から壁が緩く立ち上がる皿状の形態である。

覆土と出土遺物 覆土は単一の褐色土であり、2つの掘り込みで違いは無い。土師器と須恵器の小片各1点が覆土中から出土している。この出土遺物から古墳時代以前の遺構とした。

③区ピット群

位置 ③区南西部から、20基のピットが検出された。このピット群は北西側の調査区外にも広がっているものと思われる。その内1基は第7号住居址に接しており、ピット同士の重複も3例存在する。ピットの配置については部分的に直線的な配列も認められる。

規模と形態 ピットの規模は、最大径50cm、最小径22cm、最深20cm、最浅6cm、平均深12.6cmである。いずれのピットもローム層を地山とする。

覆土 各ピットとも共通した単一覆土で、黒褐色土と暗褐色土が斑状に混じた土が堆積していた。遺物の出土は無い。

遺構外出土の古墳時代以降及び時期不明遺物

遺構外からは、前述した縄文土器片4点、弥生土器片73点以外に、土師器片119点、安山岩製の剥片1点、滑石製造物1点が出土している。(第44図)

1は滑石製造物で、横長の板状剝片の両側縁が折り取られたもので、一折れ面と背面の打点付近に削り痕が残る。2は背面に自然面を残す安山岩製の剥片。なお、遺構外出土の土師器はいずれも小片である。



ピット群土層説明

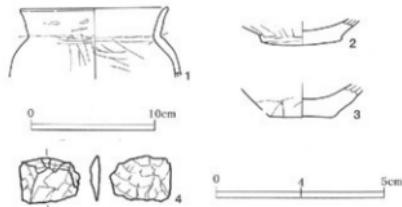
黒褐色土、細まり、粘性や有り。黒褐色土と暗褐色土が斑状(径10~20mm)に混じる。ローム粒子を含む。下部ほど暗褐色土の割合が多い。

第42図 ③区ピット群実測図

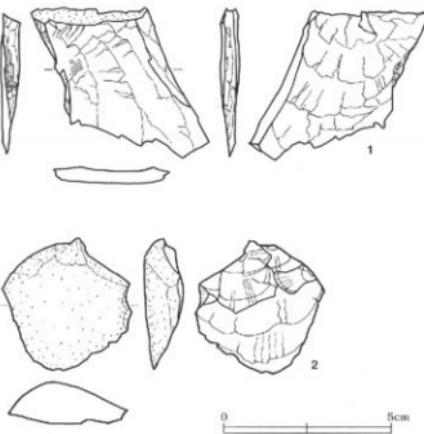
第1号住居址出土の古墳時代遺物

第1号住居址は前述したように弥生時代の遺構であるが、覆土上層にあたる1層や擾乱内から、古墳時代に該当する土師器片54点と滑石製造物1点が検出されており、ここで報告する。(第43図)

1~3は土師器。1は口縁が直線的に開く形態の菱形土器で、2、3は底部破片である。4は滑石製造物で、背面打面側に細かい剥離痕を残す小型の剝片である。



第43図 第1号住居址出土の古墳時代遺物



第44図 遺構外出土遺物



写真50 遺構外出土滑石製造物

IV まとめと若干の考察

1. 観察所見に基づく遺構・遺物の基礎的検討

野中遺跡では弥生時代と古墳時代の集落址が検出されたわけであるが、まとめとして、いくつかの遺構や遺物について、集落址分析の前提となる基礎的事項を整理しておく。

第3号土坑に関わる現象・行為の復元

弥生時代の第3号土坑は、現状では類例の無い性格不明の遺構である。ここではその性格を考察するための基礎的作業として、焼土層など燃焼に関わる痕跡や遺物の在り方から、遺構に関わる現象や行為を復元しておきたいた。

燃焼現象

燃焼現象に関わる痕跡としては、焼土層や炭化物粒子が多く含む土層、底面の劣化などがあげられる。被熱のためかボロボロに劣化した底面直上には、多量の炭化物粒子や炭化物起源と思われる黒褐色土が混じる4層が堆積しており、4層を覆う褐色土層の3a層中には、3b層とした多量の焼土が混じた赤褐色土が4層に接してプロック状に存在していた。

これら層位的に密接した痕跡群は、底面を火床面、4層を燃焼材の痕跡、3b層を3a層の一部が被熱したものと捉えることにより、特定の燃焼現象に伴って形成された一連の痕跡と理解できる。その場合、3層は燃焼中に人为的要因が関わって形成された土層となる。また、底面に劣化が認められ、3、4層以下に別の土層が存在していないことから、土坑の廃絶直後に燃焼現象が生じたことが想定できる。但し、土坑の掘り方は意図的な燃焼行為のためにつくられたとも考えられる。

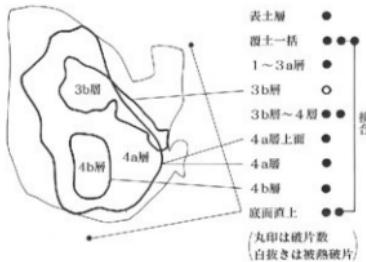
遺物の遺棄・廃棄

土器について 弥生土器片は底面直上から覆土を中心にして146点が出土しており、同時期の第1号住居址に比べ

れば遺構の面積の割に多くの土器片が残されていた。しかし、いずれの土器片も小片であり、同一個体と認定した破片群も接合するものは少なく、出土位置が異なる場合が多い。

例として2~12とした同一個体の破片群の出土位置を第45図に示した。層位的には底面直上や覆土中、更にその上位の表土層から分散して出土している。但し、1~3a層、覆土一括として取り上げたものが、3a層や3、4層から出土した可能性を含むことを考慮すれば、主たる出土層位は燃焼現象に関わる層位（3層~底面直上）と捉えられる。一方、平面的には、底面直上出土の2点が南北両端の離れた位置から検出されているのをはじめ、堆積範囲が分離している3b、4b両層から出土しているなど、やはり分散した状況が認められる。

また、焼土層である3b層から出土した破片（9）の、内外面や破損断面には、他の同一個体破片には認められない、被熱による橙色化と剥落が認められる。この痕跡は、燃焼現象中もしくはそれ以前に土器が遭棄・廃棄されたことと、同一個体の土器が燃焼現象が生じた時点ですでに破片に分割されていたことを示唆する。さらに、接合する破片が少ないことを考え合わせると、別の場所で被損した土器片群の一部が、当遺構に二次的に廃棄さ



第45図 第3号土坑出土同一個体土器資料
(2~12) 出土位置図

れたものである可能性が高い。

石器・土製品について 93の土製紡錘車、94の土製品、それに96のペグマタイト製の石核？は、完形のまま検出されたもので、覆土一括で取り上げられた石核？を除く土製品2点は、燃焼現象に関わる層位から出土している。

一方、焼土層である3b層が上位に被さる4a層中及びその上面から出土した95の敲石は、8片に分かれた状態で検出された。但し、土器の場合と異なり、8片は一ヶ所にかたまって残されており、全て接合している。また、表面には被熱による淡い赤化が認められ、破片によって若干赤化具合が異なるため、破損後の被熱も考えられる。しかし、破損面では表面付近に帶状の赤化が認められるだけで、中央部は赤化していないため、必ずしも当初から破損していたものとはいひ難い。出土状況も合わせて考えると、燃焼現象による被熱により、燃焼中に破碎したものと捉えるのが妥当であろう。

土坑に残された燃焼現象が意図的なもので、しかも遺物がその燃焼行為に伴って残されたものであると仮定するならば、土器については細片を散布する二次的な廃棄行為が、石器・土製品については完形のままでの廃棄行為が行われたことになる。その場合にはやはり儀礼的行為として考えるべきか。

高杯形土器の住居址間接合について

遺跡内における土器の住居址間接合資料の在り方は、住居址の同時性や前後関係を捉える上で、一つの手掛かりになる〔上井・塙野崎1984〕。今回の調査においては、古墳時代の第2号住居址と第3号住居址から出土した、土師器高杯形土器の破片が接合している。野中遺跡の古墳時代住居址の変遷については、第1次調査区も含めて検討しなければならないが、ここではその前操作業として、上記の接合事例に関わる行為を復元し、両住居址の時間的関係を整理しておきたい。

2住1とした当該高杯形土器は、第18図に示したように、脚～杯下部の接合資料と杯部口縁の接合資料に分かれれる。脚～杯下部の資料は、2住の竈支脚として廃棄

されていた脚部の大型破片を中心に、同住居址竈周辺の2層出土の小破片2点と、3住2層出土の小破片1点が接合したものである。杯部口縁の資料は、2住竈周辺の2層出土の小破片1点と、3住2層出土の小破片1点が接合している。両資料の3住出土の破片には、赤色塗彩が良く残っているのに対し、2住の破片には赤色塗彩の痕跡は僅かしかみられない。2住の支脚に用いられていた脚部破片については、竈での使用に伴う被熱によって塗彩が剥がれた状況が想定され、支脚転用時には3住出土の破片とはすでに分割されていたと捉えられる。また、2住2層出土の杯下部破片は、3住2層出土の杯下部破片を介して支脚破片と接合している。失われた部位の破片を考慮しても、破片形状から3住2層出土破片の分割より後に、2住2層出土破片が支脚破片から分割された状況は考え難い。

そこで問題となるのが、2住2層出土の杯下部破片の赤色塗彩剥落の要因である。2住には住居廃絶時以後の燃焼現象を示す痕跡は認められないため、竈周辺から出土した状況を考慮すれば、やはり小破片の状態で竈の火による被熱を受けた可能性が高い。杯部口縁の2住2層出土破片についても、同様な状況が考えられる。つまり、2住では支脚に転用した脚部以外の破片も住居使用中に存在していたことになる。

さて、3住出土の破片については、覆土下層にあたる2層の土層であり、3住使用時から廃絶後覆土の堆積が進行した段階までの間に、住居址内に遺棄・廃棄もしくは住居址周辺から混入したものと捉えられる。混入とした場合には様々な状況が想定され、2住との時間的関係は限定できない。

一方、3住内に遺棄・廃棄されたものとするならば、当該高杯形土器は、2住使用中に2住において破損・分割され、その一部が、3住内に持ち込まれたか、3住内で破損・分割され、その内脚部破片やいくつかの小破片が、使用中の2住に持ち込まれたかのどちらかが想定される。その場合、3住は2住と併存もしくはそれ以前に廃絶されたことになる。

以上の復元は、転用と廃棄という行為によってのみ破片が意図的に動かされる、という前提に立っている。それでも住居址間の時間的関係は限定できなかった。しか

し、もっと多くの住居址間接合資料があれば、傾向は掴めるであろう。今回は支脚という確実に住居使用時に伴う資料が接合したため、検討を加えてみた次第である。

土錐の摩滅について

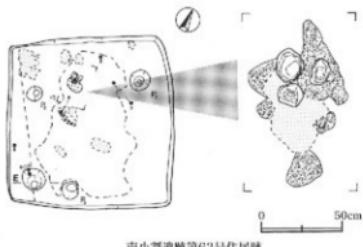
今回の調査では古墳時代の遺構を中心に計11点の土錐が出土したが、いずれも孔が開いた管状土錐で、内10点は球状の形態をしたものである。その中で古墳時代の第4号住居址から出土した2点の球状土錐（48, 49）には開孔部の摩滅が認められる。特に48は両開孔部とも同一方向に偏って著しく摩滅している。この摩滅形状は、川村勝氏が観察した現在霞ヶ浦で使われている土錐のうち、「開孔部端が抉れるように摩滅」した引綱の事例に類似し【川村1992】、当該土錐も漁網に装着され、負荷がかかる状況で引きずられた可能性が考えられる。

但し、他の9点には摩滅は認められず、茨城県内における台地上の遺跡から出土する古墳時代の管状土錐には、開孔部の摩滅がほとんど認められないという指摘【川村1992】に、傾向としては一致する。

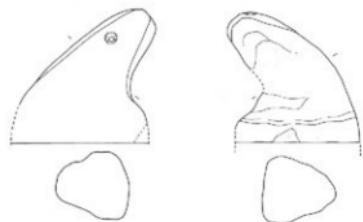
土製支脚について

野中遺跡の第7号住居址からは、炉址を開んで3点の土製支脚が出土した。その性格を理解するために、まずは茨城県内の古墳時代に該当する竈に付随しない土製支脚の類例をあたってみる。（第46図）

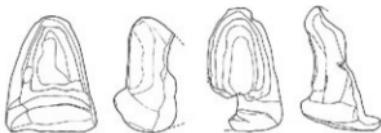
野中遺跡例と同様、炉址付近に3点の支脚状土製品が検出された例として、茨城町南小割遺跡第62号住居址【中村・江幡1998】と土浦市向原遺跡第51号住居址【中野1987】がある。南小割遺跡では、「四角錐（ママ）状の支脚土製品に伴って、同様な形状の熱を受けた2個の粘土塊」が炉址の北部から「三角形を成す位置関係で出土」している。また、「内二点は、据えられていた状況での内側に当たる部分が、特に被熱硬化しているのが認められ」「一個体は、直径にして約10cmほどで、形状が方形に近く上位は球形状」とも記載されている。向原遺跡でも「土製支脚片」3点が「炉址内より出土している」。実測図をみると円錐形をした先端部の破片で、「非常に



南小割遺跡第62号住居跡



真木ノ内遺跡第1号住居跡



第46図 茨城県内の土製支脚例

もらい」との記述がある。報告書では3点を「三足状の支脚と思われる同一個体」としているが、接合関係は無いようなので、野中例のようにそれぞれ別個体の可能性も考えられる。一方、土浦市の真木ノ内遺跡第1号住居跡からは、炉址付近ではないが、「北コーナーから約1.7m西方の床面から」「3方から堆を取りまく様に支脚3個が立位の状態で出土」している【柴1987】。この支脚は、安定した底部から三角錐状に細くなった先端が前屈するもので、実見した所焼成は不良であった。

この他、つくば市の中台遺跡S-1-268出土の2点の土製品？がある【黒澤1995】。実測図をみると、底部から先細りになった先端が前屈するもので、前屈面が窪ん

でいる。なお、火處については、中台遺跡S I 268は炉を有し、真木ノ内第1号住居跡は不明。出土住居址の時期は、報告書によると南小割例と向原例は古墳時代前期、真木ノ内、中台例は中期（和泉式期）とされている。

まず、野中、南小割例から炉で使用された支脚であることはほぼ間違ひ無いであろう。更に、真木ノ内例も加えるなら、基本的に3個セットで機能していたものと思われる。形態的には、「被然および風化が激しいため現存しているものはかなり小さくなっている」南小割例を除いて、細部に違いはあるものの、いずれも錐形のもので先端が前屈するものが多い。これは竈に使用される柱状の土製支脚とは区別される、炉用土製支脚の形態的特徴である可能性がある。また、炉付近からの出土ではない真木ノ内例や、炉からやや離れた個体もみられた野中例は、支脚が固定式ではなく、必要に応じて移動可能なものであったことを想定させる。なお、「風化が激しい」「粘土塊」と記述された南小割例や、「非常にもろい」向原例、それに焼成不良な真木ノ内例は、野中遺跡例と同様、未焼成のまま使用された状況が推定される。

茨城県の古墳時代前期においては、「粗製器台」が炉の器台として使用されていた可能性が、鶴見貞雄氏によって指摘されている〔鶴見1993〕。今回の類例は前期と中期のもので、「粗製器台」との関係が注目される。但し、「粗製器台」との併用を考えても、当該期の炉を持つ住居址数に比べて土製支脚の検出例は少ない。その要因としては、実際支脚を使う場面が限られていた場合、焼成不良で壊れにくいため、石など他の材質を用いていた場合（註）などがあげられる。今後は集落内における出土住居址の性格等を検討しなくてはならないであろう。課題とする。

（註）白石真理氏は、ひたちなか市武田遺跡群西塙遺跡第97A号住居跡から出土した壊形土器について、底部のゴゴレの観察や被熱した石核の存在から、「石磬を利用して、三ヶ所から底部を支えた状況で煮炊きが行われたこと」を推定している〔白石1995〕。

玉隨及びベグマタイト製造物について

玉隨製造物

古墳時代の第3号住居址の覆土中や擾乱内からは、玉隨製の石核1点、剥片8点、碎片4点が出土している。

これらの石器は接合はしていないが、石質から同一母岩から生じたものと捉えられる。また、石核作業面の剥離は周縁多方向から行われており、剥片の背面が同様に剥離の方向が異なる複数の剥離面で構成されていることに対応する。剥片の形態は一定ではなく、側縁に折れ面を有するものもある。剥片には折れ面を除く明瞭な調整痕や使用痕は認められず、また、同石材を素材とした石鎧等の剥片石器や玉類は検出されていない。用途は不明である。

これら石器の帰属時期については、まず、出土した住居址の時期である古墳時代が考えられる。しかし、Ⅲ-2でも述べたように、同住居址中からは弥生土器の破片が多く検出され、付近に弥生時代の遺構や活動地点が存在した可能性がある。遺物の大きさを考えると、弥生土器に付随していたものが、土器と一緒に混入した場合も想定される。

また、これらの石器が弥生時代に属する可能性を示す他遺跡の事例としては、美浦村の根本遺跡の事例が上げられる〔中村1996〕。弥生時代後期に該当する根本遺跡第28号住居址の柱穴内から、流紋岩製の石核3点とともに、玉隨製の石核1点が出土している（註）（第47図）。



第47図 根本遺跡出土石核（上、中村1996に加筆）
(下は野中遺跡例)

根本遺跡の石核も、裏面に石灰質の付着物による自然面を残し、上面に打面が作出されたもので、やはり剥離は周縁の各方向から行われている。石灰質物質の付着がみられる点といい、野中遺跡例に類似する。なお、根本遺跡でも同材の剥片石器や剥片は検出されていない。

他石材の剥片類が検出された例としては、茨城県高萩市の赤浜遺跡で、弥生時代中期に該当する堅穴遺構内から、赤色チャートを主体とする1,800余点の円鏃、石核、剥片、碎片が出土している〔川崎・金子1972〕。安山岩製の「両刃石斧」や「石核斧」は検出されているが、石鏃やその未製品の出土は無い。また、石材の主体となるチャート製の剥片に調整を加えた剥片石器が出土したという記述はみられない。報告者は石器の素材を想定している。

ここでは弥生時代もしくは古墳時代に属する遺物という指摘に止めておく。

ベグマタイト製遺物

今回の調査では、ベグマタイトの石英質部を使用した石核？1点、剥片2点、碎片13点が検出されている。

石核？（第3号土坑96）としたものは、特定の打面を作出せずかなり無作為に周縁から打撃を加えたもので、定型的な剥片を取ったものとは思われない。また、剥離面には節理による凹凸が顕著で、剥離の際途中で折れたり、砕けたりしたもののが多かったと想像される。それは同材の剥片の形状を留めていたものが小型で少ないとや、碎片とした折れ面や節理面が多くみられる小石片の存在と対応する。96が石核として機能していたとするならば、定型的な剥片剥離を目的としたものではなく、当初から碎片を得るためにものであった可能性がある。

なお、土浦市原田遺跡群の西原遺跡第3、4号住居跡において、同様な石英質の碎片（アブライト礫細片）が、炉址周辺から集中して出土している〔江幡1994〕。この出土状況を炉の熱による石の破碎行為と結び付けるならば、やはり目的は定型的な剥片ではなく、碎片の獲得であったと思われる。

石核？は弥生時代の第3号土坑から出土したもので、剥片や碎片は全て古墳時代の第3号住居址の覆土や擾乱内から出土している。玉隨製遺物と同様に、第3号住居

址出土の剥片、碎片は弥生時代に属する可能性がある。このベグマタイト製の遺物は、他の報告書でアブライト、石英片などと表記されているものとほぼ同質のものと思われ、前述の西原遺跡をはじめ茨城県南地域の弥生時代後期遺跡から多く検出されている。しかし、古墳時代遺構から出土した例は、管見の限りでは、美浦村陣屋敷遺跡の2軒の住居址から出土した「石英片」3点のみであり〔中村1992〕、両住居址とも弥生時代の住居址と重複しており、確実に古墳時代に属するとはいえない状況である。

現状では、弥生時代に伴う可能性が強い遺物として捉えておく。

（註）根本遺跡の報告書〔中村1996〕では、チャート製としたものであるが、今回遠藤好氏に玉隨であることを御教示いただいた。

滑石製遺物について

滑石製遺物は計29点出土しており、その内の3点は双孔円盤の製品で、他は滑石製品製作過程で生じる未製品や素材、それに調整剥片と捉えられる。

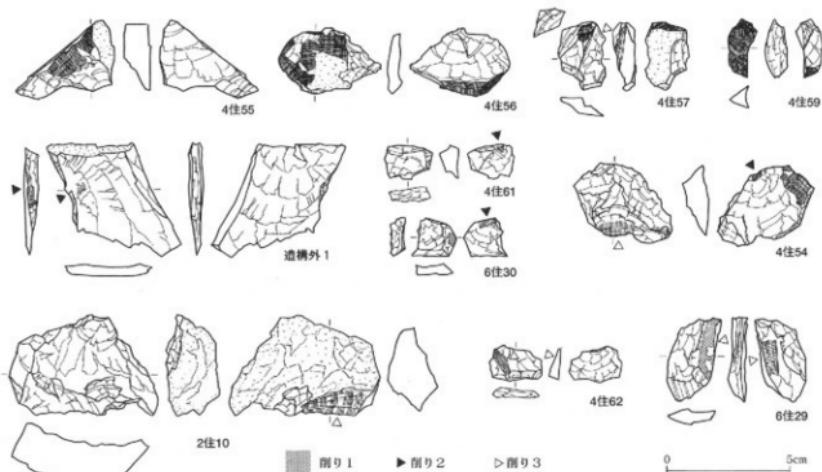
今回の調査で検出された滑石製品は、双孔円盤のみであるが、第1次調査では劍形、臼玉等、他の滑石製品が出土しており、未製品としたものを除き今回出土した素材や調整剥片がどの器種の製作過程において生じたものかを限定することは難しい。また、遺物の全体数も少ないことから、体系的に製作工程を復元することにも無理がある。そのため、ここでは器種を限定しない、加工痕の削りと、やや大型の素材の形状について観察所見をまとめ、今後の滑石製造遺物研究の基礎的情報としたい。

削り痕について

遺物に残された加工痕は、剥離、折り取り、削り、研磨、穿孔である。この内金属工具によって施されたと思われる削りは、以前筆者が「削りa」としたものに相当するが〔中村1996〕、今回改めて3つに分類する（第48図）。

削り1 稲を持った平坦な面として削りの単位が確認できるもの。

削り2 剥離面や折れ面の打点付近に擦れたような削



第48図 野中遺跡出土滑石製造物にみられる削りの痕跡

り痕が残るもの。刃痕が残るものもある。

削り3 削り痕が刃痕もしくは段差で止まっているもので、断面は階段状をしている場合が多い。

削り1は複数の単位から構成される場合が多く、成形を目的としたものと思われる。削り2は、その施されている部位や擦れたような状況から、盤や盤状の工具を使った間接打撃による剥離や折り取り時にできた痕跡である可能性が高い。削り3はその評価が難しいが、素材の縁辺からや、表裏面の上方から入っているものが多く、削り2のように間接打撃によって剥離もしくは折り取りを実施しようとした痕跡と思われる。その場合、4住54の背面、2住10、6住29にみられる削りは板状の節理に沿って剥離をしようとした痕跡、4住57、4住62にみられる削りは節理に直交する形で折り取ろうとした痕跡と捉えられる。おそらく工具が途中で止まったり、力が真っ直ぐ抜けず、剥片端部が階段状に折れてしまつたものなのであろう。

素材の形態について

ここで素材として扱うのは、どの器種の素材ともなり得る大きさで、細かい調整加工が施されていないものである。素材も形状から二つに分類できる。

まず一つは、横長の板状剥片を素材にしたもので、造構外③区出土の1とした剥片が該当する。この剥片は両側縁が折り取られているが、背面に大きな剥離面を残し、厚さも一定なことから、恐らくかなり大型の石核から同様な剥片が連続的に剥離されたものと考えられる。

二つ目は、拳大以下の自然石を分割あるいは折り取ったもので、第6号住居址28、31や第2号住居址10が該当する。片面や両面に自然面を残し、厚さも一定ではなく厚身がある。自然面を残す4住56や、厚みのある同住54、55などは、このような素材をさらに加工していくものであろう。

前者の素材の石核となる大型の滑石塊が、当遺跡に搬入されていたかどうかは分からぬが、野中遺跡の滑石製品製作のための素材には、母岩の大小と、それに対応した異なる技術によって獲得された二者が認められる。

(註) 今後の削り痕の観察にあたっては、阿部芳郎氏に有益な御教示をいただいた。

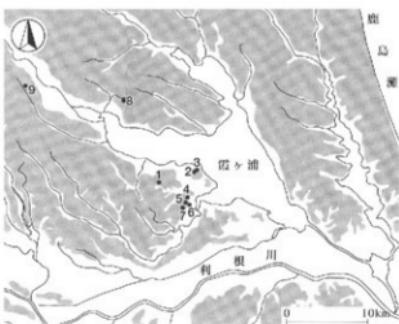
2. 古墳時代甕形土器の型式学的検討

はじめに

野中遺跡の古墳時代集落址を解明していくためには、土器編年が基礎となる。

茨城県南部における古墳時代中～後期土師器の広域な編年については、近年、樋村宣行氏によって研究が進められ、住居跡一括資料の編年と大枠での土器の形態変化や器種の消長が捉えられて来ている〔樋村1992、1995〕。一方、県南部内の限られた地域や遺跡を対象にした編年にも多くの論稿がある〔吹野1995、白田1996、大間1996等〕。野中遺跡に近接したものとしては美浦村の陸平遺跡群での試みがあるが〔中村1992、牛山1996〕、現状では隣接した2遺跡の限られた資料を対象にしており、資料の制約から各器種の系統的な変化が充分に追える段階には至っていない。

土器の生産と消費の問題や、土器を介した地域間交流、土器の生活道具としての変遷、それに土器の保有状況からみた遺跡や遺構の性格等を検討していくためには、製作技術による系統的な分析を視点とした地域編年の確立が前提となる。本稿では、野中遺跡及び周辺遺跡出土の古墳時代中～後期前半の甕形土器を対象に型式学的検討を行い、野中遺跡を含む霞ヶ浦南岸地域における編年整備への諸端とする。



1.野中遺跡 2.稗原遺跡 3.板本遺跡 4.池平遺跡 5.秋平遺跡
6.大日山古墳群 7.二の宮貝塚 8.真木ノ内遺跡 9.柴崎遺跡

第49図 分析対象遺跡位置図

分析対象

今回分類基準として用いる整形痕の表記は、観察者によってばらつきがあると考えられたため、分析対象は実見した資料に限っている。野中遺跡とその周辺の霞ヶ浦南岸に位置する6遺跡を主体に、良好な住居址一括資料が出土している土浦市の真木ノ内遺跡、つくば市の柴崎遺跡の資料を加えて検討した。具体的には美浦村野中遺跡第4、6、7号住居址、同村障屋敷遺跡第1、14a号住居址〔中村1992〕、同村板本遺跡第25a号住居址、第3号甕〔中村1996〕、江戸崎町大日山古墳群第17号住居跡〔鈴木美1991〕、同町二の宮貝塚第1、4、7号住居跡〔鈴木美1991〕、同町秋平遺跡S I-10、86〔大賀1999〕、同町池平遺跡S I-12、22、23、29、35、42、45〔大賀1999〕、それに真木ノ内遺跡第1号住居跡〔柴1987〕、柴崎遺跡Ⅲ区第168、175号住居跡〔土生1992〕の土師器甕形土器である。なお、対象にした土器の整形痕の分類・表記は筆者の判断による。報告書の記載と異なる場合もあるが、その責は筆者にある。

分類

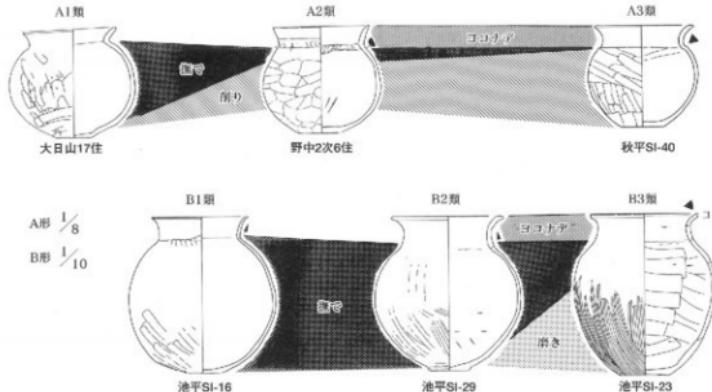
古墳時代土師器の甕形土器には多くのバラエティーがあり、その全てについて系統的な変化を追うのは、現状では困難である。ここでは当地域の古墳時代中～後期前半において主体となる壺A形と壺B形を抽出し、器形や整形技法を視点に分類を行う。

壺A形 球形の胴部を持ち、口縁部が短めで「く」の字状に開くもの、またそれを組形にすると考えられるもの。

A 1類 脇部外面が斜め方向主体の撫でによって整形されているもの。口縁部内外面はヨコナデや笠撫で、磨きなどによって整形される。

A 2類 口縁部がヨコナデ、胴肩部が撫で、胴部が横もしくは斜め方向の笠削りによって整形されているもの。

A 3類 口縁部がヨコナデ、胴部が横もしくは斜め方向の笠削りで整形されているもの。口縁



第50図 飾形土器の分類と組列

と胴部の境に段状の縁を形成しているものが多い。

変B形 球形もしくは楕円形の胴部を持ち、口縁部の口唇部付近が外反するもの。

B 1類 脇部が斜め方向主体の撫でによって整形され、口縁の頸部からの立ち上がりが外側に開くもの。

B 2類 口縁部がヨコナデ、胴部が斜め方向主体の撫でによって整形され、口縁の頸部からの立ち上がりがやや内傾するか、曲線的なもの。胴部下半の磨きや口唇部の面取り、摘み上げといった、B 3類の特徴の一部が認められるものもある。

B 3類 口縁部がヨコナデ、胴部上半が撫で、胴部下半が磨きによって整形され、口唇部外面に面取り、内面に摘み上げがみられるもの。

B 3類は鈴木正博氏が型式学的特徴として「口縁部端の垂直面」の作出技法に着目し〔鈴木正1976〕、後に「下野型」の壺〔松村1977〕、「常陸形壺」〔田村1980〕、「常陸型壺」〔黒澤彰1983〕、「常総型壺」〔櫻村1992〕と分類・呼称された土器（以下“いわゆる常陸型壺”と仮称する）の範疇に入るか、もしくはその系統上に位置付けられるものといえる。

野中遺跡出土資料の中では第7号住居址4がA 1類

に、第6号住居址17～20がA 2類に、第4号住居址の21がB 1類に該当する。また、第6号住居址の14は胴部の整形はわからないが、口縁部形態はB 1類に相当する。

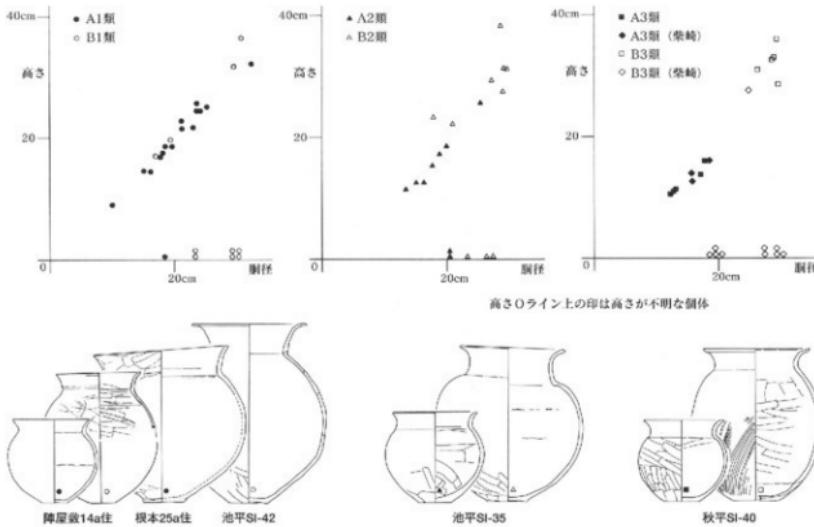
組列と検証

上記の壺A形、壺B形は型式学的に異なる組列をなすものと思われる。壺A形は胴部整形が撫でから削りへ変化していくとの視点からA 1類→A 2類→A 3類という組列が、壺B形は胴部の撫で整形の継承、器形の類似性という視点からB 1類→B 2類→B 3類という組列が想定される。

但し、B 3類の口唇部形態については須恵器壺にその技術的粗形を求める意見もあり〔黒澤彰1983〕、胴部下半の磨きによる整形の出現についても、外的要因を考慮する必要があるかも知れない。また、今回対象としたB

	真木ノ内 1 住	大日山 17 住	坪 14 a 22	池 SI 42	池 SI 42	野中2次 6 住	二の宮 1 住	池 SI 29	池 SI 35	池 SI 175	池 SI 168	池 SI 23	池 SI 40	池 SI 86
A1類	④	⑤	④	①	①									
B1類			①	②	②	①	①	③						
A2類						▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲		
B2類						▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲		
A3類													2	1
B3類													[1]	1

第51図 類型の共伴関係（数字は該当する類型の個体数）



第52図 変形土器各類型の法量 (土器図版1/10)

3類は胎土に白色及び透明の粗い砂粒や雲母粒子が目立つものが多勢を占める。これは“いわゆる常陸型甕”的胎土の特徴と一致し、B1, B2類にも同様な胎土が多い。対して甕A形では野中遺跡でみられたように径1mm以下の細かい白色、透明砂粒を含む胎土がほとんどであり対照的である。胎土の違いは製作地域の違いを反映している可能性が強く、当震ヶ浦南岸地域内のみで甕B形の型式学的変化が全て説明できるとは限らない。しかし、甕A形と比較した場合、胴部肩で整形の継承という点で組列化は可能と思われ、類型間の時間的連続性はおおよそ以下で検証される。

組列の検証にあたっては、良好な層位事例が無いため、住居址一括遺物を用いる。第51図は複数個体が出土した住居址をピックアップし、同じ類型が連続するように配列したものである。まず、甕A形と甕B形は各類型にわたって共伴しており、平行する異なる組列であることを見保証する。次に、同形内の異なる類型同士は共伴することが少なく、共伴する甕A形と甕B形の類型の組み合わせも想定した順序を乱すものではない。これは各類型の時間的独立性と順序の妥当性を示唆する。

一方、二の宮貝塚4住と柴崎遺跡III区175住における同形の異なる類型同士の共伴例は、前者がB1類とB2類の、後者がA2類とA3類の時間的連続性を示すものといえる。また、A1類とA2類の時間的間隔はB1類が両者に共伴することから、B2類とB3類の間隔はA2類が両者に共伴することから、あっても短かいものと想定できる。

また、組列の時間的方向性は、後述するようにA1類が中期に、B3類が後期に想定されることから、ほぼ間違いのないものと思われる。A1類を含む阿佐原遺跡第14a号住居址の土器は、以前、東京都和泉遺跡の資料との対比から中期に位置づけた [中村1992]。今回分析の対象としたB3類は、甕A形と共にしたものに限っており、いずれも報告書で6世紀後半の年代が与えられている [土生1992、大賀1999]。また、“いわゆる常陸型甕”的初現についての最も古い年代観も6世紀後半であり [村山1985、豊村1992]、B3類が5世紀代とされる中期まで遡る要素はみあたらない。

法量

次に、各類型の法量を検討してみる。B 1 類がA 1 類と A 2 類両者と共存するように、壺A形と壺B形の類型変化の歩調は必ずしも一致しないが、時間的推移の概略が見えるように、A 1 類とB 1 類、A 2 類とB 2 類、A 3 類とB 3 類という組み合わせで高さと胴部最大径による法量グラフを作成した（第52図）。なお、報告書に計測値の記載が無いものについては、実測図から値を割り出している。

A 1 類とB 1 類の段階では、壺A形が量的に主体を占め、高さ・胴径が20cm前後～30cmまでのものを中心に大小様々な法量のものが存在する。B 1 類はやや大きいものに偏る傾向がある。

A 2 類とB 2 類の段階になると、A 2 類は高さ・胴径が20cm以下の小さいものに、B 2 類は高さ・胴径が20cm以上の人きいものに偏る傾向が認められ、量的にも壺B形の割合が増えてくる。

A 3 類とB 3 類の段階では、A 3 類は高さ・胴径が20cm以下の小型のものに、B 3 類は高さ・胴径が30cm前後～40cmまでの大型のものに限られるようになる。両者は法量的にも明確に分離し、形態と法量の対応関係が確立される。但し、この様相は霞ヶ浦南岸地域の資料においてであり、当地域から離れた柴崎遺跡Ⅲ区の資料には、大型とは法量が明確に異なる小型のB 3 類が一定量存在する。なお、系統が充分追えなかったため今回は対象としなかったが、当段階には口縁部ヨコナデ、胴部が縱方向の削りで整形された小型の壺形土器が確実に伴う。また、大型の土器はほぼB 3 類に限られる。

まとめ

霞ヶ浦南岸地域における古墳時代中期～後期前半の主要な土師器壺形土器として、壺A形と壺B形を抽出し、その変遷を追った。当初壺形土器の主体を占めた壺A形は、胴部の整形が撫でから削りに変化していく、後期には小型のものに限られるようになる。対して壺B形は胴部の撫で整形を継承していく、“いわゆる常陸型壺”にも比定される大型で規格的なB 3 類が後期に出現する。予測になるが、壺A形は前期以来の壺形土器にその根形が求められるのに対し、壺B形は口縁部形態から壺形土器の系統上に位置付けられる可能性がある（註）。

このような中～後期にかけてみられる、煮炊用具とされる壺形土器の系統別の盛衰や法量の規格化は、当然ながら壺への火處の変化と強い関連性を有していると思われる。ちなみに今回対象とした住居址の内、最も古い竈設置例はA 1 類を出土した根本遺跡第25a号住居址である。また、法量の規格化や形態と法量の対応関係の確立、それに壺A形と壺B形に認められる胎上の違いという現象の背景には、霞ヶ浦南岸地域を越えた土器の生産供給体制の存在も見え隠れする。そういう点で、霞ヶ浦南岸地域から離れた花室川流域の柴崎遺跡で、大型とともに小型のB 3 類が組成に加わる状況は、当類型製作の中心地を考えいく上で示唆的である。

派生する課題は数多くあるが、取り敢えずは当地域の型式学的な土師器編年を整備していくかなくてはならない。今後、壺形土器以外の器種を分析することによって、さらに細かい縦年単位が設定できるものと思われる。土器の実年代を明らかにしたいという欲求もあるが、焦らずにまずは型式学的検討を進めていこう。

本稿で分析対象とした資料の実見にあたっては、江戸崎町教育委員会の平田満男氏、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場の岡口清氏、つくば市教育委員会の石橋充氏にご多忙中にも関わらず便宜をはかっていただいた。文末ながら明記して感謝の意に代えたい。

（註） 陳星敷遺跡の報告では、B 1 類に相当する土器を壺形土器とした [中村1992]。

引用・参考文献

- 牛山英昭 1996 「第IV章1、古墳時代陸平遺跡群における土器器編年と根本遺跡出土土器」「根本遺跡」茨城県美浦村・陸平調査会
会
- 江幡良夫 1994 『上北水北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』住宅・都市整備公団つくば開発局 財團法人茨城県教育財团
大賀健他 1999 「秋平遺跡・池平遺跡・中佐古貝塚」江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会
大川清他 1977 「鹿空墓貝塚」美浦村教育委員会
大間武 1996 「「鬼高式」への移行期の土器様相（上）一花空川下流域を中心に」『研究ノート6号』財團法人茨城県教育財团
大竹房雄他 1989 「常陸篠山」福敷郡美浦村教育委員会 篠山遺跡発掘調査会
大竹房雄他 1989 「庚申古墳」美浦村教育委員会 庚申古墳発掘調査会
奥富雅之他 1996 「興津浄水場跡群」美浦村教育委員会
樋村宣行 1992 「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート2号』財團法人茨城県教育財团
樋村宣行 1995 「和泉式土器編年考—茨城県を中心として—」『研究ノート5号』財團法人茨城県教育財团
川崎純也・金子進他 1972 「赤浜遺跡発掘調査報告書」常総台地研究会
川村勝 1992 「第IV章3、陸屋敷遺跡出土の菅伏土錐と問題点（予察）」「陸屋敷遺跡」茨城県美浦村・陸平調査会
黒澤彰哉 1983 「常陸における奈良・平安時代の土器について」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』史館
同人 市立市川考古博物館
黒澤秀雄 1995 「第3章第6節 古墳時代」〔（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書〕財團法人茨城県教育財团
柴正 1987 「第4章第6節 真木ノ内遺跡」『ケンヌ用土建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』財團法人茨城県教育財团
白石真理 1995 「IV-7 第97A号住居跡」「武田四丁目」財團法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
杉原莊介・大塚初重編 1972 『土師式土器集成2中期』東京堂出版
鈴木正博 1976 「水戸市南台遺跡出土の七種類と須恵器」「常総台地7」常総台地研究会
鈴木素行編 1998 「武田石高遺跡 旧石器・绳文・弥生時代編」財團法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
鈴木美治 1991 「一般県道新川T字・崎嶺道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」財團法人茨城県教育委員会
高橋嘉朗 1990 「美浦村の古墳と古墳群」「美浦村史研究6号」美浦村史編さん委員会
鷺見直雄 1993 「粗製器台の用途を考える」「研究ノート3号」財團法人茨城県教育財团
土井義夫・塙野玲直子 1984 「III.3. (2) 遺物の出土状態」「宇津木台遺跡群Ⅳ」八王子市宇津木台地区遺跡調査会
中野修秀 1987 「IV. 3. 古墳時代前期」「向原遺跡」「向原遺跡調査会」土浦市教育委員会
中村敬治・江幡良夫 1998 「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書」財團法人茨城県教育財团
中村哲也 1992 「第二章2、古墳時代の住居跡群と土壙」「第三章2、古墳時代の土器の概観と編年」「陸屋敷遺跡」茨城県美浦村
陸屋敷調査会
中村哲也 1996 「第三章 根本遺跡の弥生時代集落」「第IV章3、方形周溝墓・古墳群と出土遺物」「根本遺跡」茨城県美浦村・陸
平調査会
西村正衛 1984 「茨城県福敷郡美浦村興津貝塚」「石器時代における利根川下流域の研究」早稲田大学出版部
白田正子 1996 「古墳時代中期後葉における土器編年編年案一牛久地域を取り上げて—」「茨城県考古学協会誌第8号」茨城県考
古学協会
土生潤治 1992 「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）」住宅・都市整備公団つくば開発局
財團法人茨城県教育財团
吹野富美夫 1996 「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」「研究ノート4号」財團法人茨城県教育財团
松村恵司 1977 「第二章1 出土土器の分類と編年」「山田水谷遺跡」日本道路公团 山田遺跡調査会
村田健二編 1980 「下天」
村山好文 1985 「印彌・手賀賀周辺における古墳時代後期の特異な変形土器について」「日本考古学研究所集報Ⅸ」日本考古学研
究所
山内清男 1979 「日本先史土器の繩紋」先史考古学会（示人社復刻版）

付 表

弥生土器觀察表

・出土位置欄の十は接合関係を、()は同一層位での接合破片数を示す。

・整形・文様欄の()は施文工具、→は施文順序で、施文の場合は工具の箇数を示す。織文の附1は附加条1種である。

・胎上標の白は不透明白色の、透は透明もしくは半透明白色の、灰は灰色の、雲は雲母の移、鉛物粒が含まれていることを示し、粗は径1~2mmの粒子が目立つことを表す。

第1号住居址

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第7図	1 2溝IV区(2)	縦系文R? 植描文(6本)	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	
2	擾乱	植描文(6本)	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	同個体
3	2層	縦文(4本)	白・透	淡褐色/褐色	良	
4	擾乱	縦文直前段4条LR→縦文植描文(4本) →横位縦植文(4本)	白・透	淡褐色/暗褐色	良	
5	覆土	植描文(6本?)	白・透・灰	白褐/淡褐色	良	
6	覆土	格子目文(筒状工具)	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	外面無文部に赤色塗彩
7	1層	縦文RL→沈織文(筒状工具)	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	
8	2層	縦文附1 LLR+2 R	白・透	淡褐色/褐色	良	
9	擾乱	縦文附1 LLR+2 R	白・透	淡褐色/褐色	良	
10	1層	縦文附1 LLR+2 R	白・透	淡褐色/褐色	良	
11	1層	縦文附1 LLR+2 R	白・透	淡褐色/褐色	良	同個体
12	4層	縦文附1 LLR+2 R	白・透	淡褐色/淡褐色	良	
13	覆土	縦文附1 LLR+2 R	白・透	淡褐色/褐色	良	
14	覆土	縦文附1 LLR+2 R	白・透	淡褐色/褐色	良	
15	覆土	縦文附1 LLR+2 R	白・透・灰	白褐/暗褐色	良	
16	1層	縦文附1 LLR+2 R	白・透・灰	白褐/淡褐色	良	
17	1層	刷毛目整形→縦文附1 LLR+2 R	白・透・灰	白褐/暗褐色	良	
18	1層	縦文LLR	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	外側の一部に赤色塗彩
19	1層	縦文直前段4条LR?	白・透・灰	白褐/淡褐色	良	
20	1層	撚糸文R	白・透・灰	暗褐色/褐色	良	
21	2層	撚糸文R	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	
22	擾乱	撚糸文R	白粗・透粗・灰	淡褐色/暗褐色	良	
23	1層	撚糸文R	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	
24	1層	撚糸文R(網)	白粗・透粗・灰	淡褐色/暗褐色	良	
25	擾乱	撚糸文R(網)	白・透・灰	暗褐色/褐色	良	
26	擾乱	撚糸文R(網)	白・透・灰	淡褐色/暗褐色	良	
27	1層	縦文RL	白粗・透粗・灰・雲	淡褐色/淡褐色	良	
28	2層	縦文RLと附1 LLR+2 L	白・透・灰	白褐/淡褐色	良	
29	床底(2)	縦文LLR	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	復元口径19.0cm

第5号住居址

図版番号	昌上位位置	整形・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第9図	1a 床底(41)	縦文附1 LLR+2 R半沈織文(筒状工具)	白粗・透粗・灰	淡褐色/褐色/褐色	良	同個体
	1b 床底(3)	縦文附1 LLR+2 R	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	復元口径40cm
	2 床底	無文荒い物	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	

第3号土坑

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第11図	1a 底面直上下覆土(2)	口縫部ヨコナデ L1縫部内外面から交互押捺 植描文(5本)	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	
1b	1~3a層	植描文(5本)	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	
1c	1~3a層	口縫部ヨコナデ L1縫部内外面から交互押捺	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	同個体 復元口径16.6cm
1d	覆土	L1縫部内外面から交互押捺	白粗・透粗・灰	暗褐色/褐色	良	
2	4b層	撚糸文L(網) 平行沈織文(手戦竹管状工具)	白・透	暗褐色/褐色	良	
3	表土	撚糸文L(網)	白・透	暗褐色/褐色	良	
4	底面直上下覆土(2)	撚糸文L(網)	白・透	白褐/暗褐色/褐色	良	
5	4a層	撚糸文L(網)	白・透	暗褐色/褐色	良	
6	底面直上	撚糸文L(網)	白・透	暗褐色/褐色	良	同個体
7	1~3a層	撚糸文L(網)	白・透	暗褐色/褐色	良	
8	覆土	撚糸文L(網)	白・透	暗褐色/褐色	良	
9	3b層	撚糸文L(網)	白・透	淡褐色/淡褐色	良	9は表面被熱褐色化
10	4a層上面	撚糸文L(網)	白・透	淡褐色/淡褐色	良	
11	3b~4a層	撚糸文L(網)	白・透	淡褐色/淡褐色	良	
12	3b~4a層	撚糸文L(網)	白・透	淡褐色/淡褐色	良	
13	覆土	L1縫部ヨコナデ L1縫部内外面から交互押捺 植描文(7本)	白・透	暗褐色/褐色	良	
14	底面直上	口縫部ヨコナデ L1縫部内外面から交互押捺 植描文(7本)	白・透	暗褐色/褐色	良	同個体
15	底面直上	植描文(7本)	白・透	暗褐色/褐色	良	

第3号土坑

図版番号	出土位置	整形・文様	胎上	色調(外/内)	焼成	備考
第11区	16 3 b ~ 4 層 17 1 ~ 3 a 層 18 3 b ~ 4 層 19 1 層 20 1 层	縦横文(6本) 縦横文(6本) 縦横文(5本) 縦横文(4本以上) 縦横部横位單沈線→縱位刺み(籠状工具) 縦横文(4本) 格子目文(籠状工具)	白・透 白・透 白・粗・透粗 白・透 白・透	淡褐/淡褐 淡褐/淡褐 淡褐褐/淡褐褐 暗褐/淡褐 褐/褐	良 良 良 良 良	同個体
21 1 ~ 3 a 層+ 覆土	縦横文(4本) 口唇部縦文		白・透	淡橙褐・灰褐	良	
22 底面直上	縦横文(4本) 口唇部縦文	白粗・透粗・灰	褐/褐	良		
23 3 b 層	縦横文(4本) 口唇部縦文	白粗・透粗・灰	暗褐/褐	良	同一個体	
24 覆土	縦横文(5本)	白・透	淡褐褐/黑褐	良		
25 4 b 層上面	縦横文(5本?)	白粗・透粗・灰・雲	淡褐/淡褐	良		
26 1 ~ 3 a 層	縦横文(9本)	白・透・灰	淡褐/淡褐	良		
27 3 b ~ 4 層	縦横文(5本以上)	白粗・透粗	淡褐/淡褐	良		
28 覆土	撲糸文 R 縦横文(6本)	白・透	暗褐/淡褐	良		
29 覆土	縦横文(5本?)	白・透・灰	赤褐/淡褐	良		
30 覆土	縦横文(5本?)	白・透・灰	小褐/淡褐	良		
31 覆土	縦横文(5本以上)	白・透・灰	淡褐/暗褐	良		
32 2 層	縦横文直前段4条 L.R. 縦横文(4本)	白・透・灰	淡褐/褐	良		
33 覆土	縦横文(3本以上) 口唇部縦文	白・透・灰	淡褐/淡褐	良		
34 1 ~ 3 a 層	縦横文(7本)	白・透	淡褐/淡褐	良		
35 覆土	縦横文(3本以上)	白・透	暗褐/淡褐	良	外面に煤付着	
36 覆土	撲糸文 R (細) 縦横文(3本以上)	白・透	淡褐/褐	良		
37 2 層	撲糸文 R (細) 縦横文(3本以上)	白・透・灰	褐/淡褐	良		
38 覆土	撲糸文 R (細) 縦横文(5本)	白粗・透粗	暗褐/褐	良		
39 覆土	縦横文(5本)	白粗・透粗・灰	褐/淡褐	良		
40 4 b 層上面	縦横文(4本)	白粗・透粗	暗褐/暗褐	良		
41 覆土	縦横文?	白・透・灰	淡褐/淡褐	良		
42 覆土	縦横文(5本) →格子目文(籠状工具)	白粗・透粗・灰	淡褐/褐	良		
43 覆土	單沈線文(籠状工具)	白・透・灰	暗褐/褐	良		
44 覆土	單沈線文(籠状工具)	白・透・灰	暗褐/暗褐	良		
45 底面直上	円形刺突文(径2 mmの竹管状工具) 口唇部刺み	白・透・灰	暗褐/褐	良		
46 1 ~ 3 a 層	口唇部刺み	白・透・灰	暗褐/褐	良		
47 3 b 層		白・透・灰	褐/淡褐	良		
48 覆土	円形刺突文(径2 mmの竹管状工具)	白・透・灰	暗褐/淡褐	良		
49 覆土	円形刺突文(径2 mmの竹管状工具)	白・透・灰	暗褐/淡褐	良		
50 1 ~ 3 a 層	円形刺突文(径2 mmの竹管状工具)	白・透・灰	黑褐/淡褐	良		
51 覆土(2)	円形刺突文(径2 mmの竹管状工具)	白・透・灰	暗褐/褐	良		
52 底面直上	円形刺突文(径2 mmの竹管状工具)	白・透・灰	褐/暗褐	良		
53 覆土	口唇部刺み	白・透・灰	淡褐/淡褐	良		
54 覆土	口唇部縦文	白・透・灰	褐/淡褐	良		
55 武向直上	平行弦文線→刺み(籠状工具) 口唇部縦文	白・透・灰	淡褐褐/褐	良		
56 覆土	平行弦文線→刺み(籠状工具) 口唇部縦文	白・透・灰	淡褐/淡褐	良		
57 覆土	調文附1 L.R + 2 R	白・透・灰	淡褐褐/淡褐	良		
58 覆土	調文附1 L.R + 2 R	白・透	褐/褐	良		
59 覆土	調文附1 L.R + 2 R	白・透	褐/淡褐	良		
60 覆土	調文附1 L.R + 2 R	白粗・透粗・灰	淡褐褐/黑褐	良		
61 表土	附加条文附加R 2条密接	白・透	淡褐/淡褐	良		
62 覆土	調文直前段4条 L.R	白・透・灰	暗褐/暗褐	良		
63 覆土	調文直前段4条 L.R	白・透・灰	暗褐/暗褐	良		
64 1 ~ 3 a 層	調文直前段4条 L.R?	白・透・灰	暗褐/暗褐	良		
65 覆土	調文直前段4条 L.R	白粗・透粗・灰	暗褐/淡褐	良		
66 3 b ~ 4 层	撲糸文 R (細)	白・透・灰	淡褐/淡褐	良		
67 1 层	撲糸文 R (細)	白・透・灰	淡褐/淡褐	良		
68 覆土	撲糸文 R (細) 口唇部縦文	白・透・灰	黑褐/褐	良		
69 覆土	撲糸文 R (細) II口唇部縦文	白・透・灰	暗褐/褐	良		
第12区	70 1 ~ 3 a 層	撲糸文 R (細)	白・透・灰	暗褐/淡褐	良	
71 1 ~ 3 a 層	撲糸文 R (細)	白・透・灰	暗褐/淡褐	良		
72 1 ~ 3 a 層	撲糸文 R (細)	白・透・灰	黑褐/褐	良		
73 1 ~ 3 a 層	撲糸文 R (細)	白・透・灰	暗褐/淡褐	良		
74 1 ~ 3 a 層	撲糸文 R (細)	白・透・灰	淡褐/淡褐	良		
75 1 ~ 3 a 層	撲糸文 R (細)	白・透	褐/淡褐	良		
76 覆土	撲糸文 R (細)	白粗・透粗・灰	白褐/淡褐褐	良		
77 1 ~ 3 a 層	撲糸文 R (細)	白粗・透粗・灰	透褐/淡褐	良		
78 覆土	撲糸文 R (細)	白・透・灰	褐/黑褐/褐	良		
79 覆土	崩毛目形刷→撲糸文 R (細)	白・透・灰	淡褐/褐	良		
80 覆土	撲糸文 R (細)	白粗・透粗・灰	淡褐/褐	良		
81 1 ~ 3 a 層	撲糸文 R (細)	白・透・灰	褐/褐	良		
82 覆土	撲糸文 R (細)	白・透・灰	暗褐/褐	良		
83 覆土	撲糸文 R	白粗・透粗	褐/淡褐	良		
84 覆土	撲糸文 R	白・透・灰	白褐/白褐	良		

第3号土坑

国版番号	出土位置	形態・文様	船上	色調(外/内)	焼成	備考
第12図	85 1-3-a層	撚糸文R	白粗・透粗	褐/暗褐	良	
	86 削土	撚糸文R	白・透・灰	淡褐/淡褐	良	
	87 剥落	撚糸文L(削)?	白・透・灰	暗褐/淡褐色	良	外面に撚付着
	88 表土	撚糸文L(削)?	白・透・灰	褐/暗褐	及	
	89 武昌直上	撚糸文L(0段多条)?	白・透・灰	褐/淡褐	良	
	90 窓土	内外面擦痕で整形 11段層上面押捺	(白)微粗	暗褐/淡褐	良	
	91 6-b層	底部木葉痕	白・透・灰	白褐/褐	良	底径 6.5cm
	92 削土	底部木葉痕	白・透	淡褐/暗褐	良	復元径 6.2cm

擅乱内土器集中地点

同一個體

後世遺構内及び遺構外

版図番号	出土位置	形態・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第15図	1 2溝Ⅳ区	圓文L.R. 太浅縫文	白・透	淡褐色/淡褐色	良	
	2 2溝Ⅳ区	平行沈縫文(半截竹管状工具)	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	
3	遺壙外①区	捺文S.R.(周)	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	
		平行沈縫文(半截竹管状工具)				
4	3住	口縁部ココナデ 橢円文(5本) 11号部橢文	白・透・灰	褐/暗褐色	良	
5	3住	橢文附1 R.L.+2 L. 楕描文(4本)	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	
6	遺壙外①区	橢文1.R.? 椎描文(6本)	白・透・灰	褐/淡褐色	良	
7	1溝Ⅳ区	橢描文(3本以上)	白・透・灰	褐/褐	良	
8	遺壙外①区	橢描文(3本)	白・透・灰	暗褐色/淡褐色	良	
9	2溝Ⅳ区	橢描文(5本以上)	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	
10	2溝Ⅱ区	縦文? 椎描文(5本?)	白・透・灰	淡褐色/褐	良	
11	1溝Ⅳ区	橢描文(5本)	自・透・灰	褐/褐	良	
12	遺壙外①区	捺文S.R.(周)(口輪部も) 椎描文(6本)	白・透・灰	褐/淡褐色	良	
13	1溝Ⅳ区	橢描文(5本)	白・透	褐/暗褐色	良	
14	3住	橢描文(5本)	白・透	褐/淡褐色	良	
15	遺壙外①区	橢描文(4本)	白・透	淡褐色/淡褐色	良	
16	3住	スリット内平行沈縫文(半截竹管状工具) 橢描文(8本)	白・透・灰	淡褐色/褐	良	
17	遺壙外①区	橢縫文(5本)	白・透・灰	暗褐色/暗褐色	良	
18	2溝Ⅳ区	橢縫文(5本)	白・透・灰	褐/褐	良	
19	遺壙外①区	橢縫文(6本)	白・透・灰	淡褐色/淡褐色	良	
20	3住	橢縫文(4本以上)	白粗・透粗・灰	淡褐色/淡褐色	良	
21	遺壙外①区 (4)	橢文附1 L.R.+2 R 椎描文(5本) 口輪部橢文附1 L.R.+2 R	白・透・灰	暗褐色/褐	良	
22	3住	橢縫文(7本)	白粗・透粗・灰	白褐色/白褐色	良	
23	1溝Ⅳ区	橢縫文(5本以上)	白粗・透粗・灰	暗褐色/淡褐色	良	
24	3住	橢縫文(4本以上)	白・透・灰	褐褐色/暗褐色	良	

四一個你

後世造構内及び造構外

國版番号	出上位置	整形・文様	胎上	色調(外/内)	焼成	備考
第15回	25 3住	櫛描文(5本)	白・透・灰	淡褐/淡褐	良	
	26 2溝Ⅳ区	刷毛目整形 櫛描文(3本以上)	白・透・灰	淡褐/褐/淡褐	良	
	27 2溝Ⅳ区	櫛描文(5本)	白・透・灰	褐/暗褐	良	
	28 2溝Ⅱ区	櫛描文(4本)	口・透・灰	淡褐/淡褐	良	
	29 3住	櫛描文(9本?)	白粗・透粗・灰	淡褐/黑褐	良	
	30 3住	櫛描文(8本)	白・透・灰	淡褐/褐	良	
	31 3住	櫛描文(6本以上)	白・透・灰	暗褐/淡褐	良	
	32 2溝	彌文L R L R 櫛描文(4本)	白粗・透粗	淡褐/淡褐	良	
	33 3住	櫛描文(6本)	白・透・灰	淡褐/褐	良	
	34 3住	櫛描文(8本)	白粗・透粗・灰	淡褐/褐/淡褐	良	
	35 3住	櫛描文(8本)	白粗・透粗・灰	淡褐/褐/淡褐	良	
	36 3住	櫛描文(5本以上)	白・透	暗褐/淡褐	良	
	37 通構外①区	櫛描文(4本)	白・透・灰	淡褐/淡褐	良	
	38 通構外②区	櫛描文(7本)	白・透・灰	褐/褐	良	
	39 3住	櫛描文(4本)	白粗・透粗・灰	淡褐/淡褐	良	
	40 2溝Ⅲ区	櫛描文(4本)	白・透	淡褐/褐	良	
	41 3住	櫛描文(5本)	白・透・灰	褐/淡褐	良	
	42 3住	彌描文(4本以上)	白・透・灰	褐/淡褐	良	
	43 3住	彌描文(4本以上)	白・透・灰	褐/淡褐	良	
	44 3住	櫛描文(5本)	白粗・透粗・灰	暗褐/暗褐	良	
	45 3住	櫛描文(6本)	口・透・灰	褐/褐	良	
	46 2住	格子目文(筒状工具)	白粗・透粗・灰	淡褐/褐/淡褐	良	
	47 3住	彌文附1 L R + 2 R 格子目文(筒状工具)	白・透・灰	淡褐/褐/褐	良	
	48 2溝Ⅳ区	格子目文(筒状工具)	自・透・灰	淡褐/褐/淡褐	良	
	49 3住	格子目文(筒状工具)	白粗・透粗	暗褐/淡褐	良	
	50 3住	矢羽纹目文(筒状工具)	白・透・灰	白褐/白褐	良	
	51 2溝Ⅳ区	单洗綱文(筒状工具)	白粗・透粗	褐/暗褐	良	
	52 2溝Ⅳ区	單洗綱文(筒状工具)	白粗・透粗	淡褐/淡褐	良	
	53 3住	彌文文(4本)一刷毛目整形	白・透・灰	淡褐/暗褐	良	
	54 通構外②区	彌文附1 L R + 2 R L I 部門彌文	白粗・透粗・灰	淡褐/暗褐	良	
	55 1溝Ⅳ区	I 箍部彌ヨコナテ 彌文附1 L R + 2 R	白・透	褐/暗褐	良	
	56 通構外①区	口鷹部彌文附1 L R + 2 R	白・透	褐/暗褐	良	
	57 通構外①区	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	褐/褐/褐	良	
	58 1溝Ⅳ区	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	黑褐/棕褐	良	
	59 1溝Ⅳ区	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	棕褐/暗褐	良	
	60 1溝Ⅳ区	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	暗褐/暗褐	良	
	61 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透	褐/淡褐	良	
	62 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透	褐/淡褐	良	
	63 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	褐/黑褐	良	
	64 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	淡褐/褐	良	
	65 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	暗褐/褐	良	
	66 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	褐/黑褐	良	
	67 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	褐/黑褐	良	
	68 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	暗褐/褐	良	
	69 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	暗褐/褐	良	
	70 2溝Ⅳ区	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	淡褐/褐/褐	良	
	71 2溝Ⅳ区	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	褐/淡褐	良	
	72 2溝Ⅳ区	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	淡褐/暗褐	良	
	73 4住	彌文附1 L R + 2 R	白粗・透粗・灰	暗褐/暗褐	良	
	74 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透	淡褐/淡褐	良	
	75 2溝Ⅱ区	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	淡褐/黑褐	良	
	76 通構外①区	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	暗褐/淡褐	良	
	77 3住	彌文附1 L R + 2 R 口唇部彌文	白・透・灰	暗褐/褐	良	
	78 2溝Ⅳ区	彌文附1 L R + 2 R (交差)	白粗・透粗・灰	黑褐/暗褐	良	
	79 3住	彌文附1 L R + 2 R	白・透・灰	淡褐/黑褐	良	
	80 2住	彌文前後4条L R	白・透・灰	褐/暗褐	良	
	81 3住	彌文直前4条L R	白粗・透粗・灰	淡褐/淡褐	良	
	82 3住	彌文直前後4条L R	白粗・透粗・灰	淡褐/褐/暗褐	良	
第16回	83 3住	彌文直前後4条L R	白・透・灰	暗褐/褐	良	
	84 3住	彌文直前後4条L R	白・透・灰	暗褐/褐	良	
	85 3住	彌文直前後4条L R	白粗・透粗・灰	暗褐/褐	良	
	86 3住	彌文直前後4条L R	白・透・灰	暗褐/褐	良	
	87 1溝Ⅳ区	彌文直前後4条L R	口・透・灰	淡褐/褐/淡褐	良	
	88 2溝Ⅱ区	彌文L R	白粗・透粗・灰	褐/暗褐	良	
	89 3住	彌文L R	白粗・透粗・灰	淡褐/褐/褐	良	
	90 2溝Ⅳ区	彌文L R	白粗・透粗・灰	白褐/淡褐	良	外面一部に赤色塗彩
	91 通構外②区	彌文L R	白粗・透粗・灰	褐/褐	良	
	92 3住	彌文R (彌) LI 部門彌系文R (彌)	白・透・灰	褐/褐	良	
	93 3住	彌系文R (彌)	白粗・透粗・灰	淡褐/黑褐	良	
	94 3住	彌系文R (彌)	白粗・透粗・灰	淡褐/黑褐	良	
	95 3住	彌系文R (彌)	白粗・透粗・灰	淡褐/淡褐	良	

後世遺構内及び遺構外

区段番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
第16区	3住	撲糸文R(細)	白・透・灰	褐/褐	良	
97	3住	撲糸文R(細)	白・透・灰	褐/褐	良	
98	3住	撲糸文R(細)	白・透・灰	褐/褐	良	
99	2溝Ⅳ区	撲糸文R(細)	白粗・透粗・灰	褐/透褐	良	
100	2溝Ⅳ区	撲糸文R(細)	白・透・灰	淡褐/褐	良	
101	2溝Ⅳ区	撲糸文R(細)	白粗・透粗	淡褐/白褐	良	外面一部に赤色塗彩
102	2溝Ⅳ区	撲糸文R(細)	白・透	褐/褐	良	
103	2溝Ⅳ区	撲糸文R(細)	白・透・灰	褐/暗褐	良	
104	遺構外②区	撲糸文R(細)	白粗・透粗	淡褐/淡褐	良	
(2)						
105	遺構外②区	撲糸文R(細)	白粗・透粗	淡褐/暗褐	良	
106	2溝Ⅳ区	撲糸文R(細)(交差)	白粗・透粗	淡褐/淡褐	良	
107	遺構外②区	撲糸文R(細)(交差)	白粗・透粗	褐/褐	良	
108	1溝Ⅳ区	撲糸文R	白・透・灰	淡褐/淡柳緋	良	
109	3住	繩文RRL	白粗・透粗	褐/褐	良	
110	3住	繩文RRR	白粗・透粗	褐/褐	良	同一個体
111	2溝Ⅳ区(2)	繩文RRR?	白・透・灰	淡褐/淡褐	良	
112	2溝Ⅳ区(2)	繩文RRR?	白・透・灰	淡褐/淡褐	良	
113	2溝Ⅳ区	繩文RRR?	白・透・灰	淡褐/黑褐	良	同一個体
114	2溝Ⅳ区	繩文RRR?	白・透・灰	淡褐/淡褐	良	
115	2溝Ⅳ区	繩文RRR?	白・透・灰	褐/褐	良	
116	2溝Ⅳ区	撲糸文L	白・透・灰	褐/暗褐	良	
117	2溝Ⅳ区	撲糸文L	白・透・灰	淡褐/暗褐	良	
118	2住	撲糸文L(細)	白粗・透粗・灰	黑褐/褐	良	
119	2溝Ⅳ区	撲糸文L(細)	白・透	褐/褐	良	復元底径10.0cm
120	遺構外①区	繩文附1LR+2L	白・透	暗褐/褐	良	
121	遺構外①区	繩文附1LR+2L?	白・透・灰	淡褐/淡褐	良	
122	2溝Ⅳ区	繩文L?	白・透	褐/褐	良	
123	3住	繩文附1LR+2Rと撲糸文R(細)	白粗・透粗・灰	淡褐/淡褐	良	
124	遺構外①区	繩文直前段4条LR(2条深)?	白粗・透粗・灰	白褐/白	良	内部剥落
125	3住	繩文直前段4条LR(2条深)?	白粗・透粗	淡褐/暗褐	良	
126	遺構外①区	繩文直前段4条LR(2条深)?	白粗・透粗	暗褐/良	内部剥落	
127	3住	繩文L R	白粗・透粗・灰	淡褐/褐	良	
128	3住	繩文L R	白粗・透粗・灰	淡褐/褐(淡褐)	良	同一個体
129	3住	繩文L R	白粗・透粗・灰	淡褐/褐	良	
130	2溝Ⅳ区	繩文L R	白粗・透粗	褐/淡褐	良	
131	2溝Ⅳ区	繩文R L 口唇部繩文RL	白・透・灰	褐/褐	良	
132	遺構外①区	繩文R L	白粗・透粗・灰	淡褐/淡褐	良	
133	遺構外①区	繩文R L	白粗・透粗・灰	褐/褐	良	
134	2溝Ⅳ区(2)	繩文直後1条LR+RL	白・透・灰	褐/淡褐	良	
135	1溝Ⅳ区	撲糸文	白粗・透粗・灰	淡褐/褐	良	
136	遺構外②区	縫合口縫下端上から交互刻突 口唇部繩文	白・透・灰	褐/黑褐	良	
137	遺構外①区		白・透	暗褐/暗褐	良	
138	遺構外②区	口唇部繩文?	白・透	褐/褐	良	
139	2溝Ⅳ区	口唇部繩文	白・透	淡褐/淡褐	良	
140	1溝Ⅳ区	外面刷毛目整形	白粗・透粗・灰	褐/淡褐	良	
141	2溝Ⅳ区	底部大半欠擦	白粗・透粗	白褐/褐	良	

遺構別弥生土器出土点数 *は弥生時代遺構。()は同一個体を1点とした場合。図示したものの以外も含む。

1住	2住	3住	4住	5住	3上	搅乱	1溝		2溝		3溝		4溝		遺構外		計			
							集中	集中	I区	V区	VII区	III区	集中	II区	IV区	搅乱	①区	②区		
30	4	128	1	45	146	45	2	3	4	7	2	8	15	118	2	2	3	54	19	638
(28)	(4)	(125)	(1)	(2)	(109)	(11)	(2)	(3)	(4)	(7)	(2)	(8)	(15)	(108)	(2)	(2)	(3)	(51)	(18)	(501)

弥生土器繩文原体集計表

後世遺構外は後世遺構内及び遺構外。*の附加条は1種、撲糸文、結1は結束第1種。()は同一個体1点とした場合。図示したもの以外も含む。口唇部繩文の繩文は除外。

	1住	5住	3上	搅乱	後世 集中	計	1住	5住	3上	搅乱	後世 集中	計	
附1 LR+2R	10 (4)	44 (1)	6 (6)	0	85 (81)	146 (92)	撲糸文L	0	0	0	0	3 (3)	3 (3)
直前段4条LR	2 (2)	0	5 (5)	0	31 (31)	38 (38)	撲糸文L(細)	0	0	16 (6)	34 (1)	4 (4)	54 (11)
L-LR	3 (2)	0	0	0	18 (18)	21 (20)	撲糸文L(段多条)	0	0	1 (1)	0	0	1 (1)
LR	0	0	0	0	7 (5)	7 (5)	撲糸文R	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)
撲糸文R	4 (4)	0	8 (8)	0	27 (26)	39 (38)	附1 LR+2R?	0	0	0	0	2 (2)	2 (2)
撲糸文R(細)	3 (3)	0	32 (26)	2 (1)	49 (48)	86 (78)	附加条2条密接	0	0	1 (1)	0	1 (1)	2 (2)
RRL	0	0	0	0	7 (2)	7 (2)	藉1 LR+RL	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)
RL	2 (1)	0	0	1 (1)	3 (3)	6 (6)	* LR+2Rと撲R	1 (1)	0	0	0	1 (1)	1 (1)
RL(段多条)	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)	口唇部繩文	1 (1)	0	0	0	0	1 (1)
無鉢L	0	0	0	0	1 (1)	1 (1)	原体不明	0	0	7 (7)	2 (2)	72 (72)	81 (81)

土師器・須恵器観察表

出土位置の十は接合関係を、()は不接合関係を示し、()は同一層位での換合破片数を、()は不接合破片数を表すが、数字のないものは1点である。法量の単位はcmで、()は復元推定値。整形機の→は整形順序を示す。胎土標の表記は弥生土器観察表に同じ。残存率の()は図示した部位でのもの。

第1号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第43図1	1層(2)	土師器 甕	口径 (12.0)	内外面一口縁部 ヨコナデ 脚部 焼拂で	白透	内外面一褐	良	(20 %)	
第43図2	一括+擾乱	土師器 底部	底径 6.5	外面一荒拂で 内面一拂で	白透	外面一褐 内面一淡橙褐 ・褐	良	(50 %)	
第43図3	擾乱(2)	土師器 底部	底径 5.1	外面一荒拂で 内面一拂で	白透	外面一褐 内面一暗褐	良	(50 %)	

第2号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第18図1	竪支脚+2層 (2)+3層+2層 ・3層+3層 ・2層	土師器 高杯	口径 (20.0) 高さ (17.4) 幅径 14.5	外面一口縁・窓部 ヨコナデ 杯・脚部 焼拂で 内面一口縁・窓部 ヨコナデ 杯・脚部 焼拂で	白透 灰	外面一淡橙褐 ・赤褐 内面一淡橙褐 ・粗褐	良	70 %	脚部は竪の支脚 として遺存 外面と杯・窓部 内面に赤色塗彩
第18図2	2層(14)床 直+7層+7層 擾乱	土師器 杯	口径 15.5 高さ 7.0	外面一口縁部 ヨコナデ 窓・底部 焼削り→拂で 内面一口縁部 ヨコナデ 窓・底部 焼拂で	白透 透灰	外面一赤褐	良	75 %	
第18図3	床直+6層上 面+窓土・6 層上面+窓上	土師器 杯	口径 (18.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 窓部 焼削り→拂で 内面一丁寧な造形	白透 透灰	外面一粗褐	良	(30 %)	
第18図4	床直+6層上 面(2)・6層上 面(3)+2層	土師器 杯	口径 (14.5)	外面一口縁部 ヨコナデ 窓部 拂で	白透 透灰	外面一淡褐 ・暗褐 内面一淡橙褐	良	(70 %)	窓部外面の一部 に塗付着
第18図5	6層上面(6)	土師器 底部	底径 6.0	外面一荒削り→拂で 内面一拂で	白透	外面一褐 内面一暗褐	良	(60 %)	
第18図6	竪支脚直上+ 6層上面+3 層(3)	土師器 甕	口径 (24.0)	外面一口縁部 烧拂→拂で 内面一拂で	白透	外面一粗褐 ・褐 内面一粗褐	良	(20 %)	脚下部外面一部 に黒褐色の付着物
第18図7	P 4 (20)+3 層(2)+2層 (9)+7層+7層 (2)	土師器 甕	口径 27.0 高さ 20.1 孔径 6.8	外面一口縁部 ヨコナデ 窓部 焼削り→拂で 内面一口縁部 ヨコナデ 窓部 焼拂で	白透	外面一淡橙褐 内面一粗褐	良	90 %	底部近脚部に 黒斑

第3号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第20図1	P 1底直(14) +1底直(3)+ 2層(8)	土師器 甕	口径 11.8 高さ 22.3 底径 5.6	外面一口縁部 ヨコナデ・窓部 窓無・武溝鋸削り 内面一口縁部 ヨコナデ・窓部 窓無で、窓下輪横模	白透	外面一粗褐 ・褐 内面一暗褐 ・粗褐	良	100 %	
第20図2	P 1底直(3)+ 2層(2)	土師器 甕	口径 17.5	外面一口縁部 ヨコナデ 窓部 焼拂で 内面一口縁部 ヨコナデ 窓部 焼拂で	白透 透灰	外面一粗褐 ・淡橙褐	良	(50 %)	
第20図3	2層	土師器 甕	口径 (18.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 内面一口縁部 ヨコナデ 窓部 焼拂で	白透 粗	外面一褐 内面一粗褐 ・粗	良	(20 %)	
第20図4	6層上面	土師器 甕	口径 (13.2)	外面一口縁部 ヨコナデ 窓部 焼拂で	白透 透灰	外面一粗褐 ・内面一暗褐	良	(15 %)	
第20図5	2層(5)	土師器 甕?	口径 (22.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 窓部 焼削り→拂で 内面一口縁部 ヨコナデ・窓部 窓拂で	白透 透灰	外面一褐 ・暗褐 内面一褐	良	(30 %)	

第4号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎上	色調	焼成	残存率	備考
第24図1	竈支脚+床直 +層7層+2層	土師器 高杯	口径 17.8 高さ 13.4 底径 12.8	外面一口縁部 ヨコナデ 杯・脚部 焼けり→窓撫で 内面一口縁部・窓撫部 ヨコナデ 杯・脚部 撥で	白透	内外面一粒褐	良	95%	杯部は竈支脚として焼成、被熱のため内面剥落 黒青
第24図2	床直+2層+1層	土師器 高杯		内外面一磨き	白透灰	内外面一粒褐	良	(30%)	
第24図3	2層	土師器 高杯		内面一磨き	白	内外面一粒褐	良	(50%)	
第24図4	1層(2)	土師器 高杯		外面一刷毛?	白透	内外面一粒褐	良	(60%)	
第24図5	2層	土師器 高杯		内外面一磨き	白透	内外面一淡粒褐	良	(100%)	
第24図6	2層	土師器 高杯		内面一磨き	白透	内外面一粒褐	良	(100%)	
第24図7	床直+2層・床直(10)・床直(3)・2層(2)・1層(2)・床直(2)・2層	土師器 碗	口径 (16.0) 高さ (8.7)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 窓撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 窓撫で	白透	外面一粒褐・ 暗褐 内面一暗褐 粒褐	良	60%	
第24図8	床直(11)・床直+12層・床直+12層・床直(2)・床直(5)	土師器 碗	口径 (15.0) 高さ 8.1	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 窓撫り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 窓撫で	白透灰	外面一暗褐・ 褐 内面一褐・ 粒褐	良	25%	
第24図9	床直(10)+2層(2)・床直	土師器 杯	口径 (15.3) 高さ 6.1	外面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 焼けり→磨き 内面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 窓撫で	白透	内外面一粒褐	良	60%	
第24図10	床直+2層(6)+1層・2層(3)	土師器 杯	口径 15.6 高さ 5.2	外面一口縁部 ヨコナデ→胴部 磨き・底部 焼けり 内面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 窓撫で→磨き	白透灰	内外面一粒褐	良	80%	
第24図11	床直(3)+2層(2)+1層	土師器 杯	口径 (13.0) 高さ 6.4	外面一口縁部 磨き 胴・底部 焼けり→窓撫で 内面一口縁部 ヨコナデ→磨き 胴→底部 窓撫で	白透	外面一赤褐・ 黒褐 内面一赤褐・ 褐	良	35%	口縁部内外赤色塗彩
第24図12	床直(9)+2層(2)・床直・2層	土師器 杯	口径 (14.2) 高さ 5.7	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 窓撫り→撫で 内面一口縁部 磨き 胴→底部 窓撫で	白透灰	内外面一赤褐	良	25%	11層部内外赤色塗彩
第24図13	竈8層(3)+2層(3)・窓8層(3)・2層(2)	土師器 杯	口径 20.0 高さ (6.8)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 窓撫り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴→底部 磨き	白透	内外面一赤褐	良	(50%)	全面赤色塗彩
第24図14	2層(2)・1層(3)	土師器 杯	口径 (17.7)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 焼けり→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 磨き	白透	内外面一くすんだ黒褐	良	(25%)	全面赤色塗彩
第24図15	2層(2)	土師器 杯	口径 (13.8) 高さ 5.4		白透灰	外面一褐 内面一暗褐	良	35%	
第24図16	床直(5)+2層(3)	土師器 杯	口径 15.6 高さ 4.7	内外面一口縁部 ヨコナデ	白透	内外面一粒褐	良	80%	
第24図17	2層	土師器 杯	口径 (17.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 焼けり→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 撥で	白透	外面一赤褐・ 褐 内面一褐	良	15%	
第24図18	竈7層+2層(3)・2層(2)	土師器 杯	口径 (17.0) 高さ 5.5	外面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 焼けり→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 磨き	白透灰	内外面一粒褐	良	40%	

第4号住居址

国版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎上	色調	焼成	残存率	備考
第24図19 1層(2)・1層 (2)	土師器 杯	口径 (15.0)	内外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 丁寧な撫で	白 灰 黒 墨	内外面一赤褐色	良	25 %		
第24図20 2層+1層・ 1層	土師器 壺	口径 (21.0)	内外面一ヨコナデ	白 透	外面一淡橙褐色 内面一淡褐色	良	(20 %)		
第24図21 床直(2)+2層 木直(9)+2層 (3)・床直(3) ・床直(2)・床 直(5)	土師器 甕	口径 (13.0) 高さ (17.0) 強径 (10.3) 胴径 (17.1) 底径 (6.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で	白 透	外面一橙褐色 内面一暗褐色	良	20 %		
第24図22 2層(4)	土師器 甕	口径 13.0	外面一頭部 振頭押捺→口縁部 ヨコナデ、胴部 撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で	白 透	内外面一褐色	良	(40 %)		
第24図23 1層	土師器 甕	口径 (20.6)	外面一口縁部 ヨコナデ→胴部 籠挽で 内面一丁寧な撫で	白 透 灰	外面一黒褐色 淡橙褐色 内面一淡褐色	良	(13 %)		
第24図24 2層(3)	土師器 甕	口径 (25.0)	外面一口縁部 ヨコナデ→丁寧 な撫で 内面一ヨコナデ	白 透	外一面褐色 内面一淡褐色	良	(15 %)		
第24図25 竪7層(4)+2 層(4)・2層	土師器 甕	底径 5.0	外面一口縁部 撫で 内面一頭部 篦で 胴部 篦削で	白 透	外一面淡橙褐色 内面一暗褐色	良	(40 %)		
第24図26 1層(2)	土師器 甕	口径 (13.7)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で 内面一口縁部 ヨコナデ	白 透	内外面一褐色	良	(12 %)	外面は被熱によ る剥落顯著	
第24図27 2層+1層	土師器 甕	口径 (22.0)	内外面一口縁部 ヨコナデ 撫で	白 透 灰	内外面一褐色	良	(8 %)		
第25図28 竪7層+2層 (2)・2層	土師器 甕	口径 (26.0) 高さ (18.0) 孔径 (10.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 頭部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で	白 透	外一面淡橙褐色 内面一暗褐色	良	(20 %)		
第25図29 2層(4)+1層 ・2層(7)・ 1層(4)・5 住居土	土師器 甕	口径 (22.9) 高さ (17.0) 孔径 (6.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 頭部 振頭押捺 胴部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で	白 透	内外面一淡褐色 暗褐色	良	(40 %)		
第25図30 2層(3)・2層 (2)・2層	土師器 瓶?	口径 (34.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 振頭押捺 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で	白 透 灰	外一面褐色 赤褐色 内面一淡橙褐色	良	(20 %)		
第25図31 床直(13)・床 直	土師器 甕?	口径 (28.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で	白 透 灰	外一面褐色 内面一淡橙褐色	良	(15 %)		
第25図32 床直・2層・ 1層	土師器 甕?	口径 (18.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で	白 透	内外面一褐色	良	(20 %)		
第25図33 床直(3)+2層 (4)・2層(3) ・1層	土師器 甕?	口径 17.8	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削で	白 透 灰	内外面一褐色	良	(35 %)	口縁部外面の 一部に煤付着	
第25図34 床直(5)	土師器 甕	孔径 (9.2)	外面一胴部 篦削り→撫で 内面一胴部 篦削で	白 透 灰	外一面淡橙褐色 内面一暗褐色	良	(20 %)		
第25図35 2層(6)	土師器 底部	底径 6.0	外面一塗剝り→撫で 内面一籠挽で	白 透	外一面暗褐色 内面一淡橙褐色 暗褐色	良	(40 %)		
第25図36 2層(11)	土師器 底部	底径 6.0	外面一塗剝り→撫で 内面一籠挽で	白 透	外一面淡橙褐色 褐色 内面一淡褐色	良	(80 %)		

第4号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第25図37	床直(2) + 2層	土師器 底部	底径 6.5	外面一端削り→撫で 内面一撫で	白 灰 雲	外面一棕褐色 暗褐色 内面一棕褐色 褐	良	(70 %)	
第25図38	1層	土師器 底部	底径 (9.0)	外面一端削り→撫で 内面一撫で	白 透	外面一赤褐色 暗褐色 内面一棕褐色 褐	良	(30 %)	
第25図39	2層(2)	土師器 底部	底径 6.5	内外面一撫で	白 透	外面一褐 内面一白褐色	良	(50 %)	
第25図40	床直(8) + 2層	土師器 底部	底径 6.3	外面一端削り→撫で 内面一棕褐色	白 透	外面一暗褐色 内面一褐	良	(60 %)	
第25図41	窓7層	土師器 底部	底径 6.2	外面一端削り→撫で 内面一撫で	白 透 灰	外面一棕褐色 暗褐色 内面一褐	良	(50 %)	
第25図42	1層	土師器 底漆	底径 (7.2)	外面一端削り→撫で 内面一撫で	白 透	外面一暗褐色 内面一棕褐色	良	(30 %)	
第25図43	2層	土師器 底漆	底径 5.0	外面一宽度で端削り 内面一撫で	白 透	外面一淡褐色 内面一淡暗褐色	良	(100 %)	
第25図44	2層(2)	土師器 底部	底径 (6.5)	外面一端削り撫で 内面一撫で	白 透 灰	内外面一棕褐色	良	(60 %)	
第25図45	2層	須恵器 甕			白微	外面一暗灰褐色 内面一灰褐色	良		
第25図46	1層	須恵器 甕			白粗	内外面一灰	良		
第25図47	2層	須恵器 甕		外面一平行叩き 内面一当て具底	白微	内外面一灰	良		

第6号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第28図1	2層(3) + 1層	土師器 高杯	口径 (15.9)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 曲げ	白 透	内外面一淡褐色	良	(20 %)	
第28図2	P 1 内口層	土師器 杯	口径 14.2 高さ 5.0	外面一口縁部 ヨコナデ 胴一部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴→底部 篦削で	白 透	外面一淡褐色 暗褐色 内面一淡褐色	良	80 %	口縁部外面の一部に墨付着
第28図3	P 1 内口層	土師器 杯	口径 15.3 高さ 5.7	外面一口縁部 ヨコナデ 胴一部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴→底部 篦削で	白 透	外面一淡褐色 赤褐色 暗褐色 内面一赤褐色	良	100 %	
第28図4	床直	土師器 杯	口径 15.6 高さ 5.3	外面一口縁部 ヨコナデ 胴→底部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 咲文	白 透	内外面一棕褐色	良	80 %	内面被熱による 剥落跡者全面 底面部附近に黒斑
第28図5	床直	土師器 杯	口径 14.8 高さ 5.1	外面一口縁部 ヨコナデ 胴→底部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴→底部 篦削で	白 透 灰	外面一淡褐色 内面一淡褐色 ・褐 暗褐色	良	70 %	
第28図6	2c層上面(5) + P 1 内口層 (2)	土師器 杯	口径 14.7 高さ 6.2	外面一口縁部 ヨコナデ 胴→底部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ	白 透	内外面一棕褐色	良	90 %	内面に褐色の付着物全面被熱 のため剥落跡著、外面底部付 近に黒斑
第28図7	床直	土師器 杯	口径 15.9 高さ 5.6	外面一口縁部 ヨコナデ 胴→底部 篦削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴→底部 篦削で	白 透	外面一黑褐色 暗褐色 内面一棕褐色 暗褐色	良	80 %	

第6号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第28図8	2層(2)+1層 (2)	土師器 杯	口径 15.0 高さ 6.0	外面一口縁部 ヨコナデ 底部 茶削り→旋拂で	白透 灰	外面一淡橙褐色 内面一淡褐	良	20%	
第28図9	床直-P1内 ①層(3)	土師器 杯	口径 14.7 高さ 6.1	外面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 茶削り→撫で 内面一口縁部 旋拂で →口縁部 ヨコナデ	白透	外面一黑褐色 褐・棕褐色 内面一淡橙褐色 褐	良	95%	
第28図10	床直(6)	土師器 杯	口径 (15.0) 高さ 4.8	外面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 茶削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ	白透	外外面一棕褐色 内面一赤褐色	良	65%	内面に褐色の付着物、内面被熱のため剥落頗者、外底部附近に黒斑
第28図11	1c層	土師器 杯	口径 (16.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 旋拂で 内面一口縁部 ヨコナデ	白透	外外面一赤褐色	良	(15%)	外外面赤色塗彩
第28図12	2層+1層	土師器 杯	口径 (15.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で 内面一口縁部 ヨコナデ	白透	外外面一棕褐色	良	(20%)	
第28図13	2b層上面	土師器 杯	口径 13.0 高さ 7.9	外面一口縁部 ヨコナデ 胴・長部 茶削り→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 旋拂で	白透	外外面一棕褐色 褐 内面一暗褐色 淡褐色	良	100%	
第28図14	P1内①層	土師器 甕	口径 18.0	外面一口縁部 ヨコナデ→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ	白透 粗灰	外外面一棕褐色 内面一淡褐色	良	(50%)	
第28図15	2層(4)	土師器 甕	口径 (15.5)	外面一口縁部 ヨコナデ、頭部 指頭押捺、肩部 撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 肩部 旋拂で	白透	外外面一棕褐色	良	(25%)	
第28図16	床直(6)	土師器 底部	底径 (6.0)	外面一茶削り 内面一撫で	白透	外外面一褐 内面一褐	良	(50%)	
第28図17	床直-P1内 ①層(23)+2層+2層(2)	土師器 甕	口径 19.6 腰径 16.0 胴径 20.7	外面一口縁部 ヨコナデ 肩部 撫で 胴部 茶削り 内面一口縁部 ヨコナデ 胴部 旋拂→旋拂で	白透	外外面一淡褐色 褐 内面一淡褐色 褐	良	(75%)	
第28図18	床直-P1内 ①層(28)+2層(5)	土師器 甕	口径 15.4 高さ 17.4 腰径 13.6 胴径 18.9 底径 6.9	外面一口縁部 ヨコナデ、頭部 指頭押捺、肩部 撫で 胴・底部 茶削り 内面一口縁部 ヨコナデ 頭部 指頭押捺 胴・底部 旋拂で	白透	外外面一淡橙褐色 褐 内面一棕褐色	良	90%	
第28図19	P1内①層 (41)	土師器 甕	口径 15.7 高さ 15.4 腰径 13.2 胴径 17.7 底径 6.1	外面一口縁部 ヨコナデ、頭部 指頭押捺、肩部 撫で 胴・底部 茶削り 内面一口縁部 ヨコナデ 胴・底部 旋拂で	白透	外外面一赤褐色 褐 内面一棕褐色 褐	良	90%	
第28図20	床直-P1内 ①層(12)+1層	土師器 甕	口径 14.6 腰径 12.3 胴径 20.8	外面一口縁部 ヨコナデ、頭部 指頭押捺、肩部 撫で 胴部 茶削り 内面一口縁部 ヨコナデ、頭部 指頭押捺、肩部 旋拂で	白透	外外面一淡橙褐色 内面一淡橙褐色	良	(60%)	
第28図21	床直(3)+2層 (4)-P1内①層(2)+2層 (6)-2層(3)	土師器 甕	胴径 (22.0)	外面一指頭押捺 撫で 茶削り	白透 粗灰	外外面一暗褐色 内面一淡褐色 褐	良	(30%)	頭部最大径付近の外面に帶状に保付着
第28図22	1層(2)+1c 須恵器 甕			外面一平行叩き 内面一同心円文当て具痕	白	外外面一黑灰 内面一暗灰	良		第23と同一個体
第28図23	1c層	須恵器 甕		外面一平行叩き 内面一同心円文当て具痕	白	外外面一黑灰 内面一暗灰	良		肩部外面自然釉 頭部内面釉
第28図24	1層	須恵器 甕		外面一平行叩き	白	外外面一灰 内面一暗灰	良		

第7号住居址

団査番号	出土位置	器種	法量	範形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第31図1	覆土(2)	土師器 高杯	口径(13.0)	外面一縁部 ヨコナデ 脚部 篦削り 撥で 内面一部部 ヨコナデ 脚部 輪積模 撥で	白透灰	内外面一淡褐	良	(40%)	
第31図2	覆土	土師器 鉢	口径(13.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 脚部 篦削り 撥で 内面一口縁部 ヨコナデ 脚部 篦削り 撥で	白透灰	内外面一淡褐	良	(12%)	
第31図3	床直(2)+覆土 ・覆土	土師器 甕	口径(20.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 脚部 篦削り 撥で 内面一口縁部 ヨコナデ 脚部 篦削り 撥で	白透	外面一白褐 内面一淡褐	良	(30%)	
第31図4	床直(10)	土師器 甕	口径 13.6 頸径 12.0 底径 18.0	外面一口縁部 ヨコナデ 脚部 篦削り ?→撫で 内面一口縁部 ヨコナデ 脚部 篦削り 撥で	白透	外面一橙褐・ 黒褐 内面一暗褐	良	(75%)	被熱による剥落 顯著
第31図5	床直(3)+確認 面	土師器 底部	底径 7.2	外面一箒削り一磨き 内面一箒削り	白透	外面一棕褐・ 褐 内面一棕褐・ 褐 暗褐	良	(50%)	

第1号溝状遺構

団査番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第35図1	Ⅳ区1層	土師器 高杯	口径(17.0)	外面一口縁部 ヨコナデ 脚部 撥で 内面一口縁部 ヨコナデ 脚部 撥で	白透	外面一淡褐 内面一淡棕褐	良	(15%)	
第35図2	Ⅳ区1a層上 面+Ⅳ区1層 +Ⅳ区確認面	土師器 杯	口径(12.2) 高さ 3.4 底径 6.9	輪轉右回転成形 底部 回転切り 底径	白透灰	内外面一淡褐	良	50%	
第35図3	Ⅳ区2層	土師器 杯	口径(14.0)	輪轉成形	白透	外面一暗橙褐 内面一暗棕褐	良	(10%)	
第35図4	Ⅳ区1層	土師器 底部	底径 9.5	外面一撫で	白透	外面一褐 内面一棕褐	良	(70%)	内面剥落顯著
第35図5	Ⅳ区1層	須恵器 杯	口径(12.0)	輪轉成形	白透和	内外面一灰	良	(10%)	

第3号溝状遺構

団査番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第39図1	覆土	土師器 高杯		外面一磨き 内面一撫で	白透	内外面一淡褐	良	(100%)	

遺構別土師器・須恵器出土点数 ()は同一個体破片群を1点とした場合。土師器には時明不明素焼き無文破片を含む。

	1往	2往	3往	4往	5往	6往	7往	1清	2清	3清	4清	2上坑	漏横外	計
土師器	54 (48)	167 (81)	162 (124)	1408 (1123)	16 (16)	356 (188)	73 (54)	352 (346)	64 (62)	57 (56)	5 (5)	1 (1)	119 (114)	2834 (2215)
須恵器					3 (3)	6 (2)			5 (5)		1 (1)	1 (1)	16 (12)	

土師器種別口縁部・底部点数

	口縁部					底部					その他の 箒削り
	高杯	鉢脚杯	甕	壺	瓶	高杯	鉢脚杯	甕	壺	瓶	
1往	1	6	2	1	1	1	1	1	1	1	
2往	1	6	2	1	1	1	1	1	1	1	
3往	8		7	1	1	1		1			
4往	8	82	1	36	7	14	17	16	3	2	
5往		2		1							
6往	1	20	10	1	11	6					
7往	1	6	3	1	1	1		1			
1清	1	25	3	1	2	7		1			
2清		2	2								
3清		3	2	1	1			1			
漏横外		7	6					1			
計	12	162	1	73	8	20	31	34	4	2	

同一個体は1点として集計。
同一個体で口縁部と底部が残っているものはそれぞれ1点として計算。

・高杯の底部は脚部。
・底部のその他のものはミニチュア土器。
・甕・壺・瓶については次のように分類した。屈曲した口縁一溝が複合口縁一溝、屈曲した口縁全てが複合口縁及び屈曲しない素口縁一溝、屈曲した素口縁一溝。

土製品観察表

・法量標の土鍤と効能事の高さは穿孔方向の計測値で、幅は穿孔方向と直交する方向の最大値。支脚の高さは図示の縦方向。
 長さ、高さ、幅、孔径、厚さの単位はcm。重さの単位はg。()は残存部での値。
 施工欄の表記は土器に同じ。

図版番号	出土位置	種類	高さ *長さ	幅 *厚さ	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第18図8	2住床直	円柱状土鍤	2.5	2.9	0.6	22.9	撫で	淡褐色	白・透	良	100%
第20図6	3住床直	球状土鍤	3.5	3.5	0.7	35.9	撫で	淡褐色	白・透	良	100%
第20図7	3住2b層	球状土鍤	3.4	3.7	0.7	40.8	撫で、棒状圧痕	淡褐色	白・透	良	100%
第20図8	3住搅乱	球状土鍤	3.7	3.6	0.7	42.9	撫で	淡褐色	白・透	良	100%
第20図9	3住周溝式直	球状土鍤	(3.0)	3.5	0.7	29.6	孔部に刺突痕	暗褐色	白・透	不良	100%
第25図48	4住2層	球状土鍤	3.4	3.1	0.6	28.1	撫で	淡褐色	白・透	良	100% 開孔部摩滅
第25図49	4住2層	球状土鍤	3.0	3.1	0.6	(24.6)	撫で	淡褐色	白・透	良	80% 開孔部摩滅
第29図25	6住床直	球状土鍤	2.9	3.3	0.7	30.4	撫で、開孔部削りによる面取り	淡褐色	白・透	良	100%
第29図26	6住2層	土器片研磨具	*4.4	4.1	*0.8	17.3	4断面が摩滅 擦痕もあり	淡褐色	白・透	良	100%
第31図6	7住炉直上	支脚	13.5	15.9	*14.6	1,445.0	撫で・茎状圧痕	概褐色	褐	不良	100%
第31図7	7住床直	支脚	13.5	(14.3)	(13.2)	(1,296.0)	撫で・茎状圧痕	概褐色	褐	透	不良 80%
第31図8	7住床直	支脚	13.4	(15.5)	(14.0)	(1,175.0)	撫で・茎状圧痕	概褐色	褐	透	不良 80%
第12図93	3上5層直上	効能車	1.5	5.1	0.6	48.3	柳文(6本)	淡褐色	褐	透	良 100% 開口部若干 摩滅
第12図94	3上4b層上 面		*3.9	1.8	*0.7	3.6	織錦状瓦底摩擦 指跡押捺	淡褐色	白・透	良	100%
第35図6	1溝Ⅱ区2層	球状土鍤	3.1	3.3	0.6	29.9	撫で	淡褐色	白・透	良	100%
第35図7	1溝Ⅱ区1層	球状土鍤	3.3	3.7	0.7	(29.2)	撫で 孔部に刺突痕	淡褐色	白・透	良	60%
第35図8	1溝Ⅱ区1層	球状土鍤	(1.8)	(1.3)		(3.7)	撫で	褐色	白・透	良	12%

鉄器観察表

・法量の()は残存部での値。

図版番号	出土位置	器種	法量	備考
第25図50	4住床直	短基長二角形鎌	鎌身長4.1cm、鎌身幅3.2cm、鎌身厚0.2cm、重さ7.1g	茎部欠損
第25図51	4住床直	刀子	長さ(8.5cm)、重さ8.5g、刃部長(5.4cm)、刃部幅1.3cm、刃部厚0.35cm、柄部幅1.05cm、柄部厚0.25cm	刃部先端欠損 柄部に織状のものを巻いた木質部

石器観察表

・剥片の長さは剥片剥離軸方向での、第21図11の石核の長さは打面と直交する方向での計測値。

・法量標の長さ、幅、厚さの単位はcm。重さの単位はg。()は残存部の値。

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材・石質	備考
第18図9	2住6層	敲石	7.7	6.9	4.7	329.0	砂岩	
第21図10	3住2層	敲石	12.8	6.0	1.4	166.0	貝岩	
第21図11	3住搅乱	石核	3.8	6.3	2.8	60.8	玉髓(石灰質物質付着)	
第21図12	3住2層	剥片	3.6	3.4	1.2	11.1	玉髓(石灰質物質付着)	
第21図13	3住2層	剥片	2.7	3.7	1.3	10.0	玉髓	
第21図14	3住2層	剥片	4.6	2.1	1.1	6.8	玉髓	
第21図15	3住搅乱	剥片	2.8	3.7	1.1	6.3	玉髓	
第21図16	3住2層	剥片	2.7	3.3	1.9	10.8	玉髓(石灰質物質付着)	
第21図17	3住2層	剥片	1.6	1.7	0.4	1.2	玉髓	一側縫折れ面
第21図18	3住2層	剥片	2.2	2.6	0.5	1.5	玉髓	一側縫折れ面
第21図19	3住2層	剥片	2.1	2.1	0.5	2.0	玉髓	二側縫折れ面
木園化	3住1層	砂片	1.7	2.2	0.9	2.3	玉髓	
木園化	3住1層	砂片	2.2	1.3	0.8	1.8	玉髓	
木園化	3住2層	砂片	1.7	1.0	0.4	0.7	玉髓	
木園化	3住2層	砂片	1.6	0.9	0.2	0.3	玉髓	

図版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材・石質	備考
第21図20	3住1層	剥片	2.9	2.6	1.2	5.3	赤色のチャート	
未固形	3住2層	砂片	2.1	1.7	0.8	2.9	灰色のチャート	
未固形	3住2層	砂片	1.8	1.7	0.6	1.6	灰色のチャート	
第21図22	3住2層	剥片	2.4	3.2	0.5	3.5	ベグマタイト(石英質)	
第21図23	3住擾乱	剥片	2.5	3.1	0.95	4.4	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住2層	砂片	2.6	1.6	0.7	2.7	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住擾乱	砂片	2.5	2.2	0.6	2.8	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住2層	砂片	2.2	1.4	0.7	3.7	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住2層	砂片	2.0	2.0	0.6	2.4	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住2層	砂片	2.6	1.4	0.8	2.7	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住2層	砂片	2.5	1.2	0.6	1.2	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住2層	砂片	2.3	1.2	1.2	2.8	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住1層	砂片	2.3	1.3	0.7	1.5	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住擾乱	砂片	1.2	0.7	0.3	0.3	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住2層	砂片	1.4	0.8	0.3	0.3	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住2層	砂片	1.4	1.1	0.4	0.6	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住1層	砂片	1.8	0.7	0.6	0.7	ベグマタイト(石英質)	
未固形	3住2層	砂片	2.4	1.6	0.6	1.5	ベグマタイト(長石質)	
第26図52	4住2層	板状製品	15.3	6.0	0.8	97.0	点紋粘板岩ホルンフェルス	周縁を両面から剥離もしくは敲打
第26図53	4住2層	板状製品	12.0	5.4	0.7	71.0	点紋粘板岩ホルンフェルス	周縁を両面から剥離もしくは敲打
第29図27	6住2e層	砥石	(8.3)	(5.5)	5.7	(244.0)	凝灰質砂岩	同材同質の破片が他に5点出土
第12図95	3上4a面下	砾石	11.5	7.7	8.0	894.0	砂岩	欠損、感衝一面、裏・側面壓打痕
	4a層上向							波熱、8片に被砕
第12図96	3土・粘	石株?	5.2	4.5	3.6	93.0	ベグマタイト(石英質)	複数箇所に敲打痕
第35図13	1溝1区1層	砥石	(4.6)	3.0	2.9	(44.3)	凝灰質砂岩	
第37図1	2溝覆土	板状製品	9.7	6.2	2.6	195.0	点紋粘板岩ホルンフェルス	欠損、被熱赤化、全面表面、深0.6cmの孔有り
未固形	2溝Ⅴ区覆土	砂片	2.3	1.7	0.8	2.3	チャート	周縁敲打で調整
未固形	4溝覆土	砂片	2.0	1.6	0.8	2.6	チャート	
第44図2	遺構外①区	剥片	4.0	4.0	1.2	14.7	鞍山岩	

滑石製造物観察表

・双孔臼盤の大きさは表示の底方向、主要剥離面が残っている遺物の長さは剥片剥離軸方向の計測値、長さ、幅、厚さの単位はcm。重さの単位はg。
・表面は図示左側、裏面は図示右側に振示した面。

図版番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	表面	裏面	側面	備考
第43図4	1住1層	1.4	1.9	0.3	1.1	剥離	剥離		
第18図10	2住2層	4.1	6.0	2.2	51.3	剥離	自然、削り、刃痕	剥離	
第18図11	2住擾乱	2.6	1.1	0.6	1.5	剥離、削り	剥離	剥離、折れ	
第18図12	2住擾乱	2.8	1.3	0.3	1.0	節理、剥離	節理	折れ	
第26図21	3住擾乱	3.6	2.4	0.7	6.0	剥離	剥離	折れ	
第26図54	4住2層	3.3	3.9	1.1	12.0	剥離、削り、刃痕	剥離	削り、折れ?	
第26図55	4住2層	3.2	4.0	1.1	13.9	剥離	剥離	自然、節理、剥離	
第26図56	4住体質	2.8	4.1	0.6	7.6	自然、剥離、削り	削り	削り、折れ	
第26図57	4住2層	2.7	1.8	0.9	3.8	剥離、削り	自然、剥離	削り、折れ	
第26図58	4住2層	3.1	1.9	1.0	4.9	剥離	剥離	折れ	
第26図59	4住2層	2.4	1.2	1.0	2.0	削り	剥離、削り	折れ	
第26図60	4住3層	2.6	1.4	0.5	1.6	剥離	節理	折れ	
第26図61	4住2層	1.5	1.7	0.8	2.3	剥離	剥離、削り	折れ	
第26図62	4住2層	1.5	2.1	0.5	1.9	剥離、削り、刃痕	剥離	折れ	
第26図63	4住2層	1.6	1.3	0.5	0.9	剥離、刃痕	剥離	自然、折れ	
第26図64	4住2層	1.5	1.2	0.6	0.6	剥離、削り、刃痕	節理?	折れ、刃痕	
未固形	4住2層	1.7	1.0	0.4	0.7				
未固形	4住2層	1.5	0.6	0.3	0.3				
第29図28	6住2層	7.3	3.0	1.3	25.0	自然	自然、剥離	自然、折れ	
第29図29	6住1層	3.3	2.1	0.8	5.7	節理、剥離、削り	剥離、削り	折れ	
第29図30	6住1層	1.6	1.9	0.5	2.6	剥離	剥離、削り	剥離、折れ、削り	
第29図31	6住2a層	2.7	4.3	1.0	10.5	自然	自然	折れ	
未固形	6住2層	1.7	1.7	0.2	6.0				
未固形	6住1層	1.7	1.0	0.2	0.3				
第35図9	1溝Ⅳ区-65	3.0	3.1	0.4	6.5	研磨	研磨		双孔臼盤
第35図10	1溝Ⅳ区1層	2.7	2.5	0.4	5.4	研磨	研磨		双孔臼盤
第35図11	1溝Ⅳ区1層	(3.0)	(2.4)	0.4	(4.3)	研磨	研磨		双孔臼盤欠損品
第35図12	1溝Ⅳ区2層	4.2	3.4	0.6	15.6	剥離	節理、剥離、削り、折れ		双孔臼盤未製品
第44図1	遺構外③区	4.6	5.5	0.6	14.5	剥離、削り	剥離、削り	自然、折れ	

報告書抄録

フリガナ	ノナカイセキ					
書名	野中遺跡					
副書名	第2次調査報告書					
シリーズ名	美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告					
シリーズ番号	8					
編著者名	中村哲也					
編集機関	茨城県稲敷郡美浦村教育委員会					
発行機関	茨城県稲敷郡美浦村教育委員会					
発行機関所在地	〒300-0424 茨城県稲敷郡美浦村受領1460-1 〒0298-85-7631					
発行年月日	西暦2000年3月31日					
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 通路番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 調査原因
野中遺跡	茨城県稲敷郡 美浦村請領字野中 1552-1外	084425	36度 01分 11秒	140度 18分 20秒	19980403 ～ 19980608	約4,000 m ² 開発(店舗) に伴う事前 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
野中遺跡	集落	縄文時代		縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、 土師、土製纺錘車、支脚、 土器片研磨具、 鐵鎌、刀子、 敲石、砥石、板状石製品、 石核、剥片、碎片、 滑石製遺物(合双孔円盤)	古墳時代住居址で炉址を 取り囲むように土製支脚 3点が出土。	
		弥生時代	竪穴住居址 2軒 土坑 1基		古墳時代住居址出土炭化 材の同定	
		古墳時代以降	竪穴住居址 5軒 溝状遺構 4条 土坑 1基			
		時期不明	上坑 1基 ピット群 1ヶ所			

美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書 8

茨城県稻敷郡美浦村 野中遺跡 —第2次発掘調査報告—

発行年月日 平成12(西暦2000)年3月31日

編集・発行 美浦村教育委員会
茨城県稻敷郡美浦村受領1460-1
〒300-0124 TEL 0298-85-7631

Ibaraki, Nonaka Site

Miho Village Board of Education 2000